

Title	住環境デザインにおけるエスノメソドロジーに関する基礎的研究
Author(s)	森, 傑
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3184457
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

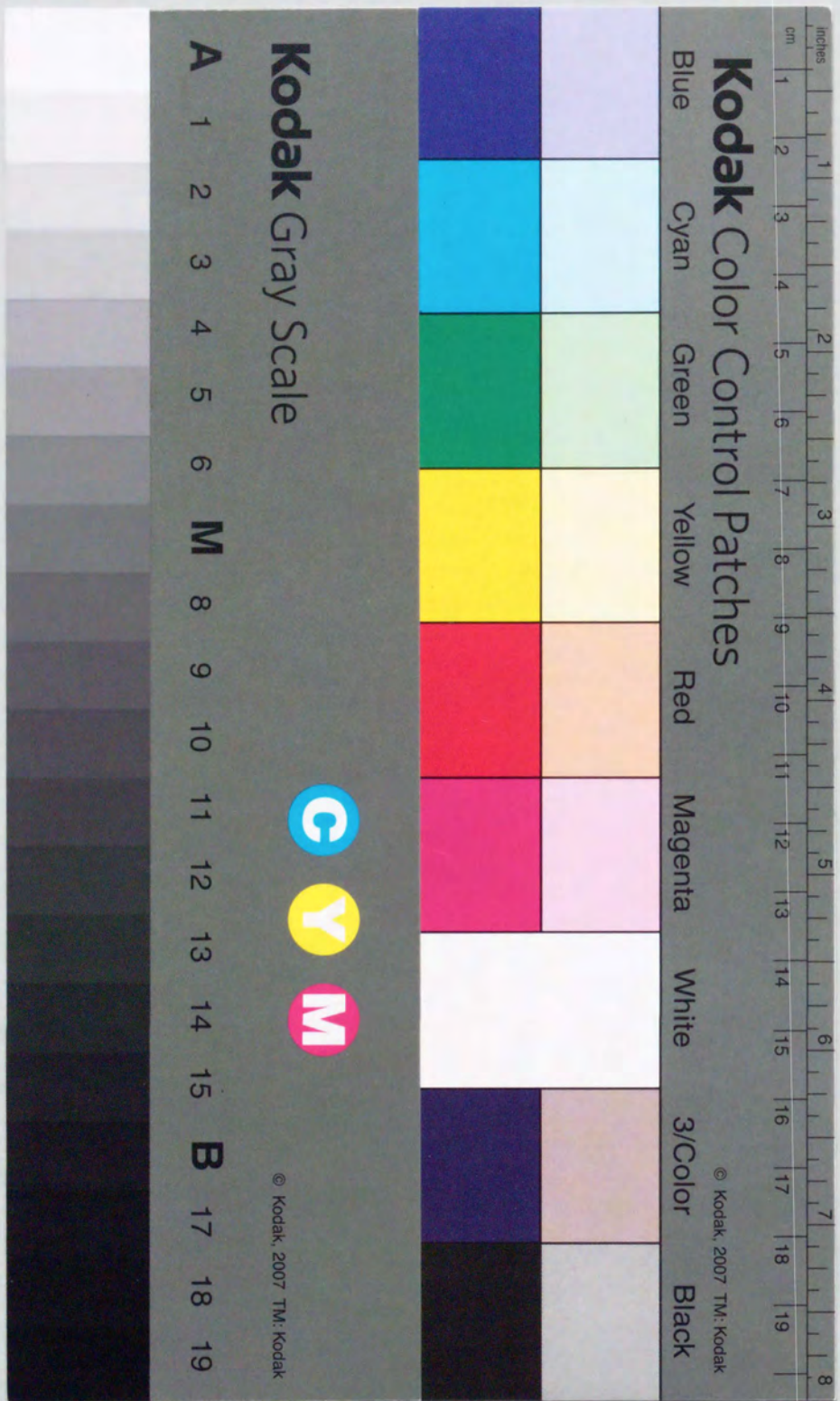
<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

住環境デザインにおける
エスノメソドロジーに関する基礎的研究

2000年

森 傑



住環境デザインにおける
エスノメソドロジーに関する基礎的研究

2000年

森 傑

目次

第1章 研究の目的・方法・意義	
1. 目的	1
1-1. デザインとコミュニケーション	1
1-2. コミュニケーションとエスノメソドロジー	1
1-3. 「Ethno-design-method」という考え方	3
2. 方法	3
2-1. 研究の基本方針	3
2-2. 研究の方法	3
3. 意義	4
3-1. 本研究の位置づけ	4
3-2. エスノメソドロジー的研究と応用	5
注	7
第2章 エスノメソドロジーと建築計画学	
1. エスノメソドロジーの概要	9
1-1. エスノメソドロジーとは	9
1-2. エスノメソドロジーの概念と語彙	10
1-3. エスノメソドロジーと会話分析	13
1-4. 会話分析とデータの記述	14
1-5. 関連分野における展開	15
2. <計画>概念に関する考察	18
2-1. <計画>概念からみた建築計画学	18
2-2. エスノメソドロジーと<計画>概念	19
注	22
第3章 社会的構造感と生産行為に関する調査研究	
1. 目的	26
2. 方法	26
3. 結果と分析	28
3-1. 結果の概要	28
3-2. 発言ラベルの抽出と分類	29
3-3. 社会的構造感	34
4. 考察	34
4-1. 生産行為の概念モデル	34
4-2. 生産行為の浸透構造	36
付1 建築主への事前アンケート	40
付2 発言ラベルのデータシート例	43
注	44

第4章 建築主と専門家の「Ethno-design-method」と役割関係に関する調査研究		
1. 目的	-----	45
2. 方法	-----	45
3. 結果と記述	-----	46
3-1. 結果の概要	-----	46
3-2. トランスクリプト	-----	46
4. 分析に関する基礎的考察	-----	48
4-1. 会話の順番取りシステム	-----	48
4-2. 会話分析と制度的状況	-----	50
4-3. 制度的状況における「Ethno-design-method」	-----	51
5. 考察	-----	52
5-1. 注文者-設計者	-----	52
5-2. 購買者-販売者	-----	71
5-3. 「Ethno-design-method」の意義	-----	84
注	-----	89
第5章 「Ethno-design-method」からみた住環境デザインの事例的考察		
1. 目的	-----	91
2. 方法	-----	91
3. 考察	-----	91
3-1. 考察対象事例の概要	-----	91
3-2. 事例的考察	-----	91
付3 NI邸・新築要望	-----	124
付4 NI邸・確認申請用図面	-----	128
注	-----	132
第6章 結論		
1. 各章の要約	-----	133
2. 総括	-----	138
3. 住環境デザインへの展開と今後の課題	-----	139
注	-----	142
参考・引用文献一覧	-----	144
研究業績	-----	148
謝辞	-----	149

第1章 研究の目的・方法・意義

1. 目的

本研究は、建築・都市環境および生活の質の改善を目指すデザインの実態、ならびにそれと密接に結びついた環境形成活動への社会的認識について、住環境デザインにおける人々のコミュニケーションに注目し、エスノメソドロジック的視点から基礎的研究を試みることを目的とする。

1-1. デザインとコミュニケーション

人々がデザインという行為を達成するためには、その具体的なオペレーションとして、コミュニケーションがまず問題となることは言うまでもない。なぜなら、デザインとは、ある（例えば「生活の質の改善」という）志向をもってなされる振る舞いとしての行為であり、かつ、人々が相互のもつ固有の資源のもとに一つの理解を構成するプロセスであるからである。

コミュニケーションとは、一方的な志向ではなく、他者を前提として行われる社会的行為としての相互行為（interaction）であるといえる。従来のコミュニケーションの研究においては、コミュニケーションは、自己と他者間の情報の移行プロセスに焦点が当てられ、その経路における諸問題や情報伝達のための媒体に関心が寄せられてきた。例えば、建築計画学においては、設計方法論としての「設計言語（design vocabulary）」への取り組みがその典型と言える。

確かに、そのような関心のもとでのコミュニケーションへの理解も重要である。しかしながら、情報の伝達は情報の理解を期待した営為である。つまり、コミュニケーションは、他者を前提とした不安定・不確実な中で行われているということがまず考慮されなければならない。そして、そのような状況があるからこそ、コミュニケーションはその必要性を生じさせているのである。その意味で、共有された理解（shared understanding）あるいは相互理解可能性（mutual intelligibility）を問うエスノメソドロジック的な研究が必要なのであり、本研究は、住環境デザインにおけるコミュニケーションの可能性・不可能性をその主題として採り上げる。

また、私たちは常識に依存せずにコミュニケーションを実践することはできない。行為の相互理解可能性を人々の常識的推論の状況的協働の達成として理解し説明することは、社会秩序の基礎を説明することにもなる。社会秩序は人々の協働的实践によって生み出され、また諸個人の行為に制約をもたらすという観点から、人々の環境形成活動への社会的認識にも焦点を当てる。

1-2. コミュニケーションとエスノメソドロジック

高山真知子によれば、「エスノメソドロジックとは、「エスノ」、「メソド」、「ロジー」の合成語で、「人々の」、「方法」、「についての研究」と理解することができる。つまり、「普通の人々は」、「日常生活の対人関係における意志疎通行為の基盤をどのようにして組み立て意味づけ理解しているのか」というそのやり方（方法）」、「についての経験的な研究」のことである。

（中略）そして、一つの場で「あたりまえ」とされることは、その場の成員の無意識的だが積極

的な叙述行為の産物としてそのつどそのつど形成され維持されてゆく、ということを明らかにしようとするのである。1) ”

エスノメソドロジーの研究の対象は「人々の意志疎通行為」であり、コミュニケーションにおける「相互理解可能性」である。

エスノメソドロジーを紹介する文献において、フランツ・カフカの有名な短編「掟の門²⁾」が引用されることがある。万人に開かれていると期待していた門を目指しある田舎から来た男は、門番に入りたければ入ってもよいと言われながらも、門番の屈強な姿と脅し文句も相まって入ることを躊躇する。そして結局、衰弱するまでその門番の傍らに座り続け死んでしまうという物語である。

カフカの「掟の門」を通して見えてくることは、コミュニケーションの可能性・不可能性という問題である。

物語の男は、その門は万人に開かれていると信じ込んでいた。門番の屈強な姿と脅し文句から判断し、待っていたほうがいいと思ひ込む。そして彼が最後に目の当たりにするのは、その門はその男一人のものであったという事実である。つまり、物語の男の判断の根拠は全て彼の常識に従っていたわけであり、その常識も含め、彼が門番との間で共有していると思ひ込んでいた合意、「万人に開かれている」という共通認識は最初から成立していなかったのである。

ある社会において自明であった常識や慣習も、別の社会においてはそうではないというコミュニケーションの不可能性を示しているのである。また逆に、コミュニケーションが可能だということは、ある社会のメンバーによってのみ当然のものとされるし、その自明性さえもその場その場の達成物であるということになる。

ハロルド・ガーフィンケル³⁾は、物語の男のような態度は私たちの社会生活一般に見られる態度であるとする。そして、ある社会集団において通用している常識を疑問なく受け入れ、それに忠誠を尽くす人々のことを「誠実な成員 (bona fide collectivity member)」と呼んだ。そして、この物語の男は、常識に忠実に振る舞うことによって現実に対応する判断を喪失する「判断力喪失者 (judgmental dope)」となったのである。

私たちは、いつ何時も何らかのかたちでコミュニケーションを達成している。それは、ガーフィンケルの言葉を借りれば、私たちはある社会集団のメンバーであることによって、ある社会的場面を状況に即して見て言う (looking-and-telling) ことで適切に説明 (accountable) しているからである。ところが、カフカの提起する問題は、常識も慣習も異なる人々、つまり異なる社会集団に属するメンバーが向き合ったとき、常識にしたがって判断するしかないと思ひ込む状態が起こるということを示しているのである。

本研究は、住環境デザインにおける種々の問題は、関係者の相互理解によって解決され、共通目的、共通認識のもとで設計・計画が実行されているという自明性こそがまず疑われなければならない、ここから出発する。それはつまり、デザイン・コミュニケーションの自明性を疑うことで、私たちがどのようにデザインを実践しているのかそのやり方を捉えようとする試みであ

る。

1-3. 「Ethno-design-method」という考え方

本研究の視座を明確に位置づけるために、ここで「Ethno-design-method」という用語を定義する。

「Ethno-design-method」とは、エスノメソッド (Ethnomethod) とデザイン (Design) を組み合わせた造語である。高山真知子の言い回しに倣って言えば、「人々は、デザイン活動におけるコミュニケーション (意志疎通行為) の基盤をどのように組み立て意味づけ理解しているのかというそのやり方」であり、人々がデザイン行為において達成している実に様々なことを遂行するために使っている、様々な手法や手続きをいう。「Ethno-design-method」研究は、そういった手法や手続きを分析することで、いかに人々はデザインという行為を実践し、社会生活を実現しているか、そしてしていくべきかをテーマとしている。エスノメソドロジーにその知的態度の基盤を負い、その研究手法は会話分析が主となるが、分析対象が会話言語に限られるものではない。

2. 方法

2-1. 研究の基本方針

住環境デザインは、固有の状況における様々な文脈の中で実践されている。本研究はその基本的な方針として、その網羅的・統括的な把握ではなく、固有の状況の中に見出される本質的な実態を捉えることを目指す。つまり、特定のデザインを批判することではなく、むしろ目的的な行為に関するある種の前提 (仮定) を具体化することとしてデザインを見ることである。したがって、課題はこれらの前提を明確にすることであり、どのようにそれらがデザイン・コミュニケーションの基礎として成功するか、また、失敗するかを知ることであり、またその実践を「Ethno-design-method」という視点で捉えることである。さらには、相互理解可能性からみたそれらの成功と失敗の意味を探求することである。

2-2. 研究の方法

本研究における研究方法は、基本的に現場を重視した質的調査法による。具体的には、非統制的観察法およびインタビューの二つの調査技法を用いる。

非統制的観察法は「非参与観察」と「参与観察」の二つの性格に分けられる。本研究においては、調査者は観察の場において研究者という身分を明示して状況に参加する。この点において、参与観察の立場をとる一方、そのプロジェクトへの実質的な内容には全く関与しない。つまり、全く会話的コミュニケーションに参加しないという意味で、非参与観察の立場をとる。つまり、調査対象者の部外者から観察されているという意識をできる限り取り除くと同時に、調査者が参加した社会や集団において与えられた地位や役割に過剰に依拠してしまうことによる参加と観察の

パラドックスを避けることで、対象や内容、状況などを統制せずに、できる限り自然なかたちで観察することを意図している。

また、インタビューは調査者の解釈枠組みを前提にした質問を行うことを極力避ける「非指示的面接」の立場をとる。調査対象者の意識や行動様式の構造のありようそれ自体を発見し、調査対象者自身の観点から調査課題に対する解釈や意味づけを得ることをねらいとしている。

一般的に、質的調査法は集約的で記述的なデータが採取されやすく、現実の実態に接近したデータとなると理解されている。その反面、アンケート調査や実験法などの量的調査法のように、広範囲で計量的なデータを採取することができないため、データの「代表性」に欠けることも指摘されている。したがって、質的調査法は、量的調査法の不備を補う補足的な位置づけで理解されることが多い。

しかし、そのような評価は、両者によって収集されるデータの特性の違いに十分な関心が向けられてのものとは言い難い。

そもそも研究方法の設定は、研究上の課題選択やその理論的背景などから切り離して考えることはできないものである。「方法」を学問的な認識を実際の経験によって検証し確認していくための手立てとして位置づけるのならば、本研究の「方法」は、前述した研究の「目的」に即して、社会的事実と人々の理解の構造を抽出し「了解可能性4）」を追究するものとして必然的かつ適切な選択であり、量的調査法に対する残余的な方法として判断・評価されるものでは決していない。

3. 意義

3-1. 本研究の位置づけ

日本の経済成長や種々の政策・制度の充実により、いまだ高価であるものの住宅の購入が以前に比べ容易になったといわれる現在、一般の人々の住環境デザインに対する注目や期待はいっそう高まりつつある5)。そのような社会的状況に対応すべく、近年、例えば住宅設計におけるプランやプロセス、住宅産業、そして日常生活における情報媒体に至るまで、人々の住環境デザインにおける供給システム、合意形成、住宅生産構造、人々の価値観やライフスタイル等に関する数多くの研究が意欲的に取り組まれている6)。

その中でも、近年、特に人間-環境系デザイン研究において、アクション・リサーチ7)の視点に注目した、研究の実践的フィールドへの関わりを回復させようとする試みが活発になりつつある。例えば、乾亨・延藤安弘・森永良丙によるコーポラティブ・ハウジングの計画過程に注目した一連の研究8)が代表的であろう。しかし、住環境デザインに関連する既往研究の多くは、アンケート調査やヒアリング調査の要約に近い漠然とした全体像を示すに留まっており、住環境の個別性や多様性がますます強調されるに従い、住宅づくりの実態を詳細に把握し、研究成果のデザイン活動の実践へ還元が強く求められる中、それらの取り組みが十分な成果足りえていないのが実状である。

住環境の獲得、とくに注文住宅を発注するという状況は、注文-受注生産ゆえに、他のあらゆる購買品あるいは商品の獲得とは異なり、設計・工事請負契約時には実際の建築物が存在しないという独特の性質を持っている。このような性質によるデザイン活動においては、コミュニケーションの内容と質こそが、将来獲得する住宅を保証あるいは評価する根拠となる9)。一方、近年にはホームページ上でのプレゼンテーションによるコンペ方式の注文受注システムやE-mail交換による打ち合わせのように、住環境デザインにおけるコミュニケーションのあり方自体の多様化によって、デザイン・コミュニケーションへの注目はますます高まりつつある10)。しかしながら、人々が実際に住環境デザインに取り組むまさにその実態と方法に注目したコミュニケーションの研究は必ずしも十分には行われてきていない。

一方、研究の理論的枠組み、哲学的基盤、そしてそれに基づく研究の方法に関する論議も積極的に展開され、さらなる理論的發展を目指そうという動きが見られる11)。人間-環境系デザイン研究においては、人間と環境の関係に関する理論的アプローチの検討としてのトランザクショナルリズム12)への関心があげられよう。しかし、そのような立場からの研究方法への具体的展開が十分になされているとは言い難い。

本研究は、エスノメソドロジーのもつ哲学的基盤・知的態度のもと、住環境デザインにおける「Ethno-design-method」という事象に注目し、観察調査そして会話分析という取り組みを通じて、説明理論としての意義と可能性を模索すると同時に、住環境デザインにおけるコミュニケーション研究の重要性を示すことで、今後の学術的展開に対して有効な視点を提供するものとして位置づけられる。

3-2. エスノメソドロジー的研究と応用

エスノメソドロジー的視点による「デザイン」の把握は、人々がどのように生活の質の向上を目指すのか、そのやり方を明らかにし、またその理解を通してどのように生活の質を向上させるのか、を今後の住環境デザインの中へ反映させる上で、基礎的な資料を提供するものとなるだろう。そこにおいては、主に以下の三つのテーマが設定できると考えられる。

(1) 研究によるデザイン経験の蓄積

エスノメソドロジー的視点の導入によって、研究が一般の人々の日常的・社会的な出来事への理解へ接近することが可能となると同時に、その内容の「厚い記述13)」を目指すことで、研究成果が住環境デザインにおける共有された経験となることのできる。

(2) 研究の臨床的展開

研究による住環境デザインの「厚い記述」の実践により、研究自体への徹底した反省作業が可能となる。住環境デザインを「経験」として「何を・誰が・どのように、記述するのか」という問題を、その記述の営みの中でこそ反動的に取り組みすることで、研究の「臨床的」な意義を蓄積させ

展開させていくことができる。

(3) 研究の実践的フィールドへの還元

(1) および(2)の研究が目指されることで、研究の実践的フィールドへの還元可能性を模索することができるだろう。例えば、「研究と実践との分離は科学哲学には存在せず、研究は現実を理解し変えることである」との見方から、「研究の応用は研究と行為との循環を通じて遂行される」ことを強調するワン・コミュニティ理論¹⁴⁾の本質的・実質的展開が期待できる。

注

- 1) ケネス・ライター、高山真知子訳、『エスノメソドロジーとは何か』、新曜社、1987、pp.327。
- 2) フランツ・カフカ、池内紀編訳、『カフカ短編集』、岩波文庫、1987、pp.9-12。
- 3) H. Garfinkel, "Studies of the routine grounds of everyday activities" in Studies in Ethnomethodology, 1967. H・ガーフィンケル、「日常活動の基盤」、サーサス・ガーフィンケル・サックス・シエグロフ、北澤裕・西阪仰編訳、「日常活動の基盤」、『日常性の解剖学』、マルジュ社、1989、pp.78-79。
- 4) 見田宗介、『現代社会の社会意識』、弘文堂、1979、pp.139-140。
- 5) 池上博史、『よくわかる住宅産業』、日本実業出版社、1995、三島俊介・檜山純一、『住宅産業のマーケティング戦略』、産能大学出版部、1996、住宅政策研究会編、建設省住宅局住宅政策課監修、『新時代の住宅政策 第七期住宅建設五箇年計画のポイント』、ぎょうせい、1996、等を参照。
- 6) 松村秀一・黒野弘靖・日高頭一・江袋聡司・小野宗良・斉藤朝秀、「注文住宅設計における意思決定に関する研究」、『日本建築学会学術講演梗概集』、1989、pp.497-504、松村秀一、「戸建住宅生産主体の分類可能性に関する考察」、『財団法人 住宅研究総合財団 研究年報』No.26、2000、pp.31-42、伊東康子・高田光雄、「住宅復興過程における親族関係と居住ニーズに関する事例研究」、『都市住宅学会』15号、1996、pp.90-95、伊東康子・高田光雄、「戦後日本におけるく家族と住居の近代化>に関する研究 千里ニュータウンにおけるケーススタディ」、『日本建築学会計画系論文集』第514号、1998、pp.71-78、倉原宗孝・後藤由紀、日景敏也、「子どもたちの体験活動による住民参加のまちづくり促進に関する考察」、『日本建築学会計画系論文集』第483号、1998、pp.179-188、沢田知子・丸茂みゆき、「二段階供給方式による集合住宅の居住過程に関する考察 ライフステージによる住要求変化からみた住宅供給方式について」、『都市住宅学会』11号、1995、pp.68-73、等の研究が挙げられる。
- 7) 前掲書6)を参照。
- 8) 乾亨・延藤安弘・森永良丙、「価値づくりの計画プロセスにおける住み手の計画側への役割の浸透 ユーコートの計画プロセスにおける住み手とコーディネーターの相互浸透性1」、『日本建築学会計画系論文集』第446号、1993、pp.53-63。
- 9) 森傑・舟橋國男・鈴木毅・小浦久子・木多道宏、「戸建注文住宅における生産行為に関する研究」、『都市住宅学会』第6回学術講演会審査付部門、1998、pp.71-76。
- 10) 『建築Web』、<http://www.kentiku-web.com/index.htm> 等を参照。
- 11) 小島孜、「創造的合意形成に向けての方法論的考察 芦屋西部地区復興まちづくりの中間総括」、『日本建築学会計画系論文集』第524号、1998、pp.327-332。
- 12) トランザクショナリズムとは、環境と人間とを一つの行動の中の働きとみる立場で、全体をなす各々の側面間の変化しつつある関係性に焦点を当て、人とそのコンテキストは互いに定義し

あい、全体的事象の意味と性質を決めると仮定する視点である。詳しくは、舟橋國男、「環境行動研究におけるトランザクショナルリズムに関する考察」、日本建築学会近畿支部研究報告集、1989、pp.237-240、を参照。

13) Clifford Geertz, "The Interpretation of Cultures", Basic Books, 1973. クリフォード・ギアーツ、吉田禎吾他訳、『文化の解釈学』、岩波書店、1987。特に、第1章「厚い記述」を参照。

14) 舟橋國男、「環境行動デザイン研究と計画理論」、日本建築学会編、『人間-環境系のデザイン』、彰国社、1997、pp.53。

第2章 エスノメソドロジーと建築計画学

1. エスノメソドロジーの概要

1-1. エスノメソドロジーとは

エスノメソドロジーの創始者であるガーフィンケルは、「エスノメソドロジー」という呼び名の由来に関し次のように述べている1)。

“エスノ (ethno) という言葉は、ある社会のメンバーが、彼の属する社会の常識的な知識を、「あらゆること」についての常識的知識 (commonsense knowledge) として、なんらかの仕方を利用して利用できるということを示す。エスノボタニー (ethnobotany) の場合、それは当の社会のメンバーが植物をめぐる事柄を扱うのに適切な方法は何かについて、メンバーが持つ知識や理解と何らかの仕方に関係がある。(中略) メンバーであれば、仲間たちの中で自分の仕事を行うときに、エスノボタニーを行為や推論の適切な基盤として用いるだろう。「エスノメソドロジー」という概念や「エスノメソドロジー」という言葉は試してみればこんな簡単なことなんだ。”

この有名な一節だけでは、おそらく明瞭にはつかめない印象を受けるに違いない。高山真知子が「エスノメソドロジー」を簡明に説明しているのを、以下に引用する2)。

“エスノメソドロジーとは、「エスノ」、「メソド」、「ロジー」の合成語で、「人々の」、「方法」、「についての研究」と理解することができる。つまり、「普通の人々は」、「日常生活の対人関係における意志疎通行為の基盤をどのようにして組み立て意味づけ理解しているのか」というそのやり方(方法)」、「についての経験的な研究」のことである。(中略) そして、一つの場で「あたりまえ」とされることは、その場の成員の無意識的だが積極的な叙述行為の産物としてそのつどそのつど形成され維持されてゆく、ということを明らかにしようとするのである。”

以上のことから、ガーフィンケルが構想したエスノメソドロジーは、人々が様々な物事や出来事を日常生活の中で達成するやり方を主題に据える学問的営みであることがわかるだろう。アラン・クロンも、そうした「人々のやり方」のことを「エスノメソッド (ethnomethod)」と呼び、「エスノメソドロジーの科学的プログラムとは、人々が日常生活において達成している実に様々なことを遂行するために使っている、様々な方法や手続きを分析すること」と述べ、「エスノメソッドこそエスノメソドロジー研究の中身となるもの」と指摘している3)。

したがって、エスノメソドロジーでいう「人々」とは、ある共同体で通用する「エスノメソッド (ethnomethod)」を自然言語の習得 (mastery of natural language) とともに身に付け、それを無批判的に実践する「メンバー(成員)」のことを意味する。つまり、日常世界を生きるメンバーたちは、知らず知らずのうちに常識的知識の期待に沿うよう行動し推論しあっているものであり、このことから常識的知識が現実の社会を描き出すことになるのである。そして、そのような人々の何気ない日常活動のやり方を明るみに出そうとするのが、エスノメソドロジーの基本的な研究方針なのである。

ここでいう「常識的知識」は、ガーフィンケルが『Studies in Ethnomethodology (エスノメソドロジー研究)』の中で「背後期待 (background expectation)」と呼んでいたものにさかのぼる4)。「共通理解の背後にある「見られてはいるが気づかれない (seen-but-unnoticed)」基盤は、どのような諸期待から成り立っているのだろうか”

ガーフィンケルは、「違背実験5)」を通して、私たちがこの世界を「歴然たる当たり前の事実」として捉えていること、しかもこれは当たり前のことであるために、世界の様々な特徴は「見えているが気づかない (seen-but-unnoticed)」背後期待 (background expectation) となっていることを示した。私たちは相互行為において常にこの背後期待を参照することによって具体的な状況の意味を他者とともに共通に理解することができるとした。

「共通理解 (commonsense understanding)」、この捉え方にエスノメソドロジーの一つの特徴が現れる。「共通理解」というと、そのような「共通理解」は背後期待あるいは常識的知識が実質的に行為者によって共有されるから可能なのだと、一般的にはそう理解されるに違いない。しかし、エスノメソドロジーの捉え方は異なる。背後期待を通した共通理解とは、インデックス的表現や行為を相互反映的に「修復」することによって、その都度、あらゆる実践的目的に適切な「理解」が達成されるに過ぎないことであると見る。ここでいう「インデックス性」や「相互反映性」は、エスノメソドロジーの中心的な考え方として後に述べることとする。

“共通理解が可能となるのは、社会構造について範囲が厳密に規定されている知識を共有しているからではなく、もっぱら日常生活についての「背後」期待にそって行為することが、道徳的なこととして強制されているからに他ならない。社会の成員にとり、社会生活上の諸事実についての常識的知識は、現実の世界についての制度化された知識なのである。(中略) この場合、成員が自ら進んで従う背後素地とは、その社会の「内部から」見えるがままの社会生活に関する信念の正当な秩序のことである。成員の視点に立った場合、成員が背後素地にあえて従おうとすることは、「社会における歴然たる当たり前の事実」を把握しそれに承服することに他ならない。6)”

つまり、エスノメソドロジーの最大の意義は、社会秩序の成立がいかんにか人々自身の実践的認識・理解・説明活動に依存しているか、その世界の記述を現象学的視点から一つの学問的理論として構築を試みたことである。それはつまり、“従来の社会学の研究対象が、社会的行為の原因を探ることであったとすれば、エスノメソドロジーの対象は、社会の成員はどのようにしてある行動 (behavior) を社会的な行為 (action) として認知するのかである。7)” ということであり、そしてまた、アルフレッド・シュッツの「主観的観点8)」という哲学的基盤にたち、複数の行為者が同じ対象を「目指すことは、いかにして可能かを問うことを、「エスノメソッド (ethnomethod)」という理論をもってその分析対象を明示したことである。

1-2. エスノメソドロジーの概念と語彙

エスノメソドロジーの社会学における位置づけに関しては、様々な見解が主張されている9)。ある場合には、現象学的社会学として位置づけられるし、一方では、シンボリック相互作用論の

一つとして見られることもある。その理由は、エスノメソドロジーのもつ哲学的基盤の微妙さにあると考えられる。

例えば、山田富秋は、エスノメソドロジーの成立当初から潜在している理論的分岐点を、「現象学的な視点」と「ウィトゲンシュタイン的な視点」の二つに分け、次のように指摘する10)。

“一方で現象学から継承したものは、生活世界の自明性を現象学的に疑う態度である。この視点は社会がそもそも私たち成員の協働を通して構成されるという社会構築主義 (social constructivism) の主張を導く。ところが他方で、ウィトゲンシュタインのある解釈にしたがえば、世界を疑うことは原理的に不可能であり、それは私たちの協働的な言語使用によって、すでに解決されていることになる。したがって哲学者の仕事は、具体的な言語使用を無視することによって可能となった「基礎づけ主義的 (foundational) 理論」が根本的に疑似問題であることを示すことになる。(中略) この二つの立場は、一方は世界をその基礎づけから疑い、他方はありのままに受容するという点で、最終的には相いれない。”

確かに、山田が指摘する問題は非常に根深いものである。特に、会話分析に対する立場に関しては、近年においても激しい議論が繰り広げられている11)。しかしここでは、本研究が「エスノメソドロジー論」そのものの研究でないこと、そして、このような「そもそもエスノメソドロジーとは」という問いに答えるという作業が、建築計画学という研究領域において、どの程度の生産性があるのかという点から、この二つの視点の問題の結論を導くことは試みない。しかし、上述の問題が解決されないからといって、エスノメソドロジーの新鮮さが失われることはないと考えている。むしろ両者の微妙さを内包しているからこそ、エスノメソドロジーが注目されるゆえんであろう。

“エスノメソドロジーは一つの理論であるというよりはむしろ、研究の視点であり、新しい知的態度である。12)”

クロンは、エスノメソドロジーをこのように表現したうえで、伝統的な社会学的思考からの脱却を次のように述べる13)。

“エスノメソドロジーは、常識からたもとを分かつことで成立しデュルケームの社会学の定義を反転し、私たちは自己の社会的存在を組織化するために、自分自身の行為について適切な説明をすることができるということを証明する。”

1960年代にアメリカ社会学の中から生まれたエスノメソドロジーの批判対象は、「伝統的な社会学」の実証主義的・機能主義的傾向であった。ガーフィンケルも、社会的事実の客観的現実を社会学の研究対象に据えるという社会学的立場に異を唱え、社会的現実とは絶え間なく行為者によって「協働達成される何か (concerted accomplishment)」であるという立場を徹底的に強調している。そして、社会的現実が相互行為という実践を通して協働達成される何かだとすれば、相互行為の行われる現場に研究関心が向けられなければならない。

“常識的知識と常識的活動を研究しようと思うならば、社会の成員たちが、実際にどのような方法を用いて、素人であれ専門家であれ、何らかの社会学をしながら、日常活動の社会構造を目

に見えるようにしていくのかということ、このことをそれ自体問題のある現象として取り扱って
いかなければならない。14) ”

こうして、ガーフィンケルはエスノメソドロジーに特別な語彙を与えた。この語彙は全く新しく
生み出されたものというわけではなく、エスノメソドロジーは専門用語のいくつかを他の領域
から借用している。例えば、「インデックス性 (indexicality) 」は言語学からきており、「相互
反映性 (reflexivity) 」は現象学から採用した。エスノメソドロジーはまた、普通に使われる言
葉に新たな意味を付加し専門用語にしたものもある。例えば、「説明可能性 (accountability) 」
がそれである。

このような専門用語それぞれの意味内容を正確に把握することは決して容易なことではないが、
エスノメソドロジーの知的態度を理解するうえで、最後に先にあげた三つの語彙についての若干
の説明を行う。

(1) インデックス性 (indexicality)

ガーフィンケルは、言語表現・行為とコンテキストの不可分な関係を強調するために、「文脈
表示的表現 (indexical expression) 」という表現を使用した。日常の生活において、私たちは
「常識的知識」を駆使して、自らの行為の目的や手段、そしてそれらの適切な関係に表現 (言語
表現) を与える。そのような「文脈表示的表現」は、科学的研究の言うところの「客観的表現
(objective expression) 」がもつ特性は欠けているが、私たちの日常の行為においては文脈依存
性こそが常態であり、そのような「文脈表示的表現」はある程度特定できるというものである。

この概念は比較的理解しやすいものであり、言語活動 (会話) の文脈依存性を徹底的に強調し
たものと考えてよいと思われる。ことばは、その発話の文脈状況を与えられてはじめて完全な意
味を持つようになる、あるいは様々に解釈可能であるという曖昧さがあるというものである。

「インデックス性」とは言語学から採用された専門用語であるが、エスノメソドロジーにおい
ては、それは言語全体に当てはめなければならない特徴である。つまり、「インデックス性」は、
言語学において指示詞と呼ばれるものだけに結びついている特徴ではない。なぜならば、私たち
の日常の生活は際限のない「インデックス性」を帯びているからである。高山真知子は、次のよ
うに説明する 15) 。

“エスノメソドロジーが現象学の立場から問題にしているのは、この文脈そのものの意味も、
さらにもう一次元別の文脈によって説明されないと明らかにはならないという風にして、文脈は
無限に下降してゆき、したがってことばの意味は本質的に未決定・開かれた部分を持っている、
ということなのである。そしてどの文脈も、「文脈状況表示性 (ここでいうインデックス性) 」
という性質を帯びているゆえに、究極的なメタ・ルールにはなりえない、とエスノメソドロジー
は考えるのである。”

(2) 説明可能性 (accountability)

ガーフィンケルは、社会秩序維持のメカニズムを、行為者の知識運用の局面で見る場合、行為
者の説明行為に注目すべきだという。すなわち、行為者が行為の状況内で、知識運用、あるいは
状況認識に関して、何らかの緊張が生じた場合、あるいは、生じる恐れがある場合、それを調整
するために、そういった状況認識を互いに納得できるようなかたちで、巧みに説明可能にしてい
く諸手続きそのものが、エスノメソドロジーが関心を持つ局面にほかならない。

言い換えると、人々がある場面で、当の場面に合った実践的目的に合うやり取りをするため
には、その場面に何が適切な (relevant) 言動であるかを互いに把握する (know) ことが必要であ
るが、やり取りそれ自体が「観察可能で報告可能な (observable and reportable) 」かたちで実
践されるため、当の問題を解決するために互いの言動を利用することができる。したがって、人々
が日常的な活動を通して生成する地上活動の場は、そうした場を「説明可能 (account-able) 」
なものとして特徴づけることができ、だからこそ、人々の活動が「観察可能で記述可能」となる
のである。

(3) 相互反映性 (reflexivity)

「相互反映性」は、社会という枠組みを記述すると同時に構成する実践のことである。つまり、
当該行為を「観察可能で報告可能な (observable and reportable) 」かたちにするような特徴の
ことである。私たちは、日常の生活の中で、私たちのしていることが同時に、私たちのしている
ことの意味や秩序あるいは合理性を組み立てていることに気づきはしない。

“社会の成員にとり、社会生活上の諸事実についての常識的知識は、現実の世界についての制
度化された知識なのである。しかも、常識的知識は、ただ単に成員たちにとっての現実社会を描
写するというだけではない。成員たちはまた、自分たちのこの背後期待に自ら進んで従うこと
により、自己成就的な予言 (self fulfilling prophecy) をしながら、その期待どおりに現実社会の
諸特徴を生みだしていくのである。16) ”

つまり、私たちの行為の実践が常識的知識あるいは背後期待を構成し、私たちの行為の実践は
その自明の局面である常識的知識・背後期待を足場にするという関係性のことを示す概念である。

1-3. エスノメソドロジーと会話分析

会話分析 (Conversation Analysis) はエスノメソドロジーから生まれたものにもかかわらず、
最近では研究範囲が広がっていくにつれて、社会心理学、語用論、ディスコース分析、社会言語
学、認知科学などの分野とも密接に関係してくるようになってきている。

エスノメソドロジー研究において会話分析を積極的に推し進めたのは、ハーヴィ・サックスと
彼の共同研究者であるゲール・ジェファーソンそしてエマニュエル・A・シェグロフである。彼
らは、会話の開始、発話の順番取り、会話の役割交替、会話の終結、割り込みなどについての一
連の研究を発表した 17) 。

サックスたちがその一連の研究の中でも繰り返し強調しているように、会話分析は言語そのものの研究ではない。それはあくまでも、会話に注目した社会的行為の秩序に関する研究である。エスノメソドロジーとしての社会学としての会話分析は、単に会話の言語的特徴に注目した談話分析を行うというよりも、むしろ人々が日常の場面でどのような振る舞い方をしているか、日常の現実がどのように協働達成されているか、に主要な関心が向けられているところに、言語学的な会話研究には見られない特徴がある。

つまり、会話分析は社会学研究を目指し生み出された方法なのであり、そしてまたサックスは、一貫して社会現象を直接に観察し、その正確な記述を目指し、その記述を読者が同じように構成できるだけ十分な情報がその記述に含まれているような社会学、つまり「観察科学」としての社会学を構築しようとしたのである。

“私は、読者が、著者と同じ情報を持ち、その分析を読者が再構成できるような社会学を発達させようとしているのである。18)”

それゆえに、エスノメソドロジーにとって会話分析は必要不可欠な存在なのである。ジョージ・サーサスも次のように明言している。

“社会的相互行為はもともと社会生活の研究者が関心を寄せてきた現象だが、大きな問題は、どうやって相互行為を研究するか、つまり様々な社会的行為がどのように組織されているかを発見しその特徴を記述し分析するときに、科学的に厳密な方法を使い、同じ現象を調べる他の研究者も同じ結果を得られるようにするにはどうすればよいか、ということだった。会話分析、相互行為の中のトークの研究は、日常の社会的行為を研究するうえでこうした望ましい結果を手に入れる方法論的アプローチの代表である。会話分析は、社会的行為を研究するための厳密で体系的な手続き、さらに再現性のある結果も得られるような手続きを発展させたのである。19)”

会話分析が拠って立つ方法論的な視点の特徴は、社会的行為、つまり多種多様なありのままに生じる相互行為的な現象の諸特性を記述し分析することを目的とした分析的アプローチだということである。会話分析の研究対象は社会的行為の秩序・組織・規則性であり、基本的な研究方針はこのような現象の発見と分析に向けられているのである。

1-4. 会話分析とデータの記述

直接的な住環境デザインの状況を記録した録音テープは、本論文の中で提示される論文データの実際の時間経過の数十倍にも及ぶ膨大なものとなっている。短い調査期間の事例の場合でも、一回の打ち合わせの観察で得られた約2時間の録音テープが詳細に検討され、また、最も調査期間の長い事例からは、一年にわたる観察過程で得られた録音テープの検討を踏まえて、数分の長さのデータが詳細に記述される。

データの性格上、このような記述態度に対しては、従来から繰り返し疑問が提起されてきた。それは言うまでもなく、「他の参与者であればそのような言い方はしないのではないか」といった観察結果の「一般性」という観点からによるものであったり、またあるいは、「調査観察者に

よって、例えば、会話における「割り込み」を「割り込み」と判断しないのではないか」という記述あるいは分析の「妥当性」という観点からによるものである。

確かに、本研究でいう記述とは「会話」という限定の中での記述である。したがって、私たちがその現場で感じる雰囲気やニュアンスあるいはその環境状況までを完全に含めたかたちでの十分な描写ではない。しかしながら、私たちは様々なかたちの活動を通して社会生活を営んでいるが、そのような社会的現実を構成する有力な活動として最も頻繁に現れかつありふれたものが「会話」でもある。「会話」という表現および行為は、その都度の文脈に応じてしかるべき意味を持つ。言語的もしくは非言語的な振る舞いによって、そこに何かがあること、このことは名指すことができる一つの事実である。そして、私たちは、それが事実であることについて互いに認めあうことができる。

つまりその記述は、私たちが普段物事を記述する際にしている基準に従い、そして私たちは、すでに持っている基準と照らし合わせることで、その記述が良くできたものであるのか、そうでないのかということ判断することができる。これこそが、エスノメソドロジーが観察科学としての方法として会話分析を開拓した最大の意義であり、そして、このような記述があつてこそ、記述そして研究自体への徹底した反省作業が可能となるのである。

したがって、本論文において実際に提示されるデータが比較的少数の事例であったとしても、その背景となっている膨大なデータの大部分が無駄なものであることを意味しない。むしろ、そういったデータ全ての詳細な検討から、そこに見られる本質的な「問題（社会秩序）」を最も適切に提示しうる微細な部分が便宜的に選択されているのである。

本研究の記述的立場は、ある人物がどのような言い方をし、それがどの程度の一般性を示すかという点にあるのではなく、どのような人々の微細なやり取りであれ、それは、私たちの社会生活を構成し運用する「方法（ethnomethod）」として記述可能であり、そのような方法によって、その状況が社会現象として説明可能となっている実態を提示することにある。言い換えれば、それはつまり人々の実践的認識・理解・説明活動に着目するエスノメソドロジー的関心でもって取り込まれるものであり、今・そこで設計打ち合わせというコミュニケーションが、どのようにして組み立てられているのか、その人々の方法を抽出し記述することである。

1-5. 関連分野における展開

(1) 認知科学分野における取り組み

現在の認知科学の流れには、相対する二つの流れが見られる。一つはデカルト主義的な二元論を基礎とする伝統的認知科学であり、もう一つは「状況的認知」と呼ばれるものである。

ジェイムズ・ジェローム・ギブソン²⁰⁾は、認知心理学のラディカルな批判者として有名であるが、ギブソン理論と現在の「状況的認知」との接点を述べたのが、上野直樹である²¹⁾。彼は、ギブソンの立場を「相互行為主義（interactionism）」とし、状況的認知の立場からのアフォーダンス²²⁾の再考を通して、ギブソンの取り組みの潜在的可能性の再評価を試みている。

そして、ギブソン理論の延長には「相互行為をより徹底する方向」と「アフォーダンスに関する要素主義、客観的実在主義によって、認知心理学へ回帰していく方向」があると指摘し、次のように結んでいる。

“人間の知覚システムは、身体-行為的に移動したり、行為するだけで情報を取りだしているのではなく、社会的-道具的に環境をデザインし、知覚的なフィールドを構成しつつ対象や環境を相互に理解可能 (intelligible) にすることを通して知覚的行為を組織化しているのである。このようにして、知覚とは、対象、事態、環境といったものを相互に観察可能 (observable)、説明可能 (accountable) なものを通して知覚的行為も観察可能、説明可能にする状況的实践に埋め込まれているということができる。”

現在、「状況的認知」において最も盛んなのは、人間が作り出した道具であるアーティファクト (artifact) の研究²³⁾ やコンピューターを媒介にした複数の人間の共同作業を研究する分野 (CSCW, Computer-supported-cooperative-work) ²⁴⁾ である。この中でも、ルーシー・A・サッチマンの取り組みが最も影響的である。一般的には、彼女の功績は、従来の認知科学が前提としてきた「計画 (plan)」による行為のガイドを覆したことにありとされるが、その根底には、「計画」のもつインデックス性に注目するというエスノメソドロジ的な関心が見出される。

“意味ある行為は、行動が本来的に限りなく多数の意味づけと意図に帰せられるべき対象となるのだが、一方で、意味や意図の方もやはり無限に多い目的的行動を通して表現可能になる。

(中略) プランというものを、行為をもっともらしく説明する先行条件と行為の結果の形式化であると見なすことを提唱する。行為について語る方法として、プランそれ自体は、状況的行為の実際のコースを決定しなければ、適切に再構成もしない。(中略) もしも私たちが状況的行為そのものに興味を持つならば、行為者たちが行為の展開しつつある目的と理解可能性を構成するために特定の出来事が提供してくれるリソースをどのように利用するかを見る必要がある。²⁵⁾”

つまり、プランとは人々の協働的实践を通して、全体的な説明に相互反映的に組み込まれていくリソースにすぎない、ということである。彼女の取り組みは、本章2-2においてさらに詳しく述べることにするが、近年彼女が、コンピューターソフトウェアのポリティックス (politics) を論じているのも興味深い²⁶⁾。共通して言えることは、アーティファクトの及ぼすポリティックスを素人とそれを作った専門家²⁷⁾ の「非対称性 (asymmetry)」の問題として捉え直していることである。

(2) 医学分野における取り組み

先程、認知科学における「ユーザとアーティファクトの非対称性」に触れたが、医学分野においても、医師による患者への専門的な支配といった権力問題から展開するようなかたちで、エスノメソドロジが広がりつつある。

一般に専門職と認められている職業の中でも、医師は最も卓越した地位を持っているのは事実である。一般の人々は医師が専門家の中でも最も高度な水準を持っていると見なし、また、社会

学者は医師を専門職の事実上の原型 (prototype) と見なしている。したがって、そこには典型的な「専門家-クライアント」の社会活動が存在し、医師の患者に対する関係は元来様々な問題をはらんでいる²⁸⁾。

このような「医師-患者」関係の課題をエスノメソドロジ的研究として扱ったのが、ポール・テン・ハーヴァである²⁹⁾。彼は、診療という場面での会話的やり取りの分析を通して、「医師-患者」関係が様々なかたちで達成されていくことを示した。

確かに、彼はその研究において、患者と医師の関係の中に「非対称性 (asymmetry)」を指摘し、その実質的な内容として、「イニシアティブの独占 (monopolizing initiatives)」と「情報の抑制 (withholding informations)」をあげているが、彼が会話分析によって示したものは、単なる「権力による支配」という問題ではなかった。ここでは詳述はしないが、それは権力関係の「協働的实践」である³⁰⁾。

このように、医療場面の会話分析の代表的な成果は、診療場面という医療的相互作用に焦点を当て、そこで展開される会話の特徴を一般的に解説し記述したものと見える。しかしながら、一方でエスノメソドロジ/会話分析のアプローチに対する批判も存在する。宝月は、会話分析は会話それ自体の構成過程の分析なのであって、医療活動それ自体に固有の問題を明らかにすることではない、と指摘する³¹⁾。

彼は、一般的な医療的相互作用の分析にとどまらず、個別具体的な医療活動の内容や成果までも含めた分析を主張する。例えば、リウマチ治療の診療室をフィールドとして、参与観察や医者と患者の会話記録、医者が作成する書類の検討等、会話データのみに限ることなく、多様な手がかりをもとに、そこで展開する医療活動の固有の特徴を描き出している。ただ、“医師は時には父親であり、仲間であり、商人となることが必要であり、患者も子供や仲間や顧客として振舞うことが重要となる。”という彼の結論は、やや常識的な感は否めない。

しかしながら、会話それ自体の内在的分析にとどまることなく、医療活動それ自体に固有の問題を明らかにしようという宝月の態度とその実践は、住環境デザインにおけるエスノメソドロジの展開を試みる本研究から見ても非常に注目すべきものである。

(3) 教育学分野における取り組み

教育学におけるエスノメソドロジ/会話分析の展開として、まずH・メーハンの教室での授業における社会構造化活動 (social structuring) の一連の研究が代表的である³²⁾。教室という独特の秩序形成、これは従来の教育学においても主要な分析対象であったが、エスノメソドロジ/会話分析の導入によって、さらに深い興味と注目が集められるようになった。

メーハンは、教師と生徒が何に基づき授業に効率良く参加しているのかという問題意識から、授業での教師と生徒間の言語的なやり取りに注目した。彼は、授業を構成している規範をあらかじめ考えそれを検証するのではなく、実際に授業が行われるまさにその場面の詳細な分析から、そこで彼らが実際に使用している「社会構造化活動」を抽出することを試みたのである。そこか

ら導かれたのが、「I-R-E (initiation-reply-evaluation)」という秩序化構造である。

確かに、授業場面において、メーハンのいう「社会構造化活動」が常に達成されているわけではなく、例外的な教師と生徒間のやり取りが起こる可能性はいくらでもある。しかし、この「I-R-E」という社会化・秩序化が授業構造の中心にあるという主張は説得的である。そして、より重要なのは、「I-R-E」という社会構造化活動が達成される授業こそが、人々が「円滑な授業だ」と「評価」する授業だということである。ここに、エスノメソドロジーによって見える「授業」があるわけである。

日本の教育学、教育社会学におけるエスノメソドロジ的研究は、1980年代から徐々に見られるようになってきた。近年では、上述したメーハンの授業場面のエスノメソドロジー／会話分析のような教室という空間に限定されることなく、学校という生活全般へとその研究フィールドを広げようという動きが見られる。例えば、保育所で行われる排泄訓練場面の研究(33)、子供の電話相談の研究(34)、中学校の生活指導場面の研究(35)、中学校における保健室の意義の研究(36)等があげられる。

これらの研究に共通して言えることは、エスノメソドロジーや会話分析の視点を、いかに教育社会学で探求し続けてきたテーマに結びつけるかという咀嚼的な態度が見られることである。しかしながら、この態度は決して批判されるべきものではなく、エスノメソドロジーそのものへの偏向より、教育の現場に密接に繋がったデータの収集という誠実な姿勢を示している(37)という意味で、むしろエスノメソドロジーの精神に沿ったものであると考えられる。

2. <計画>概念に関する考察

2-1. <計画>概念からみた建築計画学

建築計画学は、理論的にも実証的にも多岐にわたる関心を内包している学問領域なので、その中で「計画」概念がどのように位置づけられているのかを客観的に鳥瞰することは、ほとんど不可能に近い。研究者たち自身の、建築計画学そのものに対する理解の仕方が多様であることに加え、彼らの「計画」に対する考え方も一枚岩ではないので、公平な視点でそれに論評を加えることは困難である。

しかしながら、小林秀樹による「決定」あるいは「価値判断」への関わりからみた計画研究の方法に関する論述(38)は、十分参照に値するものとして評価できる。

小林によると、西山卯三による「住まい方調査」や吉武泰水らによる「使われ方研究」に端を発した初期の建築計画学には、実際の計画に対しての何らかの目標や水準を提示することを目指す性質と、建築と人間や社会との関わりへの解釈に科学認識的に取り組もうとする性質が内在し、その両性質のバランスと建築計画学全体としての指向性は、時代・歴史の流れの中での社会的要請とともに微妙に変化してきたと見れる。

このような発展を総じてみると、前者への取り組みはやや活発さを失いつつある。これは、学問としての体系化への意識の高まりと科学的方法への注目による当然の傾向であるとも考えられ

るが、その根底には、社会規範的な「計画」提示の必然性の喪失と可能性の低下ともいうべき状況に伴う「計画」志向的研究の行き詰まりに対する逃避が存在する。結果として、建築計画学が果たすべきと目されている重要な意義と目標である実践的フィールドへの還元という性質は大きく衰退していくこととなった。

このような建築計画学の流れにおいて「計画」はどのように捉えられてきたのかについては、小林自身の冒頭の記述が端的に示している。

“実際の計画にあたっては、それが建築の計画にせよ制度の計画にせよ、「決定」を行うこと、あるいは好ましい方向とは何かを評価することは、必然のプロセスとして意識的・無意識的に組み込まれている。(中略)このような「決定」と、それに伴う価値判断に対して、研究がどのように組み立てられているかは、研究の方法を考える上で、極めて重要な側面である。”

つまり、これまでの建築計画学は「決定」あるいは「価値判断」のためのモデルを提示するための研究であったといえよう。

一方、このような建築決定論・建築環境決定論的な取り組みへの批判から、近年、新たな理論の展開を試みているのが「人間-環境デザイン研究」である。例えば、研究の実践的フィールドへの関わりを回復させようとする取り組みとして、舟橋國男が提起しているアクション・リサーチ(39)の視点に注目した研究(40)が特徴的である。

しかしながら、このような意欲的な取り組みに比して、「決定論的」建築計画学からの脱却が十分であるとは言い難い。アクション・リサーチの視点にしても、確かに「環境デザインの世界観に関わる示唆に富むもの」ではあるが、あくまで、研究あるいは計画における「二元論的発想」からの視点の転換を導く手法であり、そもそもアクション・リサーチがどのような説明理論をもって取り組まれるべき手法なのか、それは慎重に見定めなければならないだろう。

むしろ逆に、今日においてもなお「決定論」から逃れられていないものと筆者は考える。なぜならば、「計画」という概念そのものが、依然として決定や評価と不可分な関係の中で捉えられているからである。

2-2. エスノメソドロジーと<計画>概念

環境行動論の視点は、従来の建築計画学研究の視野を広げようとするものである。舟橋はトランザクショナルリズム(41)の視点から、そのアプローチの計画理論に関わる特性を次のように述べている(42)。

“現代の計画行為が「状況づけられた」もので、かつ、どのような環境であれそれへの人間の能動的・創発的な働きかけが強調される時、「普遍的な計画理論」の成立可能性は少なくなり、特定の状況に固有の課題把握とその解決への「個別的な計画理論」しかありえなくなる。もしそのようにとらえれば、偶発的・創発的なものも含むあらゆる手段の折衷的利用というプラグマティックなアプローチのみが残されている、といわざるを得ないのかも知れない。それは文化相対主義や批判的地域主義とは軌を一にし得るが、理論というものが持つべきとされる普遍性・一般性な

ど、通常の特性には反する。”

この洞察には、「特定の状況に固有の課題把握とその解決」という個別多様な現象の解釈のための普遍的規範としての「計画」たるものの存在が依然として前提となっている。この前提が存在するかぎり、それは科学的方法によって保証せざるを得ず、また、何らかの規範的価値にのっとった「計画」の目標を必然的に探し求めなければならない。そしてそれは、「いま・どのように計画することが適切であるかを、誰が・どのようにして判断するか」という計画の決定とその評価という、さらなる解釈図式の前提を導くことになる。したがって、ここにおいてもやはり従来の建築計画学研究と同様、「計画」的アプローチに対する限界と矛盾を感じざるを得ない。

よって、計画の目標・評価とその主体の問題、つまり規範的価値という問題は哲学的基盤および研究態度においてまず解消されなければならない。環境行動論が「文化的・社会的側面を含む環境の総体的現実に行き届く限り接近しようとする」立場から、「計画行為が状況づけられた」もので「人間のトランザクショナルな生活系全体の計画」に注目するのであれば、科学的方法によって保証されるとする「計画」の間主観性⁴³⁾こそむしる問題とされなければならない。それはつまり、客観的図式としての「計画」たるものは存在せず、そもそも人々が「同じ、計画を目指すことがいかにして可能か、それ自体が重要な問いであるとして捉え直すことである。

エスノメソドロジーはその哲学的基盤をシュッツの「主観的観点⁴⁴⁾」に求めた。シュッツは次のように述べる⁴⁵⁾。“規範的価値いっさいは、目的の動機の体系ないしは理由の動機の体系として解釈することができる。”

ここで、認知科学におけるサッチマンの取り組みにもう一度触れたい。彼女は、ユーザがコピー機をつくった専門家と同じ「計画(plan)」を目指すために、どのような「状況的行為(situated actions)」によってそれを達成していくのか、その分析によって不適切なリソースから発生する状況を明らかにし、その回避と解決を提案したのであるが、それは同時に、従来の「計画」そのものの視点を大きく変えるものでもあった。ここでは、彼女の論述のニュアンスを重視し原文を引用することとする⁴⁶⁾。

“The problem for designers is that, as common-sense formulations of intent, plans are inherently vague. (中略) For situated actions, however, the vagueness of plans is not a fault, but is ideally suited to the fact that the detail of intent and action must be contingent on the circumstantial and interactional particulars of actual situations. Given this view of plans, namely as resources for action rather than as controlling structures, the outstanding problem is not to improve upon them, but to understand what kind of resource they are.”

彼女は「行為のリソースとしてのプラン(plans as resources for action)」をこのように主張し、言語における文脈依存性(indexicality)を参照しながら、状況的行為の説明に関する課題を以下のように述べる。

“Like other essentially linguistic representations, plans are efficient formulations of situated actions. By abstracting uniformities across situations, plans allow us to bring past

experience and projected outcomes to bear on our present actions. As efficient formulations, however, the significance of plans turns on their relation back to the unique circumstances and unarticulated practices of situated activities. A problem for an account of situated action, on this view, is to describe the processes by which efficient representations are brought into productive interaction with particular actions in particular environments.”

そして、“The interesting problem for an account of action, finally, is not to improve upon common-sense plans, but to describe how it is that we are able to bring efficient descriptions (such as plans) and particular circumstances into productive interaction.”と結論づける。

彼女の言う、人々の環境とのローカルなインタラクションを通して、全体的な説明に相互反動的に組み込まれていくリソースとしてのプランは、従来の「計画」概念の転換を示唆するものであった。そして、彼女の主張が学問的研究として説得力を持ち得たのは、エスノメソドロジーという「説明可能性(accountability)」を基盤に、コピー機のユーザが「知覚の衝突⁴⁷⁾」に直面したときの状況の科学的実態は、状況的行為における「エスノメソッド」という協働的实践、つまり、人間と機械のインタラクション(彼女は「interaction」を「communication」と交換可能なものと述べている)として記述が可能となるという明確な知的態度を持っていたからである。

このようにみると、建築計画学研究にまず必要なのは、どのような実在論的方法によって研究の客観性を保証するかから、どのような哲学および知的態度によって研究を生活世界の現実接近させるかへの研究通念の転換ともいえるかも知れない。言い換えれば、「計画」を含む総体的なデザイン活動に行き届く限り肉薄した「観察科学」としての建築計画学を構築する方向だとも言えるだろう。

エイムス・ラポポートが指摘するように、「現状は記述的なレベルすら不十分であり、環境デザインに有効な要素として何を記述すべきかについての理論の構築が必要」である⁴⁸⁾。その意味においても、エスノメソドロジーは、社会構築環境に関する課題に取り組む説明理論としてその存在意義は大きい。エスノメソドロジーに見いだされる哲学的基盤と視野が、建築計画学における「計画」志向的研究を回復させ、学際的な発展へと導く一つの可能性を提示してくれると考えている。

注

- 1) H. Garfinkel, "The Origin of the Term 'Ethnomethodology'" in Roy Turner (ed.), *Ethnomethodology*, penguin, 1974, pp.15-18, originally published as *Purdue Symposium on Ethnomethodology*, 1968. H・ガーフィンケル他、山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳、『エスノメソドロジー 社会学的思考の解体』、せりか書房、1987、pp.14-15。
- 2) ケネス・ライター、高山真知子訳、『エスノメソドロジーとは何か』、新曜社、1987、pp.327。
- 3) アラン・クロン、山田富秋・水川喜文訳、『入門エスノメソドロジー 私たちはみな社会学者である』、せりか書房、1996、pp.9。
- 4) H. Garfinkel, "Studies of the routine grounds of everyday activities" in *Studies in Ethnomethodology*, 1967. ハロルド・ガーフィンケル、「日常活動の基盤」、サーサス・ガーフィンケル・サックス・シエグロフ、北澤裕・西阪仰編訳、「日常活動の基盤」、『日常性の解剖学』、マルジュ社、1989、pp.45。
- 5) 「違背実験」の内容については、以下を参照のこと。浜日出夫、「現象学的社会学からエスノメソドロジーへ」、好井裕明編、『エスノメソドロジーの現実 せめぎあう<生>と<常>』、世界思想社、1992、pp.2-6。
- 6) 前掲訳書4)、pp.57。
- 7) 前掲訳書2)、pp.ii-iii。
- 8) “シュツによれば、行為の目的動機を知っているのは行為者だけである。「行為者のみが実際の目的を知っている。(中略) 観察者には、彼が目的であるとみなす事柄は行為者にとってもまたそうであるのかどうかとか、それが単に中間的目的であって、行為者の投企の幅のうちに含まれている究極的目標を実現するための一手段にすぎないのかどうかといったことを決定することはできない」。目的動機は、単に観点において「主観的」であるばかりでなく、同時に「各私的」であるという意味においても「主観的」なのである。そして、この目的動機の主観性は経験連関全体(世界)の主観性の現われにすぎない。同じ世界を経験するためには、まったく同じ経験をまったく同じ順序で経験していなければならないし、さらにまったく同じ関心をこの同じ経験に向けていなければならない。だが、これは観察者と被観察者が同一人物であるということである。観察者と被観察者が同じ人間ではない以上、観察者と被観察者の世界は同じではありえないのである。したがって、規範的価値を動機に解消することは、単に(シュツの意味で)「主観的観点」をとることを意味するにとどまらず、同時に「世界の複数性」を主張することも意味しているのである。” 浜日出夫、「エスノメソドロジーの原風景」、山田富秋・好井裕明編、『エスノメソドロジーの想像力』、せりか書房、1998、pp.30-43、より抜粋。
- 9) エスノメソドロジーの様々な位置づけに関しては、以下の文献を参照。A. V. Cicourel, "Cognitive Sociology", penguin, 1973; W. Handel, "Ethnomethodology", Oxford University Press, 1980; H. Mehan & H. Wood, "The Reality of Ethnomethodology", John Wiley & Sons,

- 1975; M. F. Rogers, "Sociology, ethnomethodology and experience", Cambridge University Press, 1983.
- 10) 山田富秋、「ローカルでポリティカルな知識を求めて」、山田富秋・好井裕明編、『エスノメソドロジーの想像力』、せりか書房、1998、pp.56-57。
- 11) 前掲書10)、pp.57-58。
- 12) 前掲訳書3)、pp.7-8。
- 13) 前掲訳書3)、pp.8。
- 14) 前掲訳書4)、pp.87-88。
- 15) 前掲訳書2)、pp.334。
- 16) 前掲訳書4)、pp.57。
- 17) Harvey Sacks, "Lectures on conversation", in Gail Jefferson (ed.), with an introduction by Emanuel A. Schegloff, Oxford UK & Cambridge USA, Blackwell, First published in one paperback volume 1995, First published as two volumes 1992.
- 18) 前掲書17)、pp.27。
- 19) ジョージ・サーサス、北澤裕・小松栄一訳、『会話分析の手法』、マルジュ社、1998、pp.9。
- 20) J. J. Gibson, "The Ecological Approach to Visual Perception", Boston Houghton Mifflin Company, 1979. ジェイムズ・ジェローム・ギブソン、古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳、『生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る』、サイエンス社、1985。
- 21) 上野直樹、「見ることのデザイン 知覚の社会-道具的組織化」、山田富秋・好井裕明編、『エスノメソドロジーの想像力』、せりか書房、1998、pp.252-269。
- 22) 前掲訳書20)、pp.137-157。
- 23) C. Goodwin, "The Professional Vision", *American Anthropologist*, 1994; "Seeing in Depth", *Social Studies of Science*, 25, 1995, pp.237-74.
- 24) Y. Engestrom & D. Middleton (eds.), "Cognition and Communication at Work", Cambridge University Press, 1996.
- 25) L. Suchman, "Plans and Situated Actions: The problem of human-machine communication", Cambridge University Press, 1987, pp.2-3. ルーシー・A・サッチマン、佐伯胖監訳、上野直樹・水川善文・鈴木栄幸訳、『プランと状況的行為 人間-機械コミュニケーションの可能性』、産業図書、1999、pp.2-3。
- 26) L. Suchman, "Do Categories Have Politics?", *CSCW*.2, 1994, pp.177-190.
- 27) 本研究でいう「専門家」とは、ある分野の知識や技術などを専門に研究・担当し、それに精通し熟練した人々を指す。住環境デザインの中では、特に、設計担当者、営業担当者、施工技術者あるいは建築家など、建築関係の専門的な技能をもってそれを職としている人々のことを指す。
- 28) エリオット・フリードン、進藤雄三・宝月誠訳、『医療と専門家支配』、恒星社厚生閣、

1992。

29) Paul ten Have, "Talk and Institution : a Reconsideration of the 'asymmetry' of Doctor-Patient Interaction", in D. Boden & D. H. Zimmerman (eds.), *Talk & Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis*, Polity Press, 1991, pp.138-163.

30) クリスティアン・ヒースの研究も示唆に富んでいる。Christian Heath, "The Delivery and Reception of Diagnosis in the General-Practice Consultation", in P. Drew & J. Heritage (eds.), *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*, Cambridge University Press, 1992, pp.235-267.

31) 宝月誠、「医療の世界 診療場面の遂行過程を中心に」、船津衛・宝月誠編、『シンボリック相互作用論の世界』、恒星社厚生閣、1995、pp.225-235。

32) H. Mehan, "Learning Lessons: Social Organization in the Classroom", Harvard University Press, 1979; H. Mehan, "The School's Work of Sorting Students", in D. Boden & D. H. Zimmerman (eds.), *Talk & Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis*, Polity Press, 1991, pp.71-90.

33) 清矢良崇、「排泄訓練と初期社会化の過程 しつけ場面におけるカテゴリー化問題」、『人間形成のエスノメソドロジー 社会化過程の理論と実証』、東洋館出版社、1994、pp.163-175。

34) 阿部耕也、「子供の電話相談における類型化の問題」、『教育社会学研究』第41集、東洋館出版社、1986、pp.151-165。

35) 北澤毅、「規則適用過程における行使者の意志<規則に従う>とはどういうことか」、『ソシオロジ』99号、社会学研究会、1987、pp.55-71。

36) 秋葉昌樹、「保健室における<相談>のエスノメソドロジー的研究」、『教育社会学研究』第57集、東洋館出版社、1995、pp.163-181。

37) この点に関しては、秋葉の主張が興味深い。秋葉昌樹、「エスノメソドロジー類型学と『教育の臨床エスノメソドロジー』の可能性」、『現代社会理論研究』6、現代社会理論研究会、1996、pp.99-108。

38) 小林秀樹、「計画研究の方法と理念」、『論としての建築計画研究 集合住宅計画研究を中心として』、日本建築学会大会研究協議会資料、1985、pp.83-105。

39) 舟橋國男、「環境行動デザイン研究と計画理論」、日本建築学会編、『人間-環境系のデザイン』、彰国社、1997、pp.34-55。

40) 例えば、乾亨・延藤安弘・森永良丙、「価値づくりの計画プロセスにおける住み手の計画側への役割の浸透 ユーコートの計画プロセスにおける住み手とコーディネーターの相互浸透性1」、『日本建築学会計画系論文集』第446号、1993、pp.53-63、倉原宗孝・後藤由紀、日景敏也、「子どもたちの体験活動による住民参加のまちづくり促進に関する考察」、『日本建築学会計画系論文集』第483号、1998、pp.179-188、があげられる。

41) トランザクショナリズムとは、環境と人間とを一つの行動の中の働きとみる立場で、全体をなす各々の側面間の変化しつつある関係性に焦点を当て、人とそのコンテクストは互いに定義しあい、全体的事象の意味と性質を決めると仮定する視点である。詳しくは、舟橋國男、「環境行動研究におけるトランザクショナリズムに関する考察」、日本建築学会近畿支部研究報告集、1989、pp.237-240、を参照。

42) 舟橋國男、「環境行動論の視点から」、『建築雑誌 特集/新しい建築計画学』、日本建築学会、1997、pp.8-11。

43) “フッサールと同じく社会学における現象学的アプローチもまた、われわれが社会学的考察の中に意識することなく持込んでしまっている社会学世界に生きる日常生活者としての常識に反省を加え、そうした知識を明らかにしようとする。そして同時に社会学的考察が日常生活者の知識の上のみ成立することを示し、社会科学的な認識の性質についての社会学者の素朴な科学主義的思い込みについて、反省を促す。この立場からは、認識において、主体と客体を峻別する方法は批判を加えられ、社会成員としてわれわれが持っている「共同主観性」「間主観性」こそ、社会学的考察の成立根拠であり、同時に社会学的考察の対象となる。” 江原由美子、「現象学的社会学」、今村仁司編、『現代思想を読む辞典』、講談社現代新書、1988、pp.197-199より抜粋。

44) シュッツの主観的観点については、注8)を参照。

45) 例えば、浜日出夫、「エスノメソドロジーの原風景」、山田富秋・好井裕明編、『エスノメソドロジーの想像力』、せりか書房、1998の「3.シュッツ=パーソンズ論争」や、浜日出夫、「現象学的社会学からエスノメソドロジーへ」、好井裕明編、『エスノメソドロジーの現実』、世界思想社、1992、pp.2-22、を参照。

46) 前掲書25)、pp.185-187。

47) 山田富秋、「ローカルでポリティカルな知識を求めて」、山田富秋・好井裕明編、『エスノメソドロジーの想像力』、せりか書房、1998、pp.56-70。

48) Amos Rapoport, "AN APPROACH TO THE CONSTRUCTION OF MAN-ENVIRONMENT THEORY", in W.F.E. Preiser (ed), *Environmental Design and Research (EDRA4)*, Stroudsburg, PA, Dowden, Hutchinson and Ross, 1973, vol 2, pp.124-135. エイムス・ラポポート、大野隆造抄録担当、「人間-環境理論の構築へのアプローチ」、『環境行動研究の動向と展望』、日本建築学会環境行動研究に関する国際シンポジウム資料、1997、pp.3-5。

第3章 社会的構造感と生産行為に関する調査研究

1. 目的

戸建住宅の建築に関わった建築主1)を中心とする関係者への面接調査から、人々が当然の客体的現象として捉えている社会的認識や感覚の現状を抽出し、その社会的構造感が生成される生産行為の構造を事例を通じて詳細に把握することにより、注文住宅2)における住環境デザインの現状の問題と課題の考察を行う。

ここでいう「社会的構造感」とは、「場の成員が認知し確信し当然視しているものとしての日常的リアリティ感 (commonsense reality) の構造」あるいは「社会的世界が自然な秩序 (natural order) であるという感覚や思い込み」を意味する3)。また、「生産行為」とは、建築が生産される全ての過程において、人々が経験や情報、価値観の折り重なりによって形成する行為とその繋がりであり、本研究では、都市圏に住む建築主を中心にそれを捉えている。

2. 方法

都市圏に住む建築主を中心に展開される住宅づくりの中で、人々は、どのようなきっかけや判断によって設計者や施工者を選んでいるのか、また、住宅を建築する過程の中でどのような関係者と接触し、それらの内容や関係の繋がりをどのように評価しているのかに注目し、建築主および関係者への詳細面接調査を行い、その内容を録音テープに記録する。

調査対象事例の収集は、人々の行為の関係性を重視する立場から、建築主および関係者からの紹介により、順次詳細面接調査を展開させていくという方法とする。この方法により、紹介の順番による面接対象者相互の関係性の程度が判断できる。ただし、サンプリングの軸として、三島俊介が戸建注文住宅を中心として住宅業界の全体をまとめた図式4)をもとに、筆者が変更・加筆した面接調査マップを用いる(図3.1)。この図3.1で示されている面接対象者の属性を基準に、それを全体的にフォローできるように面接対象者の紹介を依頼する。また、本章における面接対象者の属性の定義を表3.1にまとめる。建築主には、あらかじめ簡単な事実関係のアンケート(付1)を配布・収集し、面接時の参考資料とする。

面接時間は1~2時間を目安とするが、時間によって面接を終了させることは行わない。

面接内容は、中心となる会話軸のみを決め、個別の会話展開に任せるという非誘導的な方法とする。例えば、建築主に関しては「過去に生活してきた住宅の経緯や、新規に戸建注文住宅を建築したきっかけや判断の過程とそれに対する評価」および「新規戸建注文住宅の建築に携わった人々との関係」について、その他の関係者に関しては「建築主および関係者との人間関係と建築における活動内容」および「その関係や活動内容に対する評価」についてである。

つまり、先験的に提起した内容によって面接対象者を誘導しないことで、仮定する内容があるかたち、あるいは別のかたちで現れるかどうか、また予想した内容が会話の中に出てくるかこないかということに意味を持たせることができる。

表3.1 面接対象者の属性の定義

住宅メーカー	プレファブ住宅を中心とした全国規模の住宅販売企業。工場生産部品の多いプレファブ住宅を「商品」として捉えたところから「製造業者(メーカー)」という呼称が定着した。現在では、プレファブでなくても木造大手住宅会社もこの名前で呼ばれることが多い。
地域住宅会社	住宅メーカーと似た形態で地域で住宅を販売している。住宅メーカー同様、施工を外注しているケースが多い。
工務店	地域住宅会社との区別は明確ではないが、規模が小さく、施工部門をもっている(大工がいる)場合が多い。
大工	施工者。住宅メーカー、地域住宅会社、工務店の下請けをする場合が多い。
建築士/設計事務所	建築士の資格を有し、建築設計を業とする個人または経営組織体。建設業内部の設計組織などは含まれない。
ディベロッパー	土地開発業者。分譲住宅に限らず、リゾート商業集積の開発など大規模プロジェクトを行う。
建売業者	分譲住宅を主とする企業。小型のディベロッパーとも言える。住宅会社と見られる企業も建売による売り上げが大半を占めている。
仲介業者	中古住宅、マンション、土地などの流通を扱う業者。分譲業者はすべてこの仲介業にも力を入れている。いわゆる「駅前不動産屋」は仲介専門であることが多い。
ゼネコン	総合建設業者。大規模建築物の建設を請け負う。地域でマンションやビルの建築を請け負う業者を「地場ゼネコン」などとも言う。

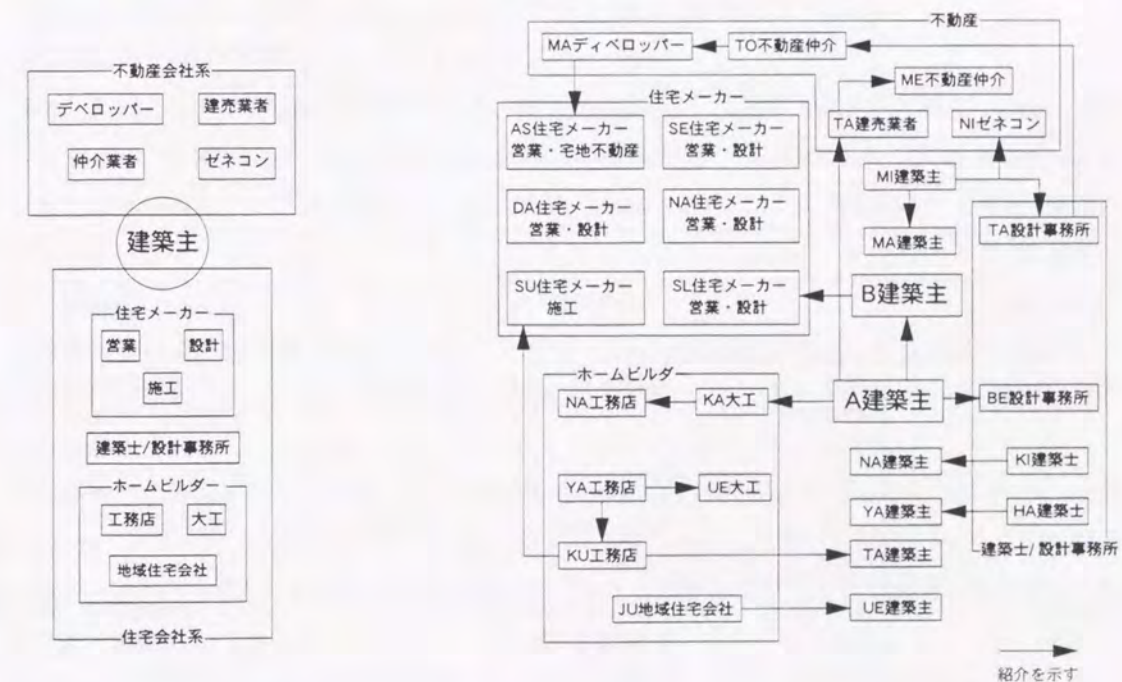


図3.1 面接調査マップ

図3.2 面接調査の展開

3. 結果と分析

3-1. 結果の概要

面接調査は全部で29件行った。その内、建築主は8件、それをとりまく関係者は20件（大工2、工務店3、地域住宅会社1、住宅メーカー6、建築士/設計事務所4、ディベロッパー1、建売業者1、不動産仲介2、ゼネコン1）である。関係者の紹介による面接調査の展開を図3.2に示す。

また、建築主に事前に配付したアンケート結果を表3.2に整理した。

表3.2 アンケートの整理

面接対象者	A建築主（新築）	B建築主（新築）	NA建築主（建替）	YA建築主（建替）
設計・施工期間（年月）	96.8～97.2	95.6～95.12	96.4～96.9・97.10～98.3	96.2～97.1
建設費（万円）	3,700	2,100	5,500	3,000
設計費（万円）	120	—	—	未記入
土地購入費（万円）	3,740	4,150	—	—
設計・施工	設計事務所 大工	住宅メーカー	住宅メーカー	建築士 工務店
構法・構造	鉄骨造 3階建て	木質ユニット 2階建て	木造 2階建て	鉄筋コンクリート造 および木造 3階建て
家族構成	世帯主42才（高校教員） 妻41才（小学教員） 長男15才 次男10才	世帯主43才（企業職） 妻41才（高校教員） 長男13才 次男9才	世帯主58才（大学教員） 妻57才 次男28才 母89才（96.10 死去）	世帯主41才（大学教員） 妻33才 長女11才 長男5才
面接対象者	MI建築主（建替）	MA建築主（建売）	TA建築主（建替）	UE建築主（建替）
設計・施工期間（年月）	95.2～95.11	95.10～96.3	96.7～96.11	96.3～97.11
建設費（万円）	2,500	4,880	2,500	6,500
設計費（万円）	未記入	—	—	—
土地購入費（万円）	—	建設費に含まれる	—	—
設計・施工	建築主 設計事務所 工務店	建売業者	工務店	地域住宅会社
構法・構造	鉄筋コンクリート造 および木造 3階建て	鉄筋コンクリート造 および木造 3階建て	木造 2階建て	木造 2階建て
家族構成	世帯主56才（ゼネコン） 妻46才 長女19才 長男16才	世帯主43才（運送業） 妻38才（小学教員） 長女13才 次女12才 長男16才 次男0才未満	世帯主67才 妻58才 長女37才	世帯主49才（消防職） 妻48才 長男25才

3-2. 発言ラベルの抽出と分類

面接内容は、面接対象者ごとにまさに個別的なものとなった。例えば、住宅メーカーは安いから頼んだという発言があれば、その逆の判断を生産行為の根拠としているものもある。

そこでまず、発言者が会話の中で当然のこととして用いている認識や現象、評価（社会的構感）を抜き出すことを目的に、面接内容の記録から、以下(イ)から(ハ)のKJ法的手順にしたがって「発言ラベル」の抽出を行った。

(イ) 発言ラベルの抽出

録音テープから変換した面接内容のテキストから、社会的構感を捉えるための素材となる発言ラベルを抽出する。抽出作業は以下のルールに従い、筆者と協力者の計3名によって行った。

<抽出ルール>

発言者が、自らの意見を能動的に語るものとする；

調査者の質問に対する答えとなる会話は除く；

発言者自身の生産行為の対象を説明、評価している内容とする；

任意の関係者の生産行為の対象を説明、評価している内容とする；

つまり、ヒアリングにおける調査者の誘導的な部分を極力除くことが目的である。例えば、調査者の「～ですか？」という質問とそれに対する「はい/いいえ」の返答の会話部分がそれである。

(ロ) ラベルへの記入

発言者の属性および説明、評価の内容主旨をラベルに書き込む。

(ハ) グループ編成

(イ) より得られた発言ラベルを無作為に並べ、3人の分析者が繰り返し読む。次に、発言ラベルの主旨が似ていると思われるものをグループ化する。各グループごとに、その主旨がほぼ一致しているかを確認し、それを束にする。さらに、より上位の次元の発言対象にグループ化する。

(ニ) 図解化

模造紙の上で、相互関係を考えながら、グループ編成の最終段階で得た発言ラベルの束を空間配置する。次元の高い束から順に空間配置をしていき、完了したらグループ間の関係線を書き込む。

この一連の作業を1ラウンドとし、その過程で得られた見解をもとに、分析者3人で6ラウンド行った。発言ラベルの抽出例を図3.3に示す。発言ラベルは、データシートとして整理した(付2)。なお、図3.3において、「調」および「主」は調査者および面接対象者の属性を、(F)は女性を意味している。

発言ラベルの抽出と分類の結果として、発言者の属性別に発言ラベルの分類をまとめたものを表3.3に、発言ラベルで説明・評価されている生産行為の対象別に空間配列としてまとめたもの

を図3.4に示す。また、表3.4および図3.4において、最上位のグループとして示している4つの行為は、次のように定義している。

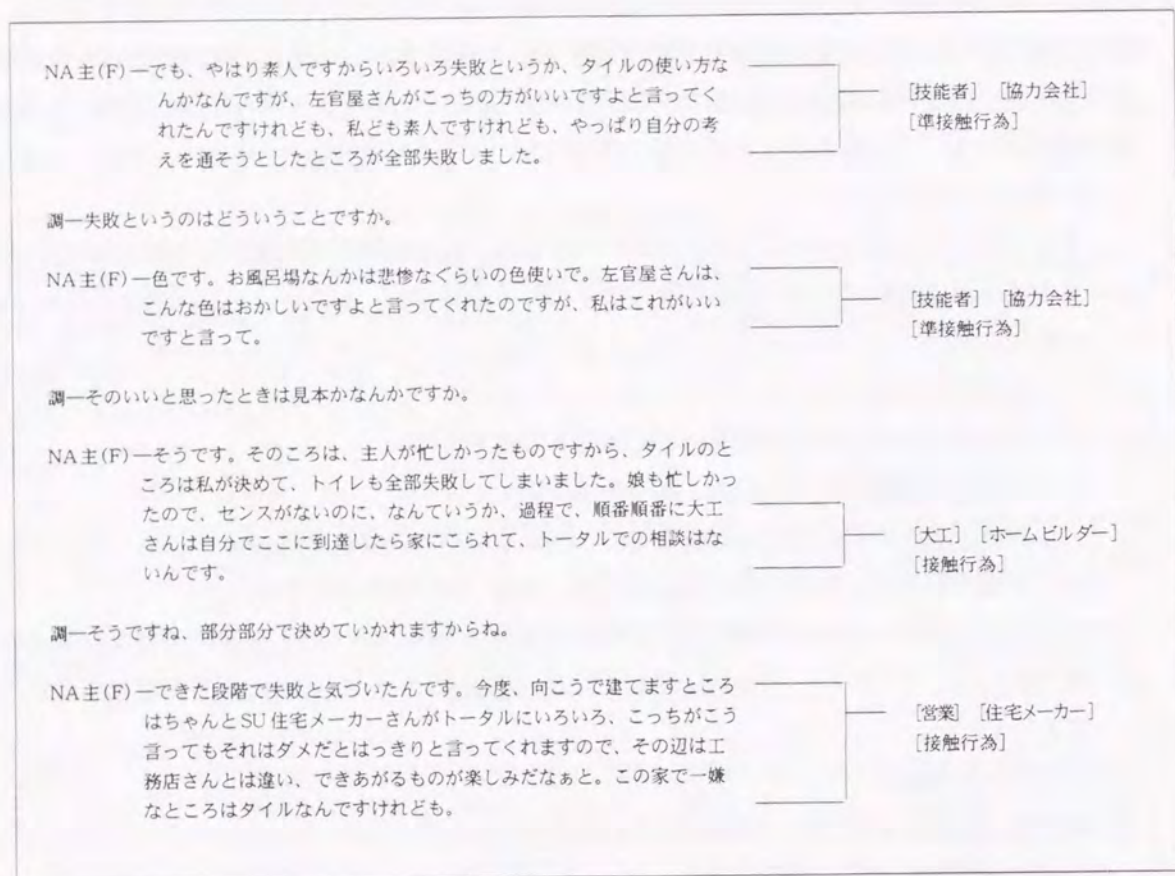


図 3.3 発言ラベルの抽出例

① 日常行為

普段、何気なく普通の生活で見ている住宅地の景色や、訪問した先の家やその部屋、また、知人との交流の中での「どこの誰々がこんな家を建てた」という話などの日常の活動や経験となる行為である。このような中で、いざ家を建てるとなったときに、最も人々の判断に大きく作用するのは、それまでの過去の住まいの経験、移り変わりである。どのようなところでどんな家に住んできたのか、それが大きな影響を与える。過去の生活環境やリズム、経済力、家族構成、住宅の物理的規模、使い勝手、愛着など、住宅に比較的反映しやすい要因だけでなく、生活そのものの様々な経験が積み重ねられるのが住宅であるから、これはいうまでもない。

一方、現代においては、マスメディアのイメージによる先験が大きい。私たちは具体的な商品やその形は記憶になくても、広告のビジュアルのコピーは知っている。建築主は必ず、どこに住宅を依頼するかに関わらず、営業マンや大工・工務店などの各種業者の人々と出会う前に、まず広告に出会う。最近では、専門雑誌に限らず住宅関連の特集が一般雑誌やテレビ番組にも

表 3.3 発言ラベルの分類

発言ラベルの分類項目	発言者属性														
	主	主/親	大	工	地	住・寓	住・親	住・宅	子	表	仲	セ	調	生活	生活・経済
日常行為	調 1~9	主 1~6	大 1~5	工 1~7	地 1	住 寓 1~8	住 親 1~3								
	生活 10	主 7~51	大 7~16	工 8~9	地 2	住 寓 9	住 親 4								
	周辺環境	主 52	大 17	工 10	地 3~4	住 寓 10~11	住 親 5~9								
	友人・知人	主 53~62	大 18	工 11	地 5~22	住 寓 12~15	住 親 10								
	周辺環境	主 63~72	大 19~21	工 12~23	地 23~24	住 寓 16	住 親 11~14								
	マスメディア	主 73~74	大 22	工 24~31	地 25	住 寓 17	住 親 15~16								
	マスメディア	主 75~83	大 23~27	工 32	地 26~28	住 寓 18~19	住 親 17~20								
	マスメディア	主 84	大 28	工 33	地 29	住 寓 20	住 親 21~32								
	建築士設計事務所	主 85~108	大 29	工 34	地 31~32	住 寓 21~24	住 親 22								
	ホームビルダー	主 109~122	大 30	工 35~39	地 33	住 寓 25~31	住 親 23~6								
接触行為	住宅メーカー	主 123~134	大 31	工 40	地 34	住 寓 32~33	住 親 7								
	全体	主 135~137	大 32	工 41~43	地 35	住 寓 34~58	住 親 8~9								
	総合展示場	主 138~152	大 33	工 44	地 36	住 寓 59~60	住 親 10~11								
	展示場	主 153~168	大 34	工 45~48	地 37	住 寓 61	住 親 12								
	営業	主 169~170	大 35	工 49~60	地 38	住 寓 62	住 親 13~19								
	設計	主 171~178	大 36	工 61~63	地 39	住 寓 63~65	住 親 21								
	施工	主 179~180	大 37	工 64	地 40	住 寓 66	住 親 22								
	マネージング	主 181~184	大 38	工 65	地 41	住 寓 67	住 親 23								
	重伝・広報	主 185	大 39	工 66	地 42	住 寓 68	住 親 24								
	商品開発	主 186~188	大 40	工 67	地 43	住 寓 69~71	住 親 25								
準接触行為	資材・部材	主 189~190	大 41	工 68	地 44	住 寓 72~77	住 親 26								
	運送施工	主 191~192	大 42	工 69	地 45	住 寓 78	住 親 27								
	個人育成	主 193~204	大 43	工 70	地 46	住 寓 79	住 親 28								
	アフターサービス	主 194	大 44	工 71	地 47	住 寓 80	住 親 29								
	宅地・不動産	主 195	大 45	工 72	地 48	住 寓 81	住 親 30								
	不動産仲介	主 196~188	大 46	工 73	地 49	住 寓 82	住 親 31								
	住宅ローン	主 189~190	大 47	工 74	地 50	住 寓 83	住 親 32								
	住宅ローン	主 191~192	大 48	工 75	地 51	住 寓 84	住 親 33								
	住宅ローン	主 193~204	大 49	工 76	地 52	住 寓 85	住 親 34								
	住宅ローン	主 194	大 50	工 77	地 53	住 寓 86	住 親 35								
社会的行為	生活	主 195	大 51	工 78	地 54	住 寓 87	住 親 36								
	生活	主 196~188	大 52	工 79	地 55	住 寓 88	住 親 37								
	生活	主 189~190	大 53	工 80	地 56	住 寓 89	住 親 38								
	生活	主 191~192	大 54	工 81	地 57	住 寓 90	住 親 39								
	生活	主 193~204	大 55	工 82	地 58	住 寓 91	住 親 40								
	生活	主 194	大 56	工 83	地 59	住 寓 92	住 親 41								
	生活	主 195	大 57	工 84	地 60	住 寓 93	住 親 42								
	生活	主 196~188	大 58	工 85	地 61	住 寓 94	住 親 43								
	生活	主 189~190	大 59	工 86	地 62	住 寓 95	住 親 44								
	生活	主 191~192	大 60	工 87	地 63	住 寓 96	住 親 45								

凡例：調一調査者 主一建築士/設計事務所 大一大工 工一工務店 地一地域住宅会社 住・寓一住宅メーカー・営業 住・設一住宅メーカー・設計 住・施一住宅メーカー・施工 住・宅一住宅メーカー・宅地・不動産 デザイン/インテリア 売一建設業者 仲一不動産仲介 セ一セネコン

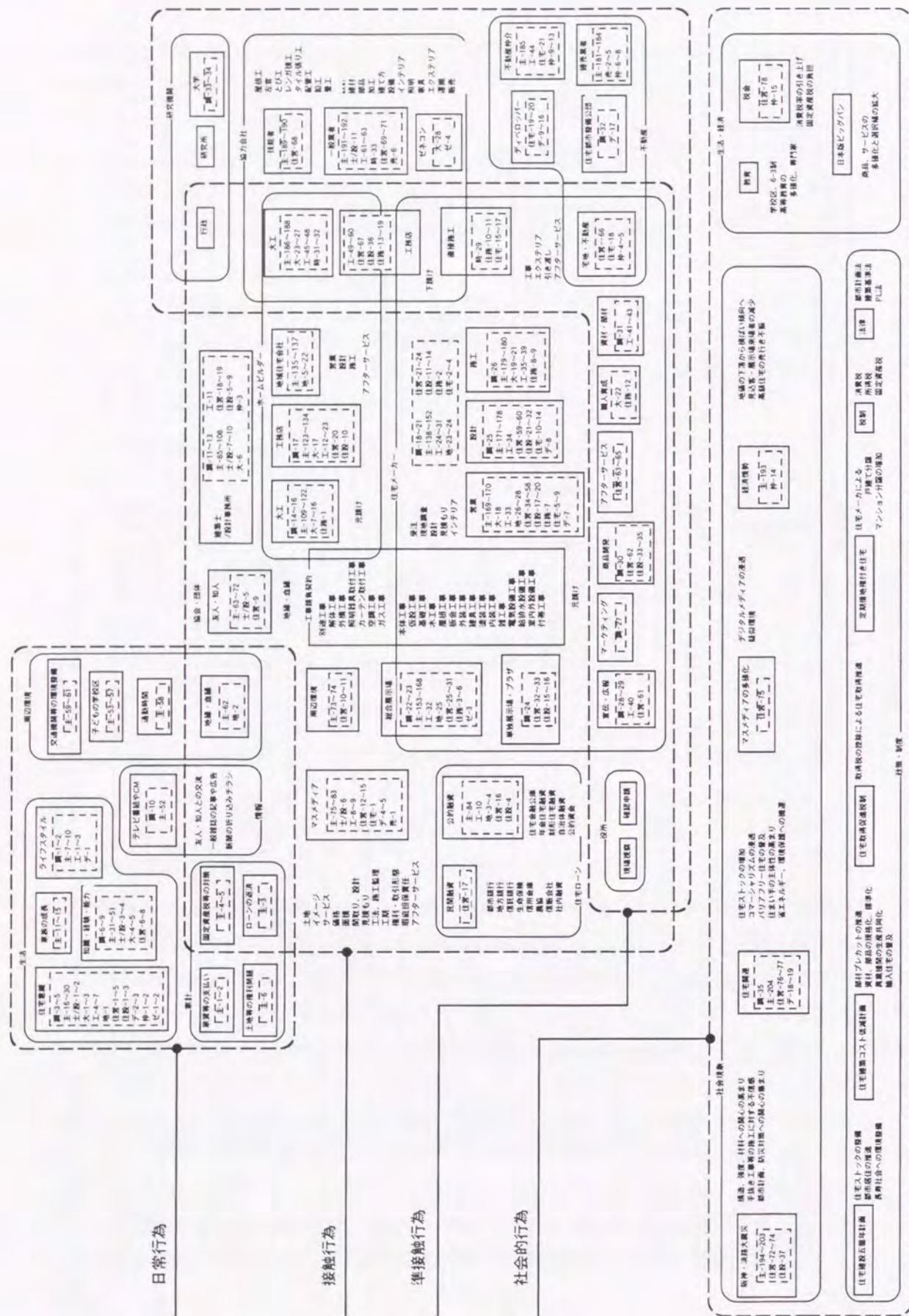


図3.4 発言ラベルの空間配列

見られ、人々の住宅に対する興味の向上、価値観の多様化をメディアからも読み取ることができ。

②接触行為

建築主が住宅を建築するという目的の上で、意図的・直接的に人間や情報などに接触しようとする、あるいは接触しなければならない環境である。例えば、住宅展示場の見学や情報誌の購入、友人・知人との会話、元請会社の担当者との交流などがあげられる。

現代において、いくら住宅の商品性が高くなったからとはいえ、建築主の敷地や予算は千差万別で、なおかつ住宅は大変高額なものである。したがって、車や家電製品のようにCMで見たこの商品の一つ、ということにはならない。つまり、住宅は「形になっている商品」を買うわけではないので、接触行為の内容とその過程が、結果としてできあがる住宅の質に大きく作用することになる。

実際に家を建てようとする段階までくると、かなり積極的に知人や専門関係者に話を聞きに行ったり訪問したりする。当然、工事請負の契約先が決定してからは、その担当者が主となる。例えば、住宅メーカーの担当者や、大工、工務店の担当者、あるいは建築家などである。また、出展している業者に依頼するしないに関わらず、人々が一般にまず足を運ぶのが住宅展示場である。それは、仮の「形になっている商品」としての実物が見れるという最大のメリットがあるためである。

③準接触行為

建築主が住宅を建築する過程において、建築主が直接的に関わることはないが、間接的に人間や情報と接触し、生産行為においてその活動が関連する環境である。主に、下請け会社や施工者、あるいは行政や不動産業者などがあげられる。

具体的には、大工・屋根工・左官・とび工・れんが積工・タイル張り工・配管工・鉛工・畳工など5)のいわゆる技能者、設備・建材・インテリア・照明・家具などのメーカー、不動産業者、ディベロッパー、行政機関や金融機関があげられる。住宅は、他の耐久消費財に比べ使用期間が長期にわたる非常に高額なものであり、その一つをつくるのに部品・部材数が数万点に及ぶという特性をもつことから分かるように、産業としても、生産行為としても、そのすそ野は非常に広いものである。また、すそ野が広いということは経済波及効果が大きいことを意味する。ゆえに、政府の経済対策としても住宅投資が重要な柱に位置づけられているのである。

④社会的行為

いわゆる政策や制度、経済、教育など、すべての人々が生活を営むうえで必要不可欠な社会基盤や社会現象である。

例えば、政策・制度では、消費税や固定資産税、建築基準法、住宅建築コスト削減計画など、経済では、身近には住宅金融公庫、大きくは日本版ビッグバン、教育では学校区や偏差値、教育の多様化・専門化など、そして、これらを含めた社会現象として、日本経済の不景気、メディアの多様化や発達など、そして自然現象では阪神・淡路大震災があげられる。

3-3. 社会的構造感

発言ラベルの抽出と分類によって得られた、注文住宅を取り巻く人々の社会的構造感を図3.5に示す。

図3.5の破線で囲まれた部分は、社会的構造感として、注文することの意味や住宅の質に関する認識が欠落していることを示す6)。このこと自体が非常に重要な問題であるからこそ、L. Suchman が述べるように、建築主と関係者のあいだに非対称性 (asymmetry) が出現し、建築主は実際の関係者との具体的な相互行為に対処することでしか、自らの生産行為の隠れたアジェンダ (agenda) を実現することはできない7) のである。

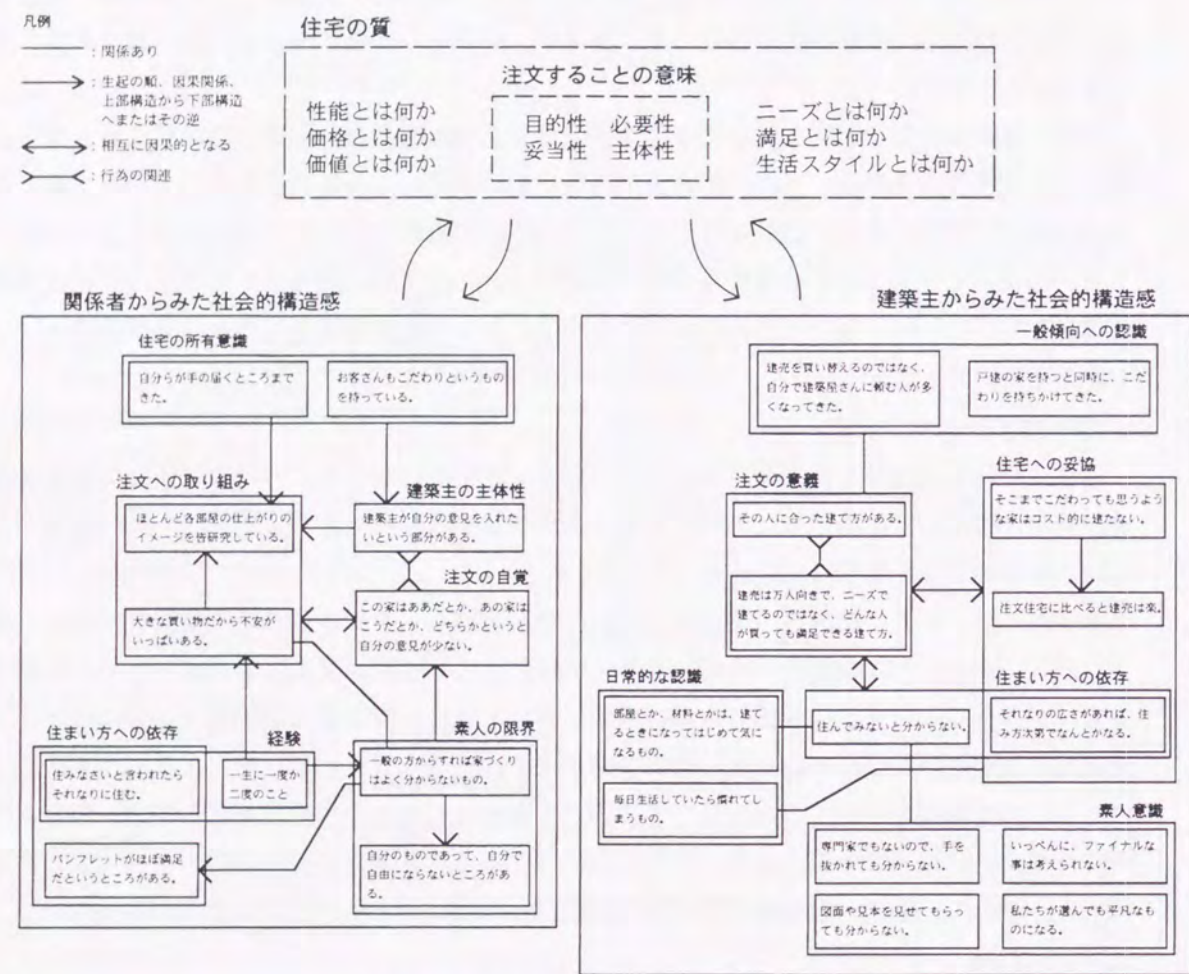


図3.5 戸建注文住宅を取り巻く社会的構造感

4. 考察

4-1. 生産行為の概念モデル

3-3 での仮説を考察課題として明確に位置づけるための指標的概念を提示する。これは、Gary T. Moore の環境行動デザイン研究における分類次元8) (図3.6) の視点をもとに構成したもの

である。生産行為をいくつかの環境層という概念として定義する。各々の「次元」の環境層は、物理的・社会的・文化的な「広がり」を持ち、異なる次元間の環境層において行為の「トランザクション9)」が存在する。これら次元・広がり・トランザクションによる形成を生産行為の浸透構造と呼ぶ。その概念モデルを図3.7に示す。

本論文では、建築主を主体とした生産行為を、経験行為、仮設行為、目的行為、実現行為の四つの次元として捉える。経験行為とは、実際に見たり聞いたり行ったりして、知識や認識を得ること。仮設行為とは、実際にはない、また確かだとは分かっていない事柄を仮にそうだとすること。目的行為とは、到達したい状態として意図し、行為を方向づけること。実現行為とは、目的にあっているかどうかを実地に確かめながら取り組むことである。

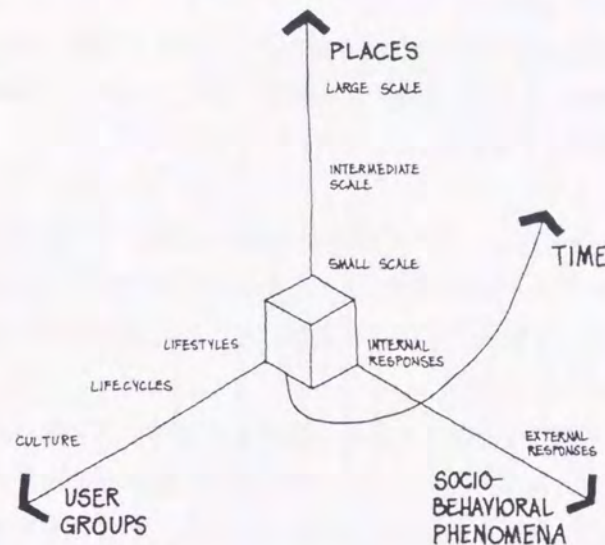


図3.6 環境行動デザイン研究の分類次元
出典：Gary T. Moore, D. Paul Tuttle and Sandra C. Howell(1985): "ENVIRONMENTAL DESIGN RESEARCH DIRECTIONS: Process and Prospects", Praeger Publishers, pp.36.

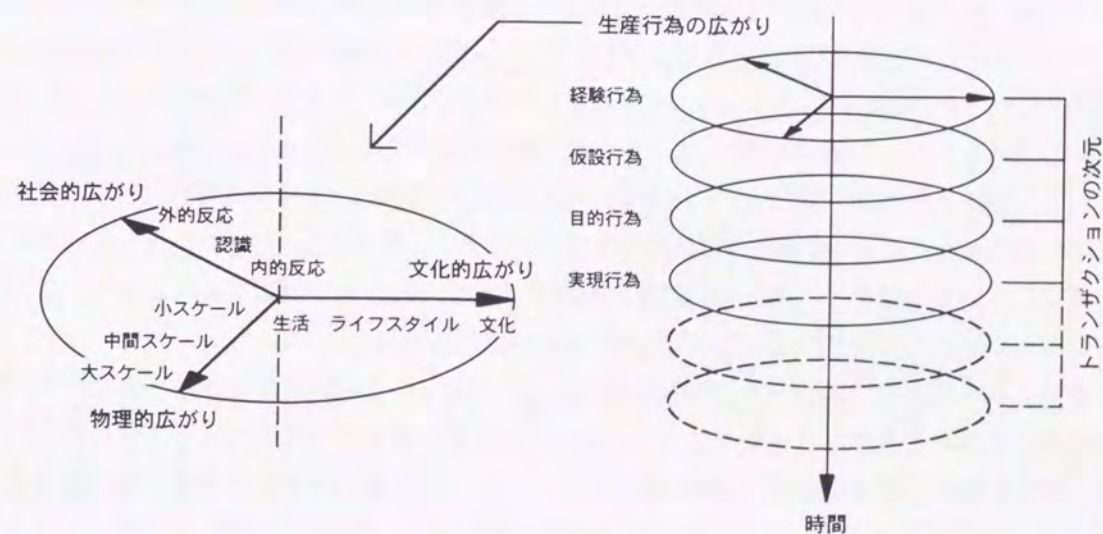


図3.7 生産行為の概念モデル

4-2. 生産行為の浸透構造

建築主を中心に展開される住宅づくりの行為の実態を生産行為として詳細に把握するため、前述の分析課題が特徴的に現れている事例を取り上げ、発言者が実際の会話の中で、どのような表現で、何を根拠に、どのような認識や評価を語っているかに注目し、生産行為の浸透構造についての考察を行う。

二人の建築主の発言をその対象とする。彼らは同じ職場の同僚（高等学校教諭）であり、調査も一方の建築主からの紹介で展開した。

A建築主は、42歳の男性。子供の成長に伴い新築を計画。家族構成は妻41歳（小学校教諭）、長男15歳、次男10歳。当初は計画を設計事務所に依頼していたが、最終的には知人の大工に依頼した。建築費は3700万、鉄骨造の3階建てである。

一方、A建築主からの紹介で面接を行ったB建築主は、41歳の女性。A建築主と同様、子供の成長に伴い新築。家族構成は夫43歳（企業職）、長男13歳、次男9歳。住宅メーカーに建築を依頼。建築費は2100万、木質ユニットの2階建てである。

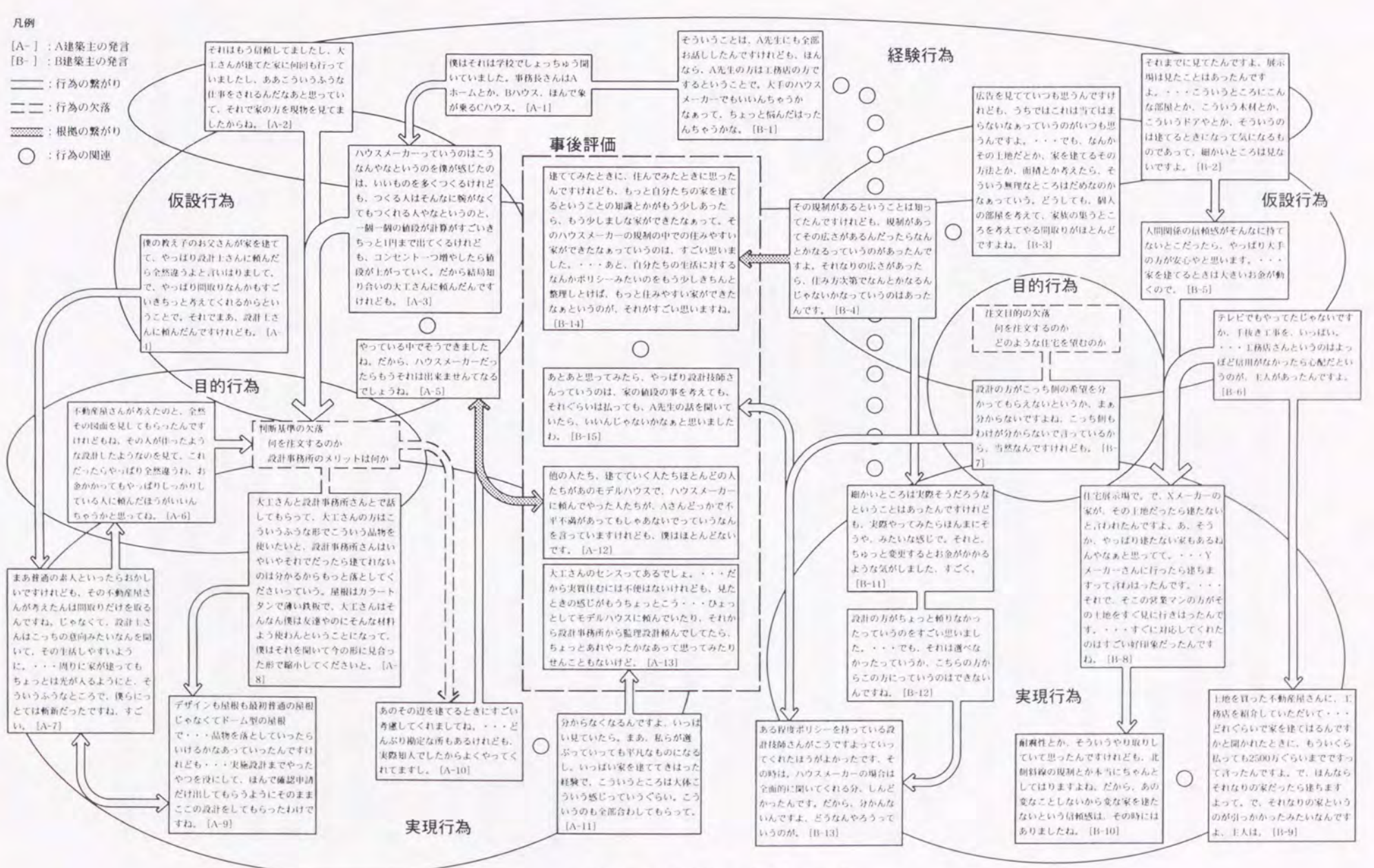
この分析事例の生産行為マップを図3.8に示す。

[A-3]の内容は、明らかに根拠のない根拠である。このA建築主の二つの根拠のない根拠は、B建築主の発言（[B-11] [B-12]）の中で、「すごく（い）」ということばで強調された事実として語られている。つまり、A建築主は、B建築主の評価を根拠に友人の大工に建築を依頼したと考えられる。

一方、知り合いのアドバイザーにより設計事務所へ相談するという経緯をたどることとなるのだが、そこでの評価は非常に高いものである（[A-7]）。しかし、そこでの経験からの実質的な認識（[A-6]）については、前述のB建築主の発言を照らし合わせることで、その内容を推測することができる。

[A-6]の「やっぱり」という表現は、もちろん設計事務所との比較であり、それが「しっかりといる人」を強調している。会話の流れでは、この直後に住宅メーカーに対する認識として、[A-3]の「そんなに腕がなくともつくれる人」が語られる。よって、同様の表現から、「しっかりといる人」との対比内容として「そんなに腕がなくともつくれる人」を結ぶことができる。そして、この「そんなに腕がなくともつくれる人」という見解は、B建築主の発言の中の「ちよつと頼りなかった」という表現とほぼ同意である。つまり、A建築主は、その対比として「設計士」を認識しているのであり、例えば、設計事務所に頼んでどんな家を目指すのか、あるいは何がメリットなのかといった目的はつきりしていなかったのである。

結局、ある程度の「間取り」は保持したものの、[A-7]で「不動産屋さんが考えたのは間取りだけを取るんですね。じゃなくて・・・僕らにとっては斬新だった」と高く評価していた内容は、大工の意向に任せるといって過程をたどることとなる。建築主は事後評価として不満はほとんどないと述べている（[A-12]）が、あくまで住宅メーカーに対する認識との対比（[A-5]）であって、生産行為の充実感による満足でしかない。間取りの保持も、知人のアドバイザーの



([A-4]) での認識だと考えられる。また、[A-11] と [A-13] は夫人の発言であるが、生産行為の目的が欠落しているからこそ、住宅メーカーや設計事務所という他の手段との回顧的な比較でしか住宅の評価を捉えることができないのである。

このような構造は、B 建築主の発言の中にも同様に見いだすことができる。工務店への不信感と営業担当者の印象を根拠に住宅メーカーへ建築を依頼した B 建築主には、明らかに住宅メーカーによってどんな住宅を実現するのかという目的が欠落していた。それを B 建築主も自認している ([B-7]) 。

[B-7] では、設計担当者を営業担当者との比較をもって「こっち側の希望が分かってもらえない」と評価しているが、ここには、A 建築主の「こっちの意向みたいなんを聞いて」くれるという「設計士」の評価 ([A-7]) と共通した設計行為への認識が含まれている。

会話の流れでは、B 建築主のいう「設計技師」 ([B-13]) は、設計事務所あるいは建築士を意味する。ここでの「設計技師」は「ポリシー」ということばで形容されているが、それは事後評価の論点 ([B-14]) でもある。つまり、B 建築主は、A 建築主の生産行為の事実を「ポリシー」というインデックスをもって、自らの事後評価として形成したのであるが、ここで重要なのはそれよりもむしろ、その事後評価も結局、[B-3] の「家を建てるその方法とか、面積とか考えたら、そういう無理なところはだめなのか」や [B-4] の「規制があるということは知ってたんですけども」の発言を見るかぎり、「ハウスメーカーの規制の中で」というあらかじめ判断していた問題に対する後悔へ帰結していることである。

以上、社会的構造感における住宅の質に関する認識の欠落が、実際の生産行為の場において、行為の目的性の欠落につながり、それが仮設行為から導かれる予定調和的な事後評価を生成しているという実態の問題提起を試みた。ここから言えることは、実現行為は目的ではなく仮設を確認するための行為であり、生産行為は、結果として仮設を実証するための構造プロセスとなっていることである。建築主は、目的がないという非常に不安定な状況を乗り越えるため、仮設内容の反復によってその達成感を得ることで、事後評価において一応の到達点を確定しようとしているのである (図 3.9) 。

これには、一般顧客を対象とした現在の住宅供給サイドの Build to Order 的スタンスの問題を指摘することができる。以下、その問題点を要約する。

- ① 建築主にとっての住環境実現の目的が明確でなければ、B.T.O.による自己欲求実現は明らかに不可能である。
- ② 供給時点での計画の完全性を目標とする現状の認識と取り組みは、注文に対する建築主および供給側両方にその能力の完全性を求め、そのような状況での解決方法としては、必然的にある種の想定的なテーマの提示・共有でしかなくなる。
- ③ 供給サイドの提示するテーマが、建築主にとっての住環境実現の目的ではなく、造作的なイメージやスタイルあるいは作品性である限り、図 3.5 が示すように、個々人の生活に見合う住宅の実現を注文の意義と捉えている現在の一般の人々にとって、それはあくまで仮定でしかなく、結果

として実際の生活とは大きくかけ離れたものとなる。

④ 建築主と関係者との媒介が以上のようなテーマの類であれば、注文住宅に関してほとんど素人も同然である建築主は、供給サイドが提示する専門的な作用に従属せざるを得ない。その結果、「しんどかった ([B-13]) 」や「よくやってくれた ([A-10]) 」などといった、いかにその状況に対処したかという内容でしか、建築主は生産行為を評価できないのである。

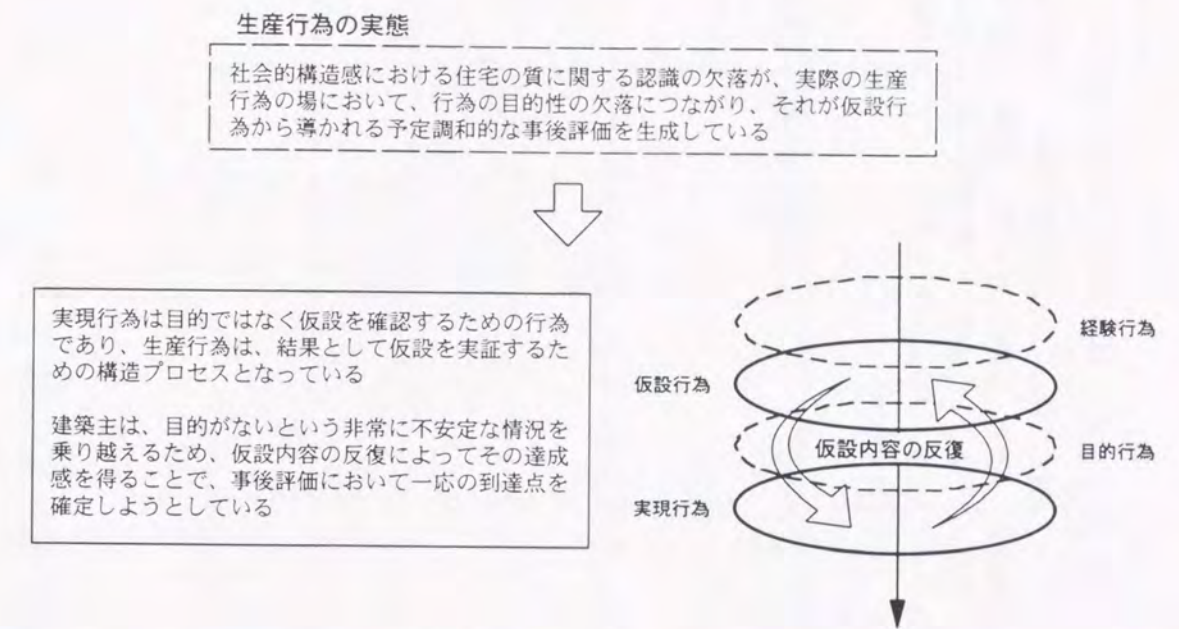


図3.9 生産行為の実態

1. 今回も含め、今までの住まいの経緯についてお伺いします。以下の記入例を参考にご記入願います。

期間 年 月 ～年 月 住所 ()	居住形態 ・ {戸建、長屋建、 共同建} ・ {持家、借家}	設計形態 (木造 非木造)	設計主体 (大工、工務店、 ゼネコン、公営・ 公団、プレファブ メーカー)	施工主体 (大工、工務店、 ゼネコン、公営・ 公団、プレファブ メーカー)	住宅の規模 (平屋 ～階建、 共同建の～階) など	住宅の工法 (在来工法、プレファブ、 ツーバイフォー、鉄骨造、 鉄筋コンクリート造など)
～97年10月 (大阪府池田市)	共同建・借家	木造	大工	大工	2階建ての2階	在来工法

⇒2枚目に続きます。
付1 建築主への事前アンケート1

2. 今回の住まいの新築についてお伺いします。以下の欄にご記入願います。

設計・施工期間 : _____ 年 _____ 月～ _____ 年 _____ 月
 建設費 : _____
 設計者 : _____
 施工者 : _____

a. 新築しようと思われたきっかけは何ですか。

[]

b. 新築の方法としてどのような候補（設計・施工主体や工法など）を考えましたか。

[]

c. なぜ、現在の条件を選択されたのですか。

[]

⇒3枚目に続きます。
付1 建築主への事前アンケート2

3.ご本人とご家族についてお伺いします。以下の欄にご記入願います。

続柄	年齢	性別	職業

ご協力ありがとうございました。

付1 建築主への事前アンケート3

発言者属性 ディレクトリ →
 発言内容No. →
 発言者 →

自分の建て替えの時期がやってきたら、建て売りを買い換えるんじゃなくて自分で一軒ずつ建てるというか、大手の建築屋さんに頼んで建てるという人が多くなってきた。

発言者属性 ディレクトリ →
 発言内容No. →
 発言者 →

設計や、そのようなことに施主さんの方が参加してきているのは分かりますけれども、さらにそういう家の中での公害などといったことへも早く施主さんの方から積極的に働きかけるべきだと思います。

発言者属性 ディレクトリ →
 発言内容No. →
 発言者 →

我々が住んでいる建て売りの家というのが結構自分たちが実際住んでみて、いろいろどうい家で住んでみたいなのがあったんで、できればこういうタイミング<震災>に自分たちの希望を取り込んだ家を建ててみたいなのことですね。(・・・)つまり建て売りというのは万人向けの、いわゆるその人たちのニーズで建てているんじゃなくてどのような人が買っても満足できるような建て方になっていますから。

発言者属性 ディレクトリ →
 発言内容No. →
 発言者 →

売って町中は町中ですがマンションにいろいろかなと。ただ、土地付きという家はなかなか最終的には手放せなくて。(・・・)財産的なことと、あとは、まあ場所の良さという、便利な場所にありますし。まわりとマンションを見たときに、やはり一戸建ての良さというのがわかりましたし。

付2 発言ラベルのデータシート例

注

- 1) 本研究でいう「建築主」とは、注文住宅の発注者であり居住者でもある人々のことを指す。
- 2) 注文住宅とは、注文があって初めて生産される住宅を指し、本稿では、建売住宅を見込生産によるものとして捉え、それと区別して用いている。また、注文することとは、建築主が住宅に対する自らの希望を指図する行為をいう。
- 3) K・ライター、高田真知子訳、『エスノメソドロジーとは何か』、新曜社、1987。
- 4) 三島俊介、『住宅産業のすべてが一目でわかる本』、産能大学出版部刊、1994、pp.4-5。
- 5) 国勢調査では、住宅生産に関係する技能職種をこの7種に分類している。
- 6) ここでいう「住宅の質」とは、物理的環境、社会的環境、文化的環境、そして人間の欲求の充足の高次におけるバランスのことをいう。それぞれのバランスは多岐にわたる関係性を持っているゆえ、柔軟的かつ総合的に捉えなければならない。また、「住宅の質に関する認識の欠落」とは、住宅の内容ということに対する観念が曖昧であるということを意味する。
- 7) L. Suchman, "Plans and Situated Actions: The problem of human-machine communication", Cambridge University Press, 1987. ルーシー・A・サッチマン、佐伯胖監訳、上野直樹・水川善文・鈴木栄幸訳、『プランと状況的行為 人間-機械コミュニケーションの可能性』、産業図書、1999。山田富秋、「ローカルでポリティカルな知識を求めて」、山田富秋・好井裕明編、『エスノメソドロジーの想像力』、せりか書房、1998、pp.64、の解説を参照。
- 8) Gary T. Moore, D. Paul Tuttle and Sandra C. Howell, "ENVIRONMENTAL DESIGN RESEARCH DIRECTIONS: Process and Prospects", Praeger Publishers, 1985, pp34-40.
- 9) トランザクショナリズムとは、環境と人間とを一つの行動の中の働きとみる立場で、全体をなす各々の側面間の変化しつつある関係性に焦点を当て、人とそのコンテキストは互いに定義しあい、全体的事象の意味と性質を決めると仮定する視点である。詳しくは、舟橋國男、「環境行動研究におけるトランザクショナリズムに関する考察」、日本建築学会近畿支部研究報告集、1989、pp.237-240、を参照。

第4章 建築主と専門家の「Ethno-design-method」 と役割関係に関する調査研究

1. 目的

「Ethno-design-method」に関する観察調査によって得られた全事例について会話分析を行い、その中から設計打ち合わせとといった一つの制度的状況にみられる会話のシーケンス構造を抽出し、そこに見いだされる建築主および専門家の制度的志向性¹⁾と、それと密接に結びついた人々の秩序現象(役割関係)を、その個別的な場において一つの協働的なプロセスの中で達成されたものとして示すことを試みる。

注文住宅の設計打ち合わせにおいては、その場面に関係する人々(当事者・参与者・メンバー)のある際立った振る舞い(行為)が観察できる。本章は、そのような人々の振る舞い、つまり「Ethno-design-method」を建築主と専門家の役割関係という見方から考察を行う。ただし、はじめに「際立った」ということの意味についていくつか述べておく必要がある。

第一に、建築主-専門家間の振る舞いの比較において際立っている。第二に、「設計打ち合わせ」という特定の場面設定の外にある会話(日常的な雑談)と比べて、それは際立っている。観察調査および会話分析においては、その「際立っている」こと、つまり差異に注目する。例えば、建築主のその振る舞いは、専門家のそれに対応する振る舞いや、雑談における同等の振る舞いにみられる特徴を欠いており、しかもここにみられない特徴をもっている。かつ、この二つの特徴は、互いに相反する方向をもつ特徴として、参与者の志向に即したかたちで記述可能である。

このような意味で、1. 注文者-設計者であること、2. 購入者-販売者であることの間、設計打ち合わせ特有の人々の役割関係が見出される。そしてこの人々の役割関係は、その人がまさしく建築主なら建築主というアイデンティティをもってその場に登場していることと、有意義なしかたで関連している。これを示すのが本章の課題である。

2. 方法

調査方法は、設計打ち合わせ現場に同席し関係者の会話および行為を記録する観察方法とする。関係者の会話はテープレコーダーによって記録し、スケッチ・図面等の二次的資料は可能な範囲で収集する。

調査対象事例は、大きく三つに区別できる供給形態から選ぶこととする。その三つとは、住宅メーカーへ建築を依頼する事例、中小規模工務店・ホームビルダーへ建築を依頼する事例、設計事務所・建築家へ建築を依頼する事例である。

調査事例数は、分析的帰納法の立場から解釈の本質的な妥当性が得られるまでとする。設計打ち合わせ現場に同席するというような観察調査では、質問紙調査のような単発的な調査とは異なり、比較的長期間の調査の中で調査対象者と幾度も接触が可能であるので、仮説の構成と検証を繰り返すことができる。そのような仮説検証の手続きを「分析的帰納法」と呼び、片桐隆嗣

4. 分析に関する基礎的考察

4-1. 会話の順番取りシステム

私たちは、様々なかたちの言語活動を通して社会生活を営んでいる。その中でも会話は、最も中心的な活動である。会話は、私たちにとって身近で自明であるために、会話するということが自体に注意を向けることはまずない。そして、普段の生活で会話自体に違和感を感じることもない。私たちは何らかの「方法 (ethnomethod)」を共同で用いることで解決し、支障なく会話をしているのである。

私たちの社会生活の支障のなさ、私たちが無意識のうちに用いている「方法」によって常に作り上げられているという発想から、社会学において初めて、日常活動それ自体から社会を検討し直す立場をとったのが、エスノメソドロロジーであった。そして特に、社会的行為としての会話自体に注目したのが、サックスを代表とする「会話分析派」と呼ばれる社会学者であった。

会話分析は、最近では言語学においても「語用論 (pragmatics)」の強力なパラダイムの一つとして高く評価されるようになってきているが、これまで言語学においては、会話という社会現象はほとんど向き合われることなく扱われてきた。つまり、会話とは会話に参加している人々がそれぞれ自分勝手に話をする、いわばでたらめな現象だと考えられてきたのである。ほとんどの言語学者たちが、実際に話されたことばではなく、学者の考案になる理想言語をモデルに理論を組み立ててきたことはよく知られている。日常言語に最初に注目したジョン・ラングショー・オースティンの「発話行為論」でさえ、あることばが実際に話された状況に注目するのではなく、そのことばが当該の「発話行為」という効果を発揮するための前提条件を理論化することに終始してきたのである4)。

このような中で、これまで「でたらめな現象」と考えられていた会話の中に基本的な構造を発見したのが会話分析である。その中でも、サックスらによる「会話の順番取りシステム (Turn-Taking System) 5)」は記念碑的な業績である。その他の中心的な成果としても、会話の開始と終結のメカニズム、会話の優先的/非優先的組織化、トピックの組織化、などの研究領域があげられる。

このような「システム」あるいは「構造」は単純であり抽象的である。しかし、単なる研究者の理論化によるものではない。これらは、私たちが様々な状況で適切に会話するのに用いる一つの「方法」であり事実である。社会生活の中の個々具体的な状況において、それに密接に関連したかたちで、私たちはこの「システム」や「構造」を用いる必要があり、また実際に用いているのである。つまり、会話分析が目指している説明とは、ある会話がなされる実際の文脈の特徴を考察しながら、同時にその文脈を超えて一般化することが可能であるような説明である。会話分析はこれを「文脈から自由であると同時に文脈に敏感な (context-free-and-context-sensitive)」説明と呼んでいる。

ここで、サックスらが発見した「会話の順番取りシステム」の若干の説明を行う。

サックスらによれば、会話という社会現象は、主に誰かが話している部分 (順番構成的成分)

と話し手の交代が生じる部分 (順番配分的成分) からなり、この会話の基本単位を一つの順番 (turn) として、それは何度も連鎖的に繰り返されるというものである。言い換えれば、(1) 話すのは一度に一人ずつで、(2) 話し手の交替が何度も起るということである。「会話の順番取りシステム」は、この二つの成分と順番移行の優先順序をめぐる一連の規則からなっている。彼らは、その順番交替のしかたを次のようなルールとしてまとめている6)。

<*>

1 現在の順番における発言が最初の区切りにいったとき、

(a) もしそれまでに、現在の話し手自身が次の話し手を選択したならば (呼びかけ+質問等により)、その選択された者は、次の順番を取って発言する権利をえ、かつその義務を負う。そして順番は替わる。

(b) もしそれまでに、現在の話し手自身が次の話し手を選択しなかったならば、現在の話し手以外の者が自分で自分を次の話し手として選択してよい。そのとき最初に話し始めたものが、次の順番を取る権利をえる。そして順番は替わる。

(c) もしそれまでに、現在の話し手が次の話し手を選択することなく、かつ現在の話し手以外の者で、自分で自分を次の話し手として選択する者もないならば、現在の話し手が話しを続けてよい。

2 もしその最初の区切りにおいて、1(a)も1(b)もおこらず、けっきょく1(c)にしたがって現在の話し手が話し続けることになるならば、1の(a)~(c)が次の区切りでふたたび適用される。そして最終的に順番交替が達成されるまで、同じことが繰り返される。

さて、この<*>というルールがルールと呼ばれるの意味であるが、例えば、私たちは自分が次の話し手として選ばれたのに他の人が割り込んできたら、それはルール違反だと感じるに違いない。しかし、私たちは<*>のように定式化されたルールを、発話順の交替の度に参照しているわけではない。したがって、<*>は、あくまで私たちが日ごろ会話において実際にやっていることを記述したものであるという意味でのルールなのである。

このルールが、私たちの社会生活の中で実践されている場面を想定すると、これに必ずしも当てはまらない状況が現れる。例えば、司会者が次の話し手を指名するという会議においては、話し手の交代が何度も起こることは稀である。また、大学での授業場面を想像すると、先生だけが話し続けることも多い。あるいは、幼稚園においては、一つの順番において一人が話すどころか、一度に何人もの子どもたちが一斉に話し始めるという場面も見られるはずである。

会話分析の主張するこの基本的な実践はこのような状況とは異なる。つまり、それは会議や授業場面といった、ある特定の社会制度を背景としてなされる会話 (制度的状況における会話) ではなく、会話参加者にはほぼ同等の発言権が期待されているような、ふつうの日常会話場面である。つまり、<*>はあくまでも「日常会話」の順番取りシステムである。法定や授業という「制度

的状況における会話」においては別の順番取りシステムが働いているのは確かであり、その意味において、〈*〉は一つの順番取りシステムの一つの記述である。とはいえ、〈*〉に定式化されたシステムは「基本的」なものとして位置づけられていることは押さえておきたい7)。

4-2. 会話分析と制度的状況

サクスラ会話分析の創始者たちは、「日常会話」を資料にして、様々な会話を組織化するルール、会話の語り自体をある秩序に編成していくシステム、成員のカテゴリー化など、会話的相互作用における多くの形式的な秩序化構造を記述し、再構成してきた。

しかし、会話分析は、単に「日常会話」のみを対象とするのではない。先に少し触れたように、むしろ、何らかの組織や制度という「外形的な」影響のもとで営まれる会話の社会現象にも多大な関心がはらわれ、これまで多くの成果が出されてきている8)。これには例えば、病院の診察場面や学校での授業、あるいはテレビのニュース・インタビューといった、様々な社会制度においてなされる会話が含まれる。こうした研究の焦点の変化は、これまでの「日常会話 (ordinary conversation)」の研究をベースにしながらも、そこからの変形である「社会的相互行為における会話 (talk in interaction)」という言い方が採用されるようになってきたことからわかる。

このような日常の会話とはことなる制度的状況における会話について、ドゥルーとヘリティッジは、大きく以下の三つの点を指摘する。一つは、制度的状況における会話には当該の制度において設定された仕事や役目に対する志向性 (orientation) がある。第二に、日常の会話と比較して、会話への参加に対して一定の制限が加えられる。最後に、明確に限定できる特徴を持った推論様式がそこでの相互作用にみられる。そしてさらに、次のように述べる9)。

“相互作用の制度性とは、当該の場面状況や物理的環境で決まるのではなく、むしろ参加者の制度的あるいは専門的アイデンティティがどういうわけか、彼らの従事しているワークにレリバントになるかぎりにおいて、相互作用は制度的になる (Thus the institutionality of an interaction is not determined by its setting. Rather, interaction is institutional insofar as participant' institutional or professional identities are somehow made relevant to the work activities in which they are engaged.) ”

つまり、「相互作用の制度性」とは、外在的な条件や環境によって、前もって一律に決められている属性などではなく、常に、当該の相互作用に参加する人々が具体的な会話的やりとりなどの詳細な作業を通して作りあげるものである。その意味において、会話分析は、ある制度的状況の中で展開する具体的な会話的やりとり (talk) を分析の焦点とするのである。それは、制度を語る人々の実践であると同時に、その実践を通して、人々が具体的に、かつ経験的に「ある制度」を表示しているのである。

会話分析のアプローチでは、場面や状況を自明視したり、前もって存在するものとしては扱わない。そうではなく、それは本来ローカルなその場その時ごとにうみだされ、つくりかえられ得る現象として扱われる。そしてこうした関心のもと、会話分析は相互作用における会話的なやり

とりに注目する。なぜならば、私たちが様々な実際の目標を追求する際に用いる第一の手段であり、多くの専門職や組織を代表する人々が日常の作業をおこなう場合、中心的に用いている手段であるからである10)。

さて、具体的に会話的相互作用のどのような次元に注目するのかについては、おなじくドゥルーとヘリティッジは、これまでの分析を整理して、(a) 語彙の選択 (lexical choice)、(b) 順番のデザイン (turn design)、(c) シークエンスの組織化 (sequence organization)、(d) 全般的な構造的組織化 (overall structural organization)、(e) 社会的なエピステモロジーと社会諸関係 (social epistemology and social relations)、の5つの次元に整理している11)。

確かに、会話分析である以上、素人が使う語彙と専門家が使う語彙の対照や、誰がいつ話すのか誰がいつ話せないのかの会話の順番達成、あるいは、参加者が自然と感じることのできる会話のシークエンスに注目しているといえる。しかし、特に(d)(e)を見るかぎり、彼らの整理には、制度的状況での会話をそれ自体「内在的」に、分析手法を遵守しながら分析せよといったような方法論的な厳密さ、あるいは偏狭さは見られない。そこでは、会話に焦点をあてながらも、個々の状況を構成するエスノグラフィックな諸要素、あるいは人々の生活を構成する歴史性や文化性など、会話の外へ分析の視野が向かっている。

ここにおいて、会話分析により自由な方法論的広がりを見ることができるといえる。

4-3. 制度的状況における「Ethno-design-method」

例えば、病院での診察場面を常識的に想定してみる。それは日常の会話と比べ、圧倒的な違いがあることがすぐ理解できる。

患者が、医者のもとを訪れる理由は何か。それは言うまでもなく、患者自身あるいは身近な人が「病気であること」を医者に調べてもらい、さらに、医学上特定された病気を治療してもらうためである。そのとき、患者と医者との相互作用上の位相は、医者が病気を治療する処方、すなわち、専門的な知識を開示し説明し患者の状態について評価を下すという点において、圧倒的な落差がある。つまり、医者は患者に対して、診療行為の中であらかじめ圧倒的な「優位」に立っているといえる。そして、この「優位性」あるいは「非対称性」は、確かに医者という職能的役割に書き込まれたものであるかもしれないが、それが具体的に実践され、固有の意味を帯びてくるのは、患者との会話的实践を通してなのである。

医療場面の会話分析は、この「落差」に焦点を当てる。具体的には、会話分析は、診療という場面の中で、医者、患者という役割を演じている人々が、具体的にどのようなかたちで「非対称的に、相互作用をつくりつつあるのか、そのパターンはいかなるものなのか、等などを明らかにする。

例えば、ポール・テン・ハーヴァは、「非対称性」とは、医者-患者の相互作用が開始される以前から確保されているのではなく、まさに彼らが医療という場面で会話することを通して、多様なかたちで達成されていることを指摘する。彼は、診療場面の具体的な会話データの検討から、

医者-患者間の相互作用に見られる二つのスタイルをあげているが、それらは「非対称性」を構成する実質的な内容と読み取ることができる。一つは「イニシアティブの独占 (monopolizing initiatives)」であり、今一つは「情報の抑制 (withholding informations)」である¹²⁾。また、クリスティアン・ヒースは、一般診療場面で医者が診断をどのように語り、患者がそれをどのように受容するのか、を詳細に検討することで、医者-患者間の相互作用で「非対称性」が積極的に保持されていることを分析する¹³⁾。

さてここで、住環境デザインの場面に目を向けると、そこには私たちが普段行っている日常的なコミュニケーションとは異なるコミュニケーションが存在し、それはまさに制度的状況による人々の実践であること、医者-患者間と同様、建築主と建築専門家 (例えば設計者) の間にも大きな落差があることに気がつく。そしてまた、本論文第3章においても、戸建住宅の建築過程の実態に関する建築主および関係者への面接調査のもと、建築主の事後的評価の分析を通じて、建築主と関係者との間に「非対称性」がうかがわれることを述べた¹⁴⁾。

このことは同時に、住環境デザインにおける人々の「Ethno-design-method」を考えると、「非対称性」は一つのキーワードとなりうることを示唆する。例えば、建築主と建築専門家との間にはいかなる「非対称性」が存在し、そしてその「非対称性」は「Ethno-design-method」としてどのように実践されているのか、そして、それはどのように住環境デザインの内容とかわり合っているのか、などである。

このように、「非対称性」をキーワードとした住環境デザインにおける会話分析は、会話という領域に焦点を合わせながらも、会話以外の多様なコンテキストへ分析の実践を広げていく。言い換えれば、会話分析を通して、住環境デザインをめぐる人々が行う様々なプラクティスが、状況普遍的で一般的に取りだせる装置などではなく、徹底して個別の文脈に依存したものであり、状況 (制度、組織) と常に相互反動的 (reflexive) であることを鮮明に示すことができるのである。

住環境デザインを制度的状況における人々の「Ethno-design-method」の実践として捉えること、それが本調査での基本的な分析視点である。そして、そこにおいて会話分析を導入する最大の意義が存在する。

5. 考察

5-1. 注文者-設計者

(1) 否定的反応における順接

私たちが、会話の中で相手の言っていることに対して否定的な反応をすることは、決してめずらしいことではない。例えば、次の会話例は、ある建築主とその妻が打ち合わせの合間に交わした雑談の一部である。

[会話例 4.1]

Cは建築主、Wは建築主の妻の発話を示す。

1W : 今日ね、野菜ジュースをS店で買ったんやけど、やっぱりちょっと安かったわ。

2C : なんぼやったん?

3W : 一本が278円で:

4C : でもな、お母さん、

4W : 計算でけへんけど、安かったで。

5C : R店よりも高いわ、それ、R店やったらもっと安く買えるわ。

[会話例 4.1] では、CはWに非同意を示しており、4Cで、対照化の標識 (「でも」) が用いられている。

このように対照化が行われるということは、決して、相手の発言を頭ごなしに否定したり、攻撃的に応答していることを意味するわけではない。むしろ、それは逆であり、例えば「でも」というような対照化を、具体的な反論なり疑義の提示なりに先立って行うことで、これから何らかの発言を持ち込む可能性を相手に投企するような働きをしている。つまり、相手との対照性を有標化することで、その後発言する反論なり疑義の提示なりをスムーズに展開することができるのである。

次の [会話例 4.2] も雑談の一部であるが、Cの発話は、Wではなく、Dへむけられている。Wの発言に対する疑義を実際に提示しているのは、そのCの発話を受けてのDの発話である。いわばCは、自らの発言内容をDにわざわざ迂回させて確認することで、Wへの否定的反応を和らげているのである。

[会話例 4.2]

Cは建築主、Wは建築主の妻、Dは建築主の娘の発話を示す。

1W : 最近、Hさん見かけへんね:、どうしてるんかな。

2C : えっ、Hさん? この前見たよな?

3D : うん、見た見た。

4C : どこやったっけ?

5D : コープの駐車場ちゃうの。

ところで、建築主が専門家の助言や見解に対して否定的に振る舞うとき、ある際立った特徴が観察される。第一に、先ほど述べたような対照化が行われぬ。第二に、むしろ、その当の助言に順接していることがマークされる。例えば、次の会話例は、住宅メーカーに依頼した建築主と営業担当者との打ち合わせの場面において、営業担当者が建築主に鉄骨造のメリットに関する助言を行う場面である。

[会話例 4.3]

W は建築主の妻、S は住宅メーカーの営業担当者の発話を示す。

1S : それと、今お子さんのお話で、え：、暴られる、というお話が出てきたんですけども、
でしたら、あの：、ま：、この建物でしたら、ALC という鉄骨独特のコンクリート材が入れ
られるんですね。だから、お子さんが友達を連れてこられて多少どどん、どどんされて
も1階は全然響かないとか、

2W : う：ん。

3S : そういう良い点が出てきます。木造の場合とはちょっと違うとこですね、それは。

* (4.0)

4S : そういう点では、お子さんが暴れたからといって、怒らないといけないうことはな
い
ですね。

* (1.0)

5W : ま：、そうですね、ま：、自分の家やからね、よそって暴れたら怒らないとあかんけど、

6S : ははは。

7W : 自分の家ぐらいはね、好きなように。

* (2.0)

8S : あ、でも／／

9W : それで、これは対面キッチンできますよね。

10S : そうですね。

11W : こっち向きに

12S : できます。

営業担当者は、[会話例 4.3] に先立つ建築主の「普段は、うち子供がすごい暴れるんですよ」
の発言をもとに、鉄骨造は木造に比べて大きな柱間を取ることができるだけでなく、「ALC とい
う鉄骨独特のコンクリート材が入れられる」ことで、上下階の遮音性も高く確保できるという
ことを助言しようとしているのだが、[会話例 4.3] での建築主の発言は、全体としてみれば、営
業担当者の助言と対照的な構成になっている。つまり、4S において、営業担当者が上下階の遮音
性を高く確保できるので「お子さんが暴れたからといって、怒らないといけないうことはな
い」と問題の解決として勧めていることを、建築主は「ま：、自分の家やからね」(7C) と、
自らの住宅の設計の問題として、それは意味のないこととして発言している。

しかし、この建築主の発言においては、「でも」といった対照化の標識は用いられていない。
むしろ逆に、いこの対照的発言を導入するのに「ま：」という順接の標識を用いている。さらに、
9C でも、営業担当者の発言に割り込んで話題を転換させているのだが、ここでも「それで」とい
う順接の標識が用いられている。

このパターンは繰り返し観察される。建築主は、専門家の助言や見解の性能に、多かれ少なか

れ否定的に関わるような発言をするときは、多くの場合「それで」「ま：」などの順接の語を冒
頭に置いている。

建築主は、そもそも専門家の助言や見解に対して否定的反応をすることが少ない。ところが、
実は専門家も、建築主の語ったことに対して否定的反応をすることが非常に少ない。しかも、専
門家はその否定的反応に先立って行う対照化は、「でも」などのような、それ自体はっきり逆接
を意味するような標識によってなされない。

[会話例 4.4]

C は建築主、W は建築主の妻、D は工務店の設計担当者の発話を示す。

1C : 1階先に、お婆ちゃんこから、あれ、お婆ちゃんこやっぱりね、これ。

2D : はい。

3W : 4畳半、狭いん違うかな：って思って。

4D : そうですね、前はま、こういうかたちでね、6畳にしましたから、こちらに／／

5C : これ、このへんまで出したって欲しいねん。

6D : あっ、そちらまで。

7C : うん。

8D : はい。

9W : やっぱり4畳半やったら狭いで。もし介護あたる時になったら、狭いかな：思って、4畳半
じゃ。

10D : そうですね、ま、一人でね、住むんでしたら、ま、4畳半で。

[会話例 4.1] および [会話例 4.2] については、おおむね相手の言ったことの真偽、もしくは
そこに表明された相手の意見の真偽に関わっている。それに対し、[会話例 4.4] での工務店の
設計担当者の発言(4D と 10D) は、そのいずれにも関与していない。このように、同じ否定的
反応と言っても、何に否定的であるかに関して顕著な違いがある。

この違いは、後者が、設計打ち合わせの一部であることと本質的に関連している。言い換えれ
ば、設計打ち合わせにおいて建築主および専門家は、どうやってそれぞれ「建築主であること」
「専門家であること」を成し遂げていくのか、という問いである。

(2) 情報の収集と整理

専門家は、建築主に助言を与えたり、見解や説明を述べたりするために、建築主から必要な情
報を集めなければならない。言い換えれば、専門家が建築主に対して「専門家」であるのは、相
談者の発言を情報収集のための素材として聞くことによって達成される。

[会話例 4.5]

W は建築主の妻、S は住宅メーカーの営業担当者の発話を示す。

1W : まあ、慣れた人はいいいですけど、え：、ぱっと見てあんまり玄関の位置がはっきりしない位置というのは／／あんまりいいことないってよく聞くもんでね。

2S : うん はい。

3W : ま：、それでお父さんに相談したら、別にあの：生活しやすいところで：

* (0.5)

4S : ええんちゃうかと。

5W : うん、そんなに鬼門とかは：

6S : 心配せんででええよと。

7W : 気にしない。

8S : はい。

* (3.0)

9W : でああ、そんなこと、逆にあれがあかん、これがあかんというて考えてたら、もう、気にしてたらきりがないうて言うんですよ。他いろいろ水まわりのこととかね。

10S : はい。

11W : こないだ不純物のこととかおっしゃってましたけど。

12S : はい。

13W : だから、一応、生活しやすいように、好きなように考えたらいいって、そういうことでした。

14S : はい、わかりました、そしたら、あの：、逆に言うところでも全然問題ないと思うんです。で、むしろお父さんとかお母さんの御要望からすると、ま、母屋に近いですから、

* (0.5)

15S : ここがいいかなと。

16W : ふふふ、はははは。

ここで4Sと6Sに注目すると、営業担当者は建築主の発言に積極的に介入し、それに続くはずの相手の発言内容を自ら発話していることがわかる。しかも、「ええんちゃうかと」「心配せんででええよと」というように、「～と」というかたちの発話で添えられている。また14Sでは、営業担当者は「はい、わかりました」と、一連の会話を通して建築主の情報を取得し、整理したことを意図的にマークしている。

このように、専門家は設計に関わる上で必要な情報の収集と整理に徹するのである。このことは、[会話例 4.5]の会話内容に踏み込んでみるとわかりやすい。建築主は、「ぱっと見てあんまり玄関に位置がはっきりしない位置というのはあんまりいいことない」とか「そんなに鬼門とかは」と述べているのに対し、専門家の発言は、その内容に関して直接的に答えることはせず、建築主の言ったことの真意、もしくはそこに示された意見の真偽や妥当性に対して、そのいずれ

にも関与していない。つまり、そうすることで中立性を呈示し、もっぱら設計に関わる情報として取り上げることで、「設計者であること」を成し遂げているのである。建築主の発言がもっぱら情報収集のための素材として意味を持つこと、このことは専門家の一定のやり方（実践）を通して構成される。

設計という行為の一つには、建築主の注文や希望の内容を、計画条件や課題として整理し、それをうまく組み立て、建築物として成立させることがある。したがって、[会話例 4.5]のように、建築主の発言から、設計に必要な情報を収集し整理することはごく自然なことである。しかし、極端に言えば、専門家は建築主の発言を要約したり、整理したりした内容をわざわざ発話する必要は必ずしもない。しかしながら、専門家による情報の収集と整理の有標化は、設計打ち合わせにの現場においてしばしば観察される。

それには、会話の継続促進が理由であると考えられる。日常の会話におけるあいづち（「うん」「ええ」など）といった継続促進語と同じ働きであり、むしろそれよりも積極的な促進を示す行為である。このことは、次の会話例の8Sと21Sの発話に対する建築主の応答を見ると明らかである。建築主は8Sに対し「あ、入ってるんですよ」と、21Sに対しては「閉められるようなドアがあって」と、専門家の発話を反復して応答することで、自らの話題の展開させている。

[会話例 4.6]

W は建築主の妻、S は住宅メーカーの営業担当者の発話を示す。

1W : あのね、木造で設計してもらおうとね、

2S : ええ

3W : こういうのができないんですよ。

4S : あ：、大開放／／がね

5W : 木造は、あの、柱があるんでしょ。

6S : はい。

7W : だから、こういう設計でも、一つ一つの部屋が、全部どういかな？

8S : 間仕切が入ってるですね。

9W : あ、入ってるんですよ。ああうちちょっと、落ちるようなんがね。

10S : はい。

11W : あれが気になってね、鉄骨やったら結構広い場所がすごい取れる／／でしょ。

12S : 取れますよ。

13S : はい。

14W : 鉄骨のあの、こういう会社を見たら。

15S : ええ

16W : だから、空間がほしいんですよ、私は逆に。

17S : うんうん。

- 18W : あの、1階に関して言えば、
 19S : うん。
 20W : もう、ばーっとこう広くなって、一応まあ、暖房とか冷房を入れるときには：
 21S : 閉めれる。
 22W : 閉めれるようなドアがあって、ただまあ、普段は、うち子供がすごい暴れるんですよ。

では、このような情報の収集と整理そして会話の継続促進は、専門家が一方的に実践しているのであろうかという点、決してそうではない。もう一度 [会話例 4.5] に戻って 3W と 5W に目を向けてみると、建築主は、3W では、話を音の延ばし（「生活しやすいところで：」）と間（0.5 秒）、5W では、音の延ばし（「そんなに鬼門とかは：」）を取ることで、専門家への情報の提供を意図的に押さえていることがわかる。これは、建築主も、助言者による情報の整理の発言とその介入を待機し、促すという実践を行っているという理解できる。

次にあげる [会話例 4.7] では、建築主は、自らの話を 0.5 秒の間を取って中断させることで、判断の発言のイニシアティブを積極的に受け渡しているのが分かる（4W～6W）。

[会話例 4.7]

W は建築主の妻、S は住宅メーカーの営業担当者の発言を示す。

- 1S : 例えば、玄関でしたらここでいいんでしょうか？

* (1.0)

- 2W : 玄関はね：、東側も考えたんですけど、

- 3S : はい。

- 4W : やっぱりちょっと、

* (0.5)

- 5S : 遠いかなと＝

- 6W : ＝ですね。

- 7S : はい。

もし、日常の会話において、私たちが話をしている相手に逐次このように自分の発言内容を要約されたり、また逆に、設計の打ち合わせにおいて、このような「要約」や「整理」がなければ、非常に違和感を感じるに違いない。専門家が、私たちの言うことを「はい」や「うん」とでしか答えなかったり、常に黙っていたりすると、本当に聞いてくれているのかなどと評価されることとなる。

つまり、このような「要約」や「整理」は、注文者-設計者という役割関係を維持するために必要な実践なのである。そして、設計打ち合わせにおいて、計画条件や課題を明確にし、それをスムーズに組み立て解決していくための人々の非常に巧みな協働的実践なのである。

では次に、この「要約と整理の協働的実践」にくずれが見られる場面を取り上げることとする。

[会話例 4.8]

C は建築主、S は住宅メーカーの営業担当者の発言を示す。

- 1C : そのむこうが言うには：

- 2S : はい。

- 3C : ようは：、水路がありますから：、その工事するときに：

- 4S : はい。

- 5C : ゆんぽかなんか／／多分入る／／んと思うんですけども：

- 6S : はい。 はい、はい。

- 7C : あの：ようは、そのまあ、振動とかですね、

- 8S : はい。

- 9C : へへ。ありますから、あの：かなりこう、開けてくれよ、開けといってくれよと。

* (0.5)

- 10S : あっ／／あ：

- 11C : というふうなことを／／言うてたんですよ。

- 12S : はい、はい、はい、はい、はい。

- 13C : で、まあ、あの：ま、むこうはなんか 10 メートルぐらい開けてくれとかいう話やったんで、そんな 10 メートルやったら家建たへんやないかっていう話になって。

- 14S : へっへっへっへ、10 メートル、10 メートル開けたらね＝

- 15C : ＝そうそうそう、言うたんですよ。でま：うちの親も、はいはい言うて聞いているだけなんでね。

- 16S : はい。

【中略】

- 17C : あ、あの幅はですね、幅はえ：、幅は 2 メートルぐらいですか／／2 メートル、深さ 2 メートル／／ぐらいの。

- 18S : ふ：ん。

- ふ：ん。

- 19C : 水路であ／／

- 20S : 何であけてくれ言うんでしょうね。

* (2.0)

- 21C : いや＝

- 22S : ＝いや＝

- 23C : ＝いや、ま、むこうがどういう、そのたぶん言っているのは、その、あの：別に工事する人ではなくて。

- 11C : ふ：ん。
 12D : その分は坪数が減ってます。
 13C : ふ：ん。
 14D : はい。

この[会話例4.9]の分析にはいる前に、日常の会話における割り込みについて触れることとする。

第4章の4-1にて、サックスの提示した「会話の順番取りシステム」について若干の説明を行ったが、ここから分かることは、会話の順番取りシステムにおいて最も優先されることは、相手がどのような順番取り規則を使うのか、いつも注意を向けて聞いていなければならないということである。

このことは同時に、会話の順番取りシステムが規範的に運用されていれば、発話と発話のオーバーラップは、発話間の沈黙を最小化するように働くということである。なぜなら、会話に参加している者たちは、適切に会話に入っていくために、今話されている発話の発話順番がどこで終わりそうなのか、つまり今の発話の順番の潜在的完結点がどこになるか、絶えず分析しているからである。つまり、発話と発話の間の割り込みやそれに続くオーバーラップは、順番の潜在的完結点において規則的に起ることになる。次の会話例がそれを示している。

[会話例4.10]

Wは建築主の妻、Dは建築主の娘の発話を示す。

- 1W : Yちゃん、もうトイレに行った？ まだ／／行ってない？
 2D : 行ったよ：

[会話例4.10]を見ると、割り込みが生じている点は、すぐ前の発話順番が完結する可能性を持っている点であることがわかる。Dの「行ったよ：」が割り込んでいる点は、Wの「もうトイレに行った？」という問いが完結した点である。言い換えれば、もしここでWの発話が終わっていたら、Dの返答は適切なものになっていたはずである。ところが、実際にはさらに発話が続いたために、割り込みが生じたのである。

逆に、潜在的完結点以外で割り込みが生じたとしたら、それはつまり、相手の話を最初から聞いていない、聞くことが動機づけられていないものとして相手に聞かれる可能性を持っているということの意味する。

ここでもう一度、今述べた日常の会話における割り込みと比較して、[会話例4.9]の割り込みに注目する。この場面において割り込みが見られるのは、6Wと8Wとである。これらはいずれも、その前の設計担当者の発話(5Dと7D)とはなんら関係のない発話内容となっている。つまり、これらは明らかに、会話における潜在的完結点を無視した割り込みとなっているのである。

次にあげるのは、住宅メーカーの営業担当者が建築主にリビング・ダイニング・キッチンまわりの平面計画を説明している場面である。

[会話例4.11]

Wは建築主の妻、Sは住宅メーカーの営業担当者の発話を示す。

- 1S : で、ま、キッチンがあって、リビングがあって、ダイニング、ま、こうダイニングでしょうね、きつとね。

* (2.5)

- 2W : え、キッチンがあって：？

- 3S : え、え：と、例えばね、ここにキッチンがありますよと、で／／

- 4W : キッチン是对面キッチンで。

- 5S : 対面ですね。

- 6W : はい。

- 7S : で、ダイニングがこうあって、

- 8W : はい。

- 9S : で、ここにリビングがこうあると。

* (1.0)

- 10W : あ：、あ、そうですね：

- 11S : ええ、それから／／

- 12W : で、和室と、それでなおかつ繋げるとなったらどうなります？

- 13S : 和室をこの辺に持ってきたらいいんじゃないですかね。

- 14W : ここ。

- 15S : ええ。

- 16W : こことちょうど逆転した形ですかね。

- 17S : そうですね、この辺ですね。

この場面では、4Wと12Wに割り込みが見られる。これらいずれも、潜在的完結点を無視した割り込みである。しかしながら、営業担当者は、この割り込みに対してすべて応答を行っている(5Sと13S)。これは、[会話例4.9]でも同様である(7Dと10D)。つまり、設計打ち合わせにおける相互行為では、潜在的完結点を無視した割り込みがあるのが当然、というわけなのである。

このような潜在的完結点を無視した割り込みは、設計打ち合わせの場において頻繁に観察される。つまり、注文者-設計者という役割関係に一つの非対称性が観察できるのだが、ここからただちに、例えば、建築主は専門家に対して「クライアント(顧客)」という優位性を持っているから、専門家は割り込みに忠実に従わなければならない、という判断へ至ることには注

意が必要である。

例えば、もし専門家が建築主のこのような質問に答えることをせず、自らの説明や提案、助言を推し進めて行く場面を想定すると、「あの設計者はこちらの話に耳を傾けない」などと、専門家はその職能を大きく疑われ、たちまち設計の打ち合わせは破綻することが考えられる。

つまり、専門家は、忠実な応答を実践することを通して、自ら「専門性」を呈示し、専門的職能である「設計者であること」を成し遂げているのである。また、逆に建築主も、潜在的完結点を見失った割り込みによって、「注文者であること」を実践しているのである。

次の会話例は、敷地の幅の限界の中で、どのようにして和室を平面計画的に収めていくかという課題について取り組んでいる場面である。この【会話例4.12】の打ち合わせのために用意された1階平面図を図4.1に、営業担当者がその場の説明に用いたスケッチを図4.2に、この打ち合わせを経た後での1階平面図を図4.3に示す。

【会話例4.12】

Cは建築主、Wは建築主の妻、Sは住宅メーカーの営業担当者の発話を示す。

1S : 大体のね、【東西】間口だけ決まってるんです。この長さはなんとでもできるんですよ。

2W : あ：、あ：、はいはいはい。

3S : 間口だけは大体4メートル／8メートルぐらいになりますかね。

4C : そうですね、限りがありますからな。

* (3.0)

5W : これでいくと、ここは、どうなります？

* (0.5)

6W : リビングは？

7S : これで／／いくとね、ふ：ん。

8W : ちょっとへっ、へっこむぐらいですか？、和室より。

9S : そうですね：、和室よりも、う：ん、これでいったら、う：ん、へっこめても3でしょ。で、廊下入れたら、2の3、7、7やから、そんなにはへこまへんとおもいますわ。それと、後ここは和室6畳いります？

* (2.5)

10W : そうですね、4畳半とかやったら、6畳：、いりますね。

11S : あの：／／

12W : と、あと、あの、一般的にあるように、ちょっと、床というか、

13S : 床ね：

14W : ここだけ？

15S : そうでしょうね。

16W : このへんは？

17S : こういるやろな：

18W : それで、あと押し入れとか。

19S : あ：、なるほどね：

20W : そうすると和室も大きいから、やっぱこっちですかね。

21S : そうですね、こう向け【東西】に和室を取ったら取れないんですよ。要はね、この幅が決まってる、こっちはどうにでもなるんです。

22W : あ：、はいはい。

23S : だから、あの：、床の間を取ろうと思ったら、こう、床の間がこうきて／／和室があって。

24W : 長くなりますね。

25S : この向きばかり取られるんですよ。

26W : ふ：ん。

27S : で、リビングがこうくる、例えばね、こうきますよね、そしたらこれ3メートルでこれ4メートルですから、あと、あと7やから1メートルほどしかないですよ。

28W : あ：

29S : ほんまは2メートル欲しいんですよ。

30W : はいはい／／玄関上がったとこ。

31S : 玄関がね、ええ、玄関に2メートルほしいんです、どうしても。最低3メートルやから、ここ3メートルしか取れないんですよ。そしたら5.4やったら、こんな感じで取れるんですけど、そうですね、今いわれるように和室ここに持ってこない、取れないでしょうね：

32W : あ：、そうですね：

33S : 4畳半ぐらい、だったらいけますけど。

34C : 和室はこっちで／／ええやん、ほんでリビングがこっちの東南の角の方がいいやんか。

35W : こっちでいっか。

36C : ほんでドーンと長くすれば。

37W : ここは多分、でもまあ、一番テレビ置いたりして。

38S : うん、過ごされる時間が長くなる／／場所だと思います。

39W : ですよ。

40S : ええ、だからこれを長くして、ほんならちょっともう一回書きますね。

【図4.2のスケッチを書く】

営業担当者は、和室を収めるにあたって、敷地の形状に伴う建物の幅の制限について説明し(1S~4C)、建築主の質問に答えたあと(5W~8W)、当該課題を解決するために、建築主へ和室6畳の必要性について尋ねている(9S)。

建築主の6畳は必要であるという発話のあと、営業担当者は、何らかの発話をしようとする(11S)、建築主の割り込みが行われる(12W)。営業担当者がこれに応答するかたちで、話題

は一時、床の間および押し入れの設置に移行するが、営業担当者は、もう一度「間口の限界」を説明することで話題を引き戻し、床の間の設置の条件を加味したうえで和室6畳の収め方を検討へと持ち込む。

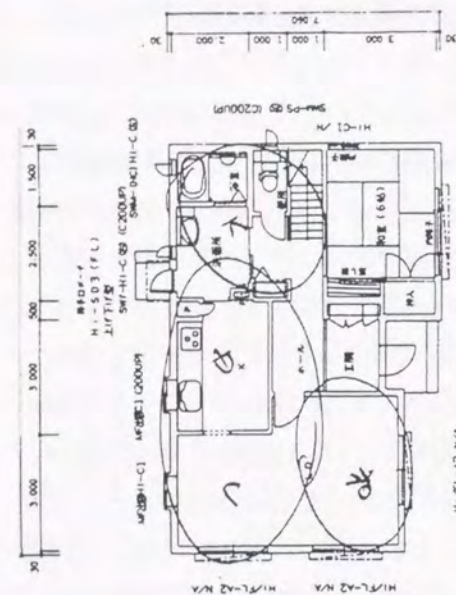


図 4.1 SA 邸 1階平面図(1999.11.25) 1/200

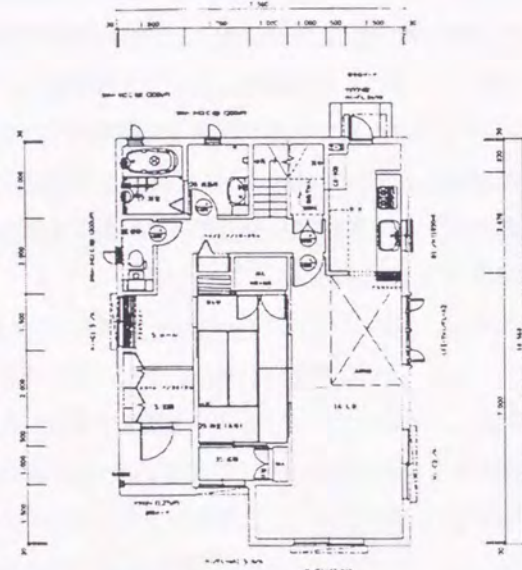


図 4.3 SA 邸 1階平面図(1999.12.4) 1/200

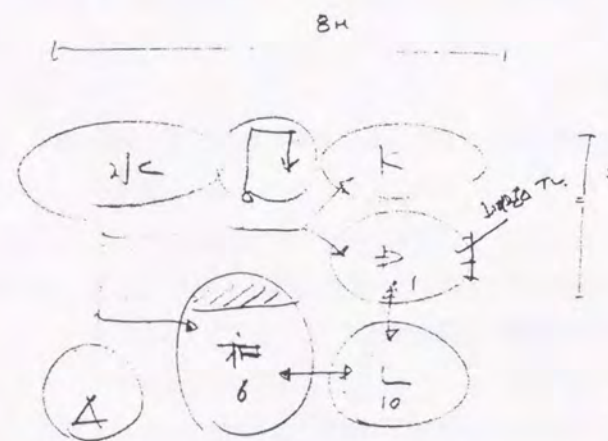


図 4.2 SA 邸 スケッチ(1999.11.30)

そして、様々な平面寸法上の説明とともに、あらためて、4畳半であれば現状で解決可能であることを告げることで(33S)、「平面を長くするのか」「4畳半で収めるのか」という二つの選択を建築主に提示し、建築主の判断を促している。

このようなやり取りを経て、「和室6畳の収め方」という課題は一応の解決をみたのであるが、結果的にみると、建築主の「床の間」の割り込みは、当該課題の解決には必要な情報であったこ

とが分かる。建築主も、ただ単に、その場その場で思いつくままに希望を伝えるために割り込んでいるのではなく、「和室の収め方」という課題において必要な情報を提示すべく、「床の間」の発話を割り込ませているのである。

このように分析すると、もし建築主の割り込みがなければ、この「和室6畳の収め方」という課題は、解決されないことはなくとも、情報不足のまま妥当な案が見出せない状態で保留されていた可能性があると考えうる。

つまり、建築主の「潜在的完結点以外での割り込み」と専門家の「応答」がなければ、設計打ち合わせというデザイン行為は達成されることはないのである。「いま、どのような役割関係で、どのようなタイミングのもと、何をすべきなのか」、その実践こそが「Ethno-design-method」なのである。

(4) 質問的提案とデザインの協働的産出

このように、「潜在的完結点以外での割り込み」に見られるような建築主の取り組みは、デザインの内容や質と深く関わるようなかたちで意味をなしているわけである。ここでは、そのような建築主の能動的・積極的実践をもう少し深く探ることを目的に、建築主の「質問的提案」という実践に注目して、それがどのような意味をもって実践され、どのようにデザインの産出と関わっているのか、について考察を行う。

[会話例 4.13] は、それに先立って検討されていた寝室からの利用を想定した1階から2階への階段下の収納について、壁面が減るという理由と、収納は西側に十分確保できるという判断を受けて、建築主の妻が、アトリエ側からの利用を話題に上げるところから始まる場面である。そしてそれに対し、建築家は、下駄箱としての利用という助言を行っている。[会話例 4.13] の打ち合わせのために用意された1階平面図を図 4.4 に、階段周辺部の拡大図を図 4.5 示す。

[会話例 4.13]

Cは建築主、Wは建築主の妻、Aは建築家の発話を示す。

1W : こっち側(アトリエ側)は、もう、なん、なんにもないんでしょ。

2A : うん、そっか、こっち側は、ま、これ／＼はね

3C : 。。。 だから、こっち側は使ったらええわけでしょ。

4A : そうか、下駄箱をね、こっち側にちゃんと入れるかですね、ここへ。

5C : うん?

6A : ここへ、下駄箱、下駄箱をここに考えると。

* (0.5)

7C : はいはいはいはいはい、なるほど。

8A : ここ【階段】(→図 4.5 ①)の下だね。

9C : うん。

当然、専門家は質問されることによって、その質問が何を意味するのかを推論する(31A・32A)。それが提案であれば、その提案の可能性を検討し評価したうえで、反応を示す(34A)。そして、専門家は専門家であるがゆえに、その検討内容とその評価を「専門的」助言として提示する(35A)。

これに対し、建築主は、この建築家の一連の行為を「ここは？」の一言で引き出すことで、自らの提案を「専門的」提案へとすり替えることができるわけである。そして、専門家の示す内容や方法を「注文者」として評価し判断することができるのである(39W)。これは、ある意味「素人性」に守られたトピック・コントロール(15)を行っていることを意味するのであり、同時に、建築主自らが「素人」を志向(オリエンテーション)していることも意味する。

あるデザインの可能性に対し、総合的に判断し最善の方法を考えるならば、建築主のこのやり方は、専門家がその分野の知識と経験と技術に秀でた職能であるかぎり、もっとも合理的な実践だといえるだろう。そして逆に、専門家の職能は、そのような提案や助言の性能如何によって評価されるのかもしれない。

ではここで、このような建築主の能動的・積極的実践が、どのようにデザインの産出と関わっているのかを見ることを目的に、[会話例4.13]の内容的な流れを押さえることとする。

14Aから23Cのやり取りにおいて、(3)で論じた「潜在的完結点以外での割り込みと応答」が見られるが、この建築主の割り込みのデザイン内容的な意味は、「靴の収納の仕方」というトピックにおいて「靴が収まるスペースのサイズ」というキーワードを提示したことである。つまり、この建築主の割り込みによるフォーカスがなければ、30Wの建築主の妻による質問的提案「ここは？」は出てくることはなかったということである。それを端的に証明するのが、24Wの建築主の妻の発話「じゃあ」である。ここでは、結果的に、割り込みに対する応答から、下駄箱としての利用という助言へもどる専門家の発話に順番を譲っているが、彼女が、23Cまでの会話を受けて何かを発話しようとしたことは明らかである。そして、順番を譲ったうえで続く発話が、28W以降である。

そして、先ほど述べた「ここは？」を受けての、建築家による「上がり框の下のすき間の利用」の具体的な方法(丁番をつけて開く)と問題点(ガタガタする)の助言に対し、建築主の妻は39Wにおいて「ガタガタ嫌じゃない？」と評価を下している。当然、建築家による具体的な助言がなければ、この評価も下すことはできなかったはずである。そして、その建築家の助言は、「質問的提案」によって導き出されたものである。

以上の分析から、人々の協働的実践の有り様が、いかに生み出されるデザインの内容や質と深く関わっているか、そして、そのような人々の実践もデザインもいかに状況的であるのかが明らかとなった。

5-2. 購買者-販売者

(1) 情報の抑制

設計の打ち合わせにおいては、専門家が建築主へ積極的にある「ニュース」を持ちかける場面がしばしば観察される。

当然、「ニュース」というものは、まだ一般には知られていない耳寄りな情報の知らせであり、かつ聞き手に対して新鮮なインパクトを持たなければ、「ニュース」として成立しない。したがって、専門家のもつ「ニュース」を建築主にとっての「ニュース」として成立させるためには、積極的に打ち合わせの流れのイニシアティブを握ることで、専門家がトピック・コントロールを行うことが予想される。いわゆる、私たちが一般に「セールス・トーク」と呼ぶものもその一つである。

[会話例4.14]

Wは建築主の妻、Sは住宅メーカーの営業担当者の発話を示す。

1W : ただ、木造のところでも一つ設計してもらって、

2S : ふんふん。

3W : それもまだ完璧ではないんですけどね、あの：、繋がってるんですけど、

4S : ふ：ん。

5W : かなりどう言うのかな、部屋と部屋が一つずつあるという感じで、

6S : ふ：ん。

7W : そうなってしまうんですね、//木造の場合は。

8S : そうですね。

9W : 柱をこう、そんなに遠くに//離せない。

10S : 飛ばせない。

11W : ですよ。

12S : ふ：ん。

13W : それほど強度がないからですよ、木の場合は。

14S : ですよ、う：ん。

15W : だからね、どっちがいいのかな：って思うんですけどね。鉄骨の場合は、ほんとにオープン
というか、こう広い空間がありますよね。

16S : だから、逆に言うとも何でもO.K.です。

* (1.0)

17W : そ、そうですね=

18S : =ええ、例えばこれ全部、例えばリビングにしましょう、できます。

* (2.0)

19S : 例えばね。

- 2W : びっくりするぐらい？
- 3S : ええ、あの：、システムキッチンの値段いうたらどれぐらいだと思ってらっしゃいます？
ま、いろいろあるとは思いますが、イメージとしては？
- 4W : この流し／＼だけで
- 5S : はい、はい。
- 6W : これだけですよね。
- 7S : ええ。
- 8W : 裏の収納、こうゆう戸棚なしで。
- 9S : 入れなくて、はい。
- * (2.5)
- 10W : 100万もしないですよ。
- 11S : そうですね：、100万は、うちのやったら多分ね、このタイプだったら、あ：、5、60万。
- 12W : 割引されて？
- 13S : うん、ただね、一般の商品で一度ね、ショールームなんかご覧になって見てください、すぐ何百万っていいいますから。
- 13W : あ：、ふ：ん。
- 14S : システムキッチンってびっくりするぐらい高いんですよ。
- 15W : 高いですね。
- 16S : ええ、ただね、それはあの、中間の業者さんがかみすぎなんですよ、ほんとは。うちの場合、例えばN社ならN社で、作ってくださって言って、メーカーで作ってもらって、そのままうちが工場から中にいれるんですね、現場へ。だから結構安いんですよ。ま、正確にはN社ならN社で、設備屋さんを通して現場に入るんですけども、結構安いんですよ、そういう意味では。
- 17W : ふ：ん。
- * (2.0)
- 18W : そっか：
- * (5.0)
- 19W : あとは細かいもんが、電子レンジを置く台とか。
- 20S : ええ。
- 21W : ねえ。

一見して、営業担当者が提示するニュースへの建築主の反応の低さは感じ取れる [会話例 4.15] において、営業担当者は、自社のシステムキッチンが安いというニュースを始めに提示し、「システムキッチンの値段いうたらどれぐらいだと思ってらっしゃいます？」(3S)という質問で情報を抑制し、会話の流れのイニシアティブを握ることを試みている。当然、この質問に答えた

めにはそれなりの知識と経験が必要である。

おそらく、営業担当者は、11Sと13Sの発話で、建築主が良い反応を示すと踏んでいたと考えられる。営業担当者は16Sで懸命に「オリジナルのものでしたらもうびっくりするほど安い」理由を説明している。しかし、その説明に対しても、建築主の反応は低い(16W)。17Wの後の2秒の間、その後の18Wと5秒の間を経て、この話題は、建築主が19Wで話題を転換することで終結する。

この17W～21Wの話題の終結部が重要である。

「ふ：ん」「そっか：」は、本章3-1の(1)で述べた注文者-設計者の役割関係における「否定的反応における順接」に近いものと考えられる。逆に、「ふ：ん」「そっか：」のあとは、営業担当者の会話の順番であることから、この沈黙は、営業担当者による建築主の反応あるいは評価待ちであると判断できる。そして、最終的な終結は、建築主の「あとは細かいもんが、電子レンジを置く台とか」の発話による話題転換であるが、これは、本章5-1の(2)で述べた「潜在的完結点以外での割り込み」とは若干意味が異なる。このトピック・コントロールは、沈黙から抜け出し、打ち合わせの流れを維持するためのものである。

このように分析すると、建築主は、営業担当者の提示するニュースに関心がなくとも、否定的な評価の表現を避けつつ、話題転換のトピック・コントロールを行うことで、間接的評価を示していることがわかる。一方、営業担当者も、意図的に沈黙を維持し、建築主による何らかのアクションを促すことで、建築主の反応に見られるニュースへの評価という情報を集めているのである。その一連の協働的終結プロセスは、19Wの建築主の話題転換の発話に対して、20Sがスムーズに応答していることにも現れている。

この非常に微妙な、一見曖昧にも思える会話を通して、建築主と専門家は互いに情報を共有し、また整理することで、住宅設計あるいは住環境デザインを展開していくのである。

(2) 断言によるトピック・コントロール

専門的知識や経験・技術を必要とする住宅設計の中で、専門家がこれに介入し、その展開の流れを組み立てていくということは必要であり、むしろそれは当然とも言える。そして、そのような職能を保証する、あるいは期待されるがゆえに、「専門家」は「専門家」であるわけである。

しかし、そのような「専門性」は同時に、専門家の行為に隠れたイニシアティブを与えることを意味する。とりわけ打ち合わせの内容が専門的であればあるほど、その意味は大きなものとなる。極端な例であるが、私たちは、医者に「その病気を直す方法はありません」と言われたら、それを信じるに違いない。いや、相手は病気の「専門家」であるわけだから、信じざるをえないにちがいない。この医者の発言は、それが真実であろうとなかろうと、「専門性」に守られているのである。

次の会話例は、住宅メーカーの営業担当者が、他社の見積もりとの比較において、自社の見積もり内容を説明している場面である。

[会話例 4.16]

Cは建築主、Sは住宅メーカーの営業担当者の発話を示す。

1S : ただ、今、Mメーカーさんのおっしゃってるのが、いろいろと細かいものが入ってないと、わからないですね。

* (1.5)

2S : 実際なんぼかかるというのが。

* (1.0)

3C : ま、照明とか入ってなかったですからね。

4S : あ：、でも絶対いりますもんね、照明器具。

5C : ええ、そうですね。【笑いながら】

6S : ねえ、で、照明器具も今、35万予算取りしています。

7C : あ：そうですか。

8S : で：、あの：、今現居で持っていらっしゃるものをもってくると、となれば、マイナスになります。

9C : あ、はい。

10S : ええ、ただま、まだ金額決まってませんので大きな枠取りで35万と、ということで考えてるんですけど。

* (4.0)

11S : それから、カーテンは入ってました？

12C : 入ってないです。

13S : カーテン入ってないですか。

14C : ええ。

15S : え：、カーテンもこれも予算取りですけども、しています。

16C : あ、はい。

17S : インターフォンとか、細かい話ですけども、インターフォン6、7万のもんですけど、とか、そんなんも入ってました？

* (1.5)

18C : インターフォンは入ってたと思います、たぶん。

19S : あっ、そうですか。

20C : うん、でも、あのテレビ画面のついたやつは入ってなかったです。あの、普通の＝

21S : ＝あ：インターフォン。

22C : うん。

23S : あ：

* (2.0)

24S : でも絶対いりますよね。

* (1.5)

25S : それとか、ま：もう細かい話なんですけども、あの：、ま、照明器具、カーテン、エアコン、それから、あ：、カメラドアホンもいるでしょうし、ま、テレビのアンテナいらぬという事ですから、ま、これで15万ほど、これは下がる話やと思うんですよ。

26C : はい。

27S : それから、あと：、ま、シャワートイレですね、これはもう1、2階とも今、入れさせてもらったりとかしてますんで、その辺もどうかということも検証していただきたいですし。

28S : 大体は／／全部含んで。

29C : ま：、2階はいらぬといえ、いらぬですのね。

30S : う：ん。

31C : うん。

* (4.5)

32S : もし、お2階が必要なければ、また何万か下がりますんで。

33C : はい。

34S : はい、一応まあ、目一杯取らせてもらってます。

* (4.0)

35S : Mメーカーさん、でも、いついつまでに契約決めてください言うて帰りはったでしょ？

* (1.0)

36S : できたら今年中にとかね。

37C : あはははは、ええ。

38S : いただきます。【出されていたお茶を飲む】

39C : あ：どうぞどうぞ。

この会話の前に、営業担当者は、競合会社の見積もりには「備品とかが全部入っていない」という建築主の発言を聞いている。この[会話例 4.16]では、その見積もり内容では費用がはっきりしないことを説明しているのだが、この営業担当者の説明からは、何らかの圧迫感を読み取ることができる。

その圧迫感の理由として考えられるのが、「～ですね」という言い回しである(1S・4S・24Sなど)。「～ですね」という言い回しは、一般に相手の同意を確認するときに用いるものである。例えば、次の会話例は、ある建築主の息子兄弟が家でテレビ・ゲームをしているときの場面である。

[会話例 4.17]

Aは兄、Bは弟の発話を示す。

1A : これどっちに行こう？

2B : う：ん、そうやな：

3A : こっちは：、こっちに行ったほうがええよな。

* (1.0)

4A : なあ、こっちの方がええやんね。

5B : ええんちゃう、そっちで。

つまり、日常の会話における「～ですね」というような言い回し(3Aと4A)は、同意を求めている相手も、その内容について同等に判断可能な場合において使われるものである。

ところが、[会話例4.16]で行われている「～ですね」は、それとは大きく異なり、「同意」というよりも「断言」に近い印象を受ける。最も顕著な例は、24Sである。「カメラドアホン」が絶対に必要かどうかは、建築主の生活感覚や価値観に依存することである。それを営業担当者は、あたかも常識であるかのように発話しているのである。さらに、「でも」という逆接によって、それは強調されている。

ここでの常識とは、専門家の経験や知識に基づいた常識であることはいままでもない。つまり、「専門性」に隠された常識なのである。専門家が、その発話内容の根拠を述べることなく、常識として相手に同意を求める発話を行うことによって、その発話内容は専門性に守られていると言える。

このような断言によるトピック・コントロールは、24S以降の会話にもみられる。専門家は、競合している住宅メーカーが早く契約することを求めているだろうという質問を「断言」的に行っている(35S)。そして、その答えを聞くと同時に、お茶を飲むという行為でその会話を終わらしている(38S)。

通常の日常会話では、相手が自分の質問に答えたあと、何らかのフォローをすることが期待されている。答えのあとその答えについてコメントを述べたり、あるいは関連した第二の質問をすることで、相手にその答えから自分が何を得心かを示すことができ、また、もとの質問がどういう理由でなされたかを示すことができる。例えば、「今日の昼からの予定は？」と聞かれ、「オフィスに5時までいます」と答えたあと、「ああそうですか」としか言われなかったら、違和感を感じるに違いない。その人は、何のためにそれを聞き、私の答えから何を受け取ったのか、まるで分からないからである。ところが、ここで行われていることは、まさにこれであり、専門家の質問の意味はもとより、それに対する建築主の答えの意味も、建築主からは隠されているのである。

この[会話例4.16]のあと、約15分間の地盤調査に関する会話の後、次のような会話が観察された。

[会話例4.18]

Cは建築主、Sは住宅メーカーの営業担当者の発話を示す。

1S : 実際どうですか、感じ的には？、ま：、そら、今見てもらって、えい、やあ、で、どうですかちゅうのもおかしい話かもしれませんが、ま：、その：、もう一社お出しになっているところが、ま、細かいところが全く入っていないようなところであればなかなか、比較検討はしづらいかなと、いう感じは、しちゃうんですけど。

* (2.0)

2S : 建物の本体は、多分ね、大分安いタイプをお持ちになったと思いますわ。

* (3.0)

3S : Mメーカーさんやったら、今回。

* (2.0)

4S : あの：、いいタイプで持ってきたときは全部入れてきはりますから。

* (3.5)

5S : 結局、え：、安かろうで走り、走りましょうという、スタンスで今回お持ちだと思うんですよ。あ：、ただ、いいグレードで提案されるときは、あれもこれも全部入れてお持ちになって、スタートこれですよというところから始められますから、多分建物自体も少し、あの：、なんていうんですかね、廉価版、で、御提案になってるんだと思うんですよ。

* (3.0)

6S : ま：、その辺も御比較いただいて、

* (5.0)

7S : 多分単純に比較したらうちの方が、その今入ってないよとおっしゃってたのを全部いれて比較していただいても、5、600万は高いと思います、この建物でしたら。

* (2.5)

8C : いや、そこまでは、ま、いかないですけどもね。

9S : そんなに違いませんか？

10C : うん。

11S : あ、そうですか：

* (21.0)

12C : じゃあ、ここからあと300万円はこう、削ろうと思えば削れるということですね。

13S : ま、十分いけます。300万円ですか？ そんなら十分いけると思います。

このように、[会話例4.16]の35Sの専門家の質問(断言)の意味あるいは理由は、[会話例4.18]の「安かろうで走り、走りましょうという、スタンス」(5S)においてはじめて、しかもかろうじて知ることができるわけである。

(3) 沈黙と推論

これまで、購買者-販売者という役割関係における専門家の「情報の抑制」および「断言による

トピック・コントロール」の実践について考察を行ったが、そのような役割関係を両者の協働的実践としてみる時、建築主側の実践としての特徴をここで考察する。

先程の〔会話例 4.18〕を見ると、営業担当者の「建物の本体は、多分ね、大分安いタイプをおもちになったと思いますわ」（2S）という断言に対し、建築主が「沈黙」を維持することで、結果的にその理由の説明が引きだされていることがわかる。そして、8Cでの発話によってはじめて破られてる建築主の沈黙や、「じゃあ、ここからあと300万位はこう、削ろうと思えば削れるということですね」（12C）というかたちで、建築主はそれまでの情報を整理したうえで、自ら次の話題の展開を行っていることから、建築主の動揺や萎縮はほとんど感じられない。その理由は、建築主の沈黙の実践である。

第4章の4-1でも述べたが、サクスらによれば、話す順番を会話の中に配分する規則は大きく分けて、「次の話し手が他の話し手によって選ばれる場合」と「次の話し手が自分から話さず場合」の二つであり、次の話し手が他の話し手によって選ばれる場合、選ばれた次の話し手はふつう間をあけずに話し始める。しかし、選択された次の話し手が話し始めない時、その間の沈黙はその人に属する沈黙として聞かれる。このような場合、その沈黙は会話の中で非常に目立ち、返答が来るまで選択された話し手は注目されることとなる。さらには、応答しないという行為について、会話の相手に様々な推論を許す結果となる。

例えば、次の会話例は、建築主の妻が、娘に休みの日に連れて行って欲しい場所を聞いている雑談の場面である。

〔会話例 4.19〕

Wは建築主の妻、Dは建築主の娘の発話を示す。

1W : Yちゃん、水族館と動物園どっちに行きたい？

* (3.0) 【Dの沈黙】

2D : どっちかな：、ふふふふふ。【笑いながら】

Wの発話の後に来る沈黙は、Dに帰属する沈黙となっている。したがって、この沈黙の間Dは答えがないが、それに対してWが返答を催促しながら、笑いで反応している。私たちの直観に訴えれば、ここでの笑いは、文脈に適切にフィットしているわけではない。つまり、Dの沈黙が、Wに何らかの推論を許していると考えられる。

設計打ち合わせの会話の中での「会話の相手に様々な推論を許す」沈黙が、専門家による「情報の抑制」や「断言によるトピック・コントロール」の実践という場面において頻繁に観察されるかぎり、それは何らかの意味のある実践であるには違いない。〔会話例 4.20〕は、住宅メーカーの営業担当者が、リビングとダイニングへのエアコンと床暖房をサービスで提供するというニュースを展開していく場面である。

〔会話例 4.20〕

Cは建築主、Gは建築主の父、Sは住宅メーカーの営業担当者の発話を示す。

1S : ですので、あっ、ごめんなさい、これ（見積書）にね、エアコンが入ってないんです、まだ。

2C : あっ／／はい。

3S : 計算上。

4C : あっ、はい。

5S : でもあの：、エアコンと：

6C : ええ。

7S : 床暖房は：

* (0.5)

8S : え：、これあの：、私どもの方で入れさせていただきます。この価格でもう入れさせていただきます。

* (1.0)

9S : あの：、実はね：、え：と、旧姓なんていうか存じ上げないんですけど、たまたま私、2件やらせてもらった方で、岡本さんて方いらっしゃるんですけど、 ←話題転換

10G : はい。

【中略】

11S : 最近、あの：、そしたら岡本さんいうんですけど、岡本さんのお母さんの実家の辺りで寄せてもらってますわって言うたら、

12G : う：ん。

13S : あ：、うちのお母ちゃんの実家の辺りやったら安生しとかなあかんで：って、えらい言われて。

14G : あ：、あ：そうですか。

15S : ええ。

* (2.0)

16S : ま、それも含めて、エアコンと床暖房、床暖房はリビングに全て入れさせてもらうようになりまして、

17G : ふん。

18S : はい、リビング、ダイニングですね、

* (1.0)

19S : で、入れさせていただきます。

* (4.5)

20S : あとま：、あの：

* (1.0)

21S : それはま、そのつもりしております／／んで。

- 22C : エ、エアコンって何台ぐらいですか？
- 23S : あの、全室。
- * (1.5)
- 24S : ええ。
- 25C : 全室か＝ 【小声でつぶやくように】
- 26S : ええ：とね、
- * (1.0) 【資料を取り出す】
- 27S : え：、大阪ガスのガスヒーポンっていうのを入れさせてもらおうと思ってます。

5Sと7Sにおいて、営業担当者はこれから話す話題への期待感を高めるかのように、発話に区切りを入れている。これもある種の「情報の抑制」と考えられる。それに応じるかのように、7S以降から建築主のあいづちは切れている。そして、営業担当者の売り込むニュースの結論である発話「この価格でもう入れさせてもらいます」(8S)に対し、建築主は「沈黙」を維持している。当然この段階では、営業担当者がなぜサービスするのかの理由が、建築主にはわからない。これもまた「情報の抑制」である。この営業担当者のサービスに関する発話への建築主の「沈黙」がはじめて破られるのは、22Cにおける割り込みによる質問である。

さて、これらの「沈黙」が建築主に属するものであるということは、7S・8Sのあとに、例えば「あっ、そうですか」とか「はい」とかのあいづちを入れても、前半部の発話のやり取りから見てもなんら不自然でないというから、それは理解できる。

このような建築主の「沈黙」によって、専門家が「様々な推論」を行ったかどうかは判断できないが、結果的に、専門家が9Sにおいて、エピソードを話しはじめるというかたちで、その理由の説明を行っていることに注目すべきである。

もう一つ会話例を取り上げる。この[会話例4.21]の打ち合わせのために用意された1階平面図を図4.6に示す。

[会話例4.21]

Cは建築主、Sは住宅メーカーの営業担当者の発話を示す。

- 1S : で、納戸(→図4.6①)をあの、こっちに、取らないということになると、この、ま：、一連のつながり(→図4.6②)をですね、とんとんとこち【東側】までやってしまうと、この、実はウォークインクローゼットのここ(→図4.2③)が大きく、
- * (1.0)
- 2S : これを、このセットをこっちに／こっちにずらすと、
- 3C : はいはい。
- 4S : ここに大きな納戸を取れるんですよ。
- * (2.0)

- 5S : で、これを、もう少しこう広げて、こういうかたちで、もう、納戸、というかウォークインクローゼットを、中に、ここを通行していいという、廊下の形態をとらなくてもいいというのもしました、考え方は変わるんですけどもね。最初、ちょっとこっちに、広くは、考えてたんですけどもね。

- * (1.5)
- 6S : やっぱ、トイレは近いほうがええやろうと、ははは。
- 7C : そうですね、ええ。
- 8S : トイレが近いほうがええやろうということで、ここはあの、ウォークインクローゼットにしたんですよ。
- * (2.5)
- 9S : ま、この辺、例えば、ただま、あの、奥行き半間の押し入れがたくさんあるというのは、実際は使い勝手が良くないんですよ。

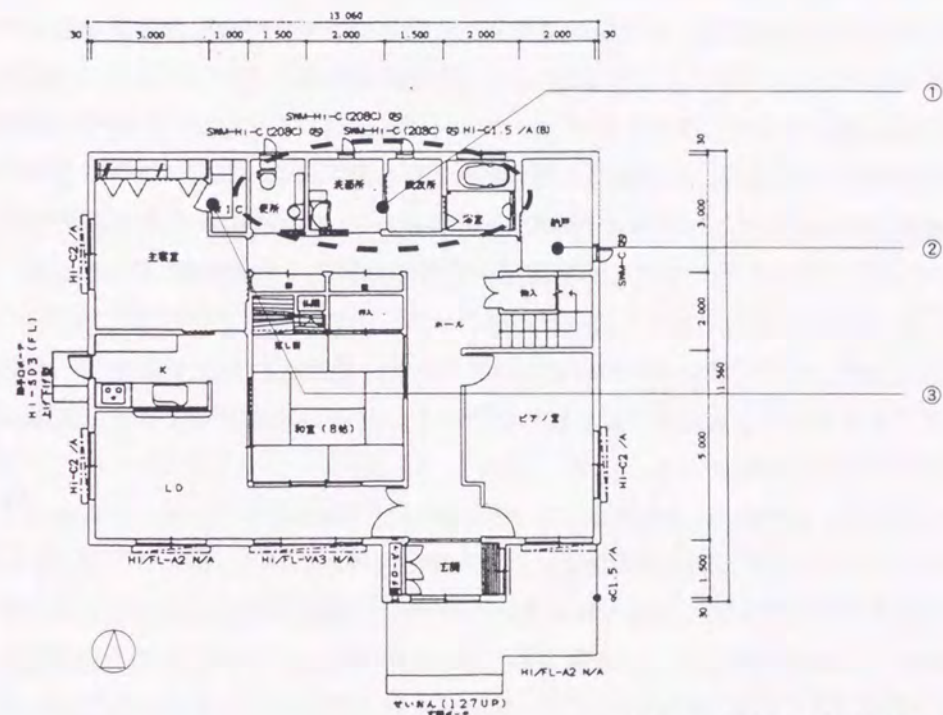


図4.6 KI邸 1階平面図(1999.8.13) 1/200

営業担当者は、平面における「一連のつながり」をずらすことで、ウォークインクローゼットが大きくなるという提案を行っているのだが、その説明に対し、建築主は一切応答していない。その後の営業担当者の応答が重要なのだが、営業担当者は、この提案に至る前の考えを説明し(5S)、この提案の判断基準「トイレは近いほうがええやろう」(6S)の提示を行っている。しかし、5Sの説明はまとまりのない印象を受ける。しかも、[会話例4.19]と同様、6Sでの笑い

「ははは」は、文脈に適切にフィットしているわけではない。

このような営業担当者の発話の流れを常識的にみると、建築主の沈黙によって、自らの提案に対する反応を得られない営業担当者は、さらに説明せざるをえなくなったと考えるのが妥当である。また結果的に、建築主は「沈黙」の実践を通して、提案に対する判断や評価を保留すると同時に、評価・判断するためのさらなる情報を引き出すことに成功していると考えられる。

確かに、建築主の「沈黙」が、情報を引き出すためのものなのか、提案の内容が理解できないことによるものなのかを正確に判断することは、ほとんど不可能である。そしてそれが、意図して行われたのか、あるいは無意識によるもののかも判断することはできない。しかし、ここで重要なのは、その「沈黙」が何を意味するのかを判断するということではない。

ここでもう一度、[会話例4.21]を内容的に押さえると、その「沈黙」がいずれの理由からによるものにしても、建築主のそれが、営業担当者の発話内容に何らかの影響を与えていることは理解できる。

営業担当者は、今その場で建築主に提示している図面の計画において、便所・バスルーム・納戸の「一連のつながり」を、納戸をなくして詰めていくと、詰めていく反対側にある寝室と繋がったところに、ウォークインクローゼットではなくて、大きな納戸を取ることができるという案を、1Sにおいて提案している。そして、ウォークインクローゼットを広くするために考えたその考察プロセスを5Sにて説明している。しかし結局、営業担当者自らが「トイレは近いほうがええやろう」という価値基準を提示することで、提案されたものではなく、当初の図面の案を採用するという結論に至っている。それが結論であることを確認するかのように、営業担当者は8Sにおいて要約している。

つまり、建築主が継続して「沈黙」しているにもかかわらず、提案の是非が判断され、平面計画の決定がなされ、そして、「寝室とトイレは近いほうがよい」という固有のデザイン基準（価値）が導き出されているのである。

このように分析すると、専門家による提案という場面において、建築主が「沈黙」の実践によって、発話のイニシアティブを半強制的に受け渡すことで、専門性に守られたトピック・コントロールに対し一定の距離を確保しながら、必要な情報だけを引き出し選択するという建築主の巧妙さが浮き彫りとなる。[会話例4.20]の22Cの質問「エアコンって何台ぐらいですか？」もそうである。建築主の「沈黙」は、展開されるデザインの内容と大きく関わっているやり方で実践されているのである。

5-3. 「Ethno-design-method」の意義

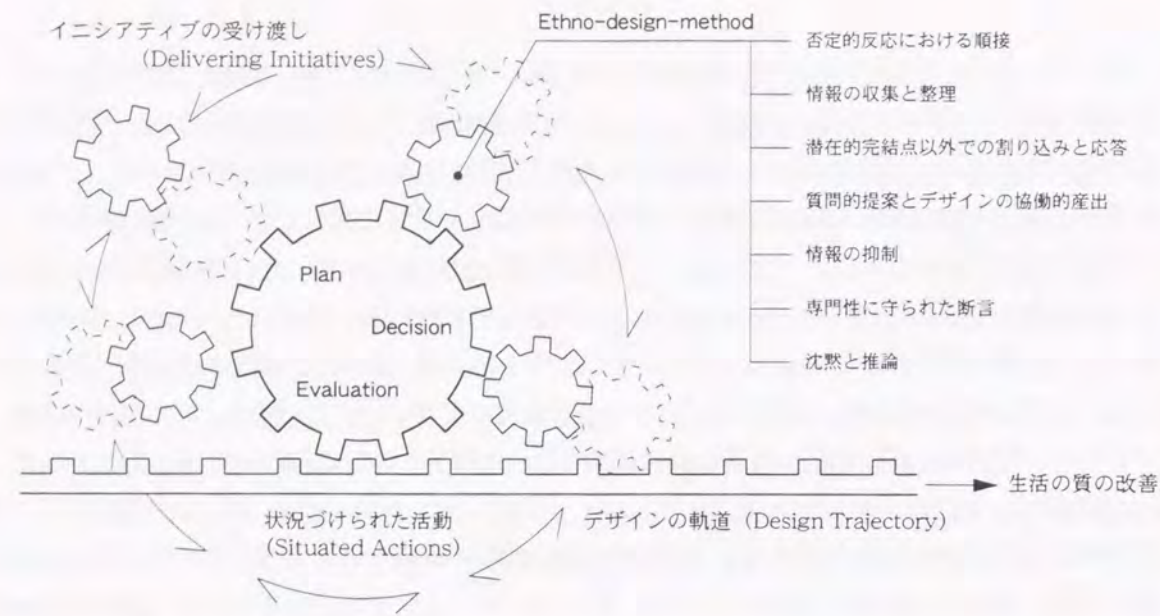
注文者-設計者あるいは購買者-販売者という役割関係は、私たちの中で少なからず論じられ認識されてきたことではある。しかし、「Ethno-design-method」という考え方から、直接的にこれらの細部についての情報を与えうる会話分析という方法を通して、その実態を読者に見て取れるかたちで記述したことに、本研究の新しさ、第一の萌芽的意義があると考えられる。

そして、設計打ち合わせに特有の会話のシーケンス構造の分析から、建築主-専門家関係における「Ethno-design-method」の実践として、注文者-設計者という役割関係における「否定的反応における順接」、「情報の収集と整理」、「潜在的完結点以外での割り込みと応答」、「質問的提案とデザインの協働的産出」の実践、購買者-販売者という役割関係における「情報の抑制」、「断言によるトピック・コントロール」、「沈黙と推論」が見出され、それらは積極的かつ協働的に展開されていることが明らかとなった。これらの実践自体のいくつかは、例えば、医学や教育学などの他分野においても論じられていることではあるが、具体的な実践の内容的な意味としては、本章の会話分析を通して論じてきたように、住環境デザイン特有の実践として現れている。

これらの実践の分析に当たり重要な共通視点となったのが、役割関係の中でどのように「イニシアティブ」が位置づけられているかであった。ポール・テン・ハーヴァ16)は、典型的な「専門家-クライアント」の社会活動としての患者と医師の関係の中に「イニシアティブの独占」を指摘したが、建築主と専門家の関係においては、むしろ「イニシアティブの受け渡し」こそが重要な意味を持つものとして浮かび上がることとなった。この理由には、社会生活において最も卓越した地位として認知される医師とくらべ、設計打ち合わせに参加する専門家の「専門性」の低さが考えられるが、それゆえに、設計打ち合わせの活動の中に共同性・協働性が見出されるのであり、また、デザインという社会活動が可能となっていると考えられる。そして逆に、「イニシアティブの受け渡し」を通じた共同性・協働性が、社会生活における建築主-専門家の関係、そしてそのアイデンティティをかたちづけているのである。

また、会話のシーケンス構造の分析から明らかとなったいくつかの「Ethno-design-method」の実践は、設計打ち合わせの中心にある秩序化構造を示唆するものとなった。しかしながら、それは、教育学においてメーハン17)が「I-R-E (initiation-reply-evaluation)」という社会化・秩序化が授業構造の中心にあり、「I-R-E」という社会構造化活動が達成される授業こそが、人々が「円滑な授業だ」と「評価」する授業であると主張するような構造ではない。今後の「Ethno-design-method」研究の成果の積み重ねによって、人々が「円滑な打ち合わせである」と「評価」することが可能な秩序化構造あるいは指標を提示することができるかもしれないが、現時点では、むしろ仮説的なダイナミズムとしてそれを示したい(図4.7)。

住環境デザインのダイナミズムの中心には、「Plan」「Evaluation」「Decision」がある。それらは、人々が個々の場面に応じてその都度参照したり利用したりする物事の集まりという意味で、デザイン活動のリソース(resource)である。それらのリソースは、「Ethno-design-method」の実践の有り様によって、そして、それを実践する共同参加者の有り様によって、状況的に変化する。そして、ある場面で生成した状況的活動は、それ自体がリソースとして組み込まれデザインは展開されていく。また、共同参加者が実践する「Ethno-design-method」は相互の関係の中で捉えられる。ある共同体によって限定された参加の場における「Ethno-design-method」には、多くあるいは少なく関わる、複数の、多様な実践の仕方があり、変容しつづける「Ethno-design-method」の位置と見方こそが、行為者のデザイ



否定的反応における順接

建築主が専門家の助言や見解に対して否定的に振る舞うとき、その当の助言に順接していることがマークされる。一方、専門家が建築主への否定的反応に先立って行う対照化も、それ自体ははっきり逆接を意味するような標識は行わない。この否定的反応における、おむね相手の言ったこと、表明された相手の意見の真偽に関わらないという特徴は、日常的な会話には見られない。

情報の収集と整理

専門家は建築主に助言を与えたり、見解や説明を述べたりするために、建築主から必要な情報を集めなければならない。つまり、専門家が建築主に対して「専門家」であるのは、相談者の発言を情報収集のための素材として聞くことによって達成される。しかしそこには、専門家の情報の収集と整理の有標化を、建築主が積極的に促すという協働的実践がある。

潜在的完結点以外での割り込みと応答

設計打ち合わせにおける相互行為では、潜在的完結点を無視した割り込みが当たり前に行われるが、専門家はそれへの忠実な応答を実践することを通して、自ら「専門性」を呈示し、専門的職能である「設計者であること」を成し遂げる。また、逆に建築主も、潜在的完結点を無視した割り込みによって、「注文者であること」を実践する。

質問的提案とデザインの協働的産出

専門家は質問されることによって、建築主の質問が何を意味するのかを推論する。それが提案であれば、その提案の可能性を検討し評価したうえで反応を示し、専門家は専門家であるがゆえに、その検討内容とその評価を「専門的」助言として提示する。この一連の専門家の行為を、建築主は「質問」によって引きだし、「注文者」として評価し判断する。

情報の抑制

専門家は、建築主に「ニュース」を成立させ、積極的に打ち合わせの流れのイニシアティブを握ることを目的に、会話の順番の渡しと沈黙の維持によって情報を抑制し、建築主の反応に見られるニュースへの評価という情報を集める。

断言によるトピック・コントロール

専門的知識や経験・技術を必要とする住宅設計の中で、専門家がこれに介入し、その展開の流れを組み立てていくことは必要である。しかし、そのような「専門性」は同時に、専門家の行為に隠れたイニシアティブを与え、専門家の経験や知識に基づいた常識による断言や質問は、時には、専門家の断言や質問の意味はもとより、それに対する建築主の答えの意味も、建築主からは隠されることになる。

沈黙と推論

沈黙は会話の中で非常に目立ち、返答が来るまで選択された話し手は注目されることとなる。さらには、応答しないという行為について、会話の相手に様々な推論を許す。建築主は「沈黙」の実践を通して、「情報の抑制」や「断言によるトピック・コントロール」への一定の距離を確保すると同時に、それらの判断や評価を保留し、それを行うためのさらなる情報を引き出すことを行う。

図 4.7 住環境デザインのダイナミズム

の軌道であり、発展するアイデンティティであり、また、生活環境の質でもある。

「状況づけられた活動」とみなされるデザインは、本研究で「Ethno-design-method」と呼ぶ実践を、その本質を明らかにする特徴として持っている。「Ethno-design-method」は、例えば住環境デザインにおいては、建築主と専門家の関係、活動、志向性、主体性、さらに知識と実践の共同体についての一つの切り口を提供するものである。これは、参加者が実践共同体（community of practice）の一部に加わって行くプロセスに関係したテーマでもある。個々人のデザイン意図が受け入れられ、社会文化的な実践の十全的参加者になるプロセスを通してデザインの意味がかたちづけられる。

しかしながら、この「状況づけられた活動」の考えがより包括的な概念をねらったものであるがゆえに、この見方が具体的に使えるかたちに明確化するためには、理論的枠組みとして、「状況性（situatedness）」についての定式化が必要である。

これまでは、「状況性」は、単に人々の思考や行為が時間・空間内に位置づけられている、ということだけを意味しているようであった。別の場合には、思考と行為が、それらが他の人々を巻き込んでいるとか、あるいは、思考や行動を引き起こす社会的設定状況に意味が直接依存しているということであった。このことは、第3章における生産行為の概念においても指摘されるだろう。

一方、本章で捉えようとした「状況づけられた活動」においては、「状況性」は、一般的な理論的展望に重きを置いたもので、生活環境やデザインがそれぞれ関係的であること、意味が交渉（negotiation）でつくられていること、さらにデザイン活動が、そこに関与した人々にとって関心を持たれたものであることなどについての主張の基礎となるものである。こういう見方は、「状況づけられていない活動」はない、ということの意味している。それは、デザインが事実に知識のかたまりを受容することによってなされるものではないということを確認し、社会の中で、社会とともに行動することを重視し、また、行為者、活動、および社会が互いに相手をつくり上げていくという見方である。

こうして、「状況づけられた活動」としてのデザインは、人々の認知過程が第一義的であるとする見方と、社会的実践の方が第一義的であり、それこそが生成的現象であり、デザインは単にその特徴の一つに過ぎない賭する見方の、橋渡しの概念として見えてくる。つまり、狭義の反復的な慣習的行動としての実践がデザイン過程に包摂されるとするデザイン理論と、デザインを社会的、生成的意味における実践の総括的な側面とするデザイン理論との、特定することのできない極めて微妙な対照の中にある。

本研究の見解では、デザインは、人々の頭のどこか特定のところで生じた、独立の、物象化可能な過程であるかのように、実践に埋め込まれているだけのことではない。デザインは、私たちの生活の生成的社会的実践の欠くことのできない一部なのである。問題は、この視座を、デザインへの特定の分析的アプローチに翻訳することである。「Ethno-design-method」は、デザインを必須の構成要素とする社会的実践への関わりを記述する手段として提案されたものである。

最後に、次章において、「Ethno-design-method」からみた住環境デザインの事例的考察を行う前に、「Ethno-design-method」の分析的表現としての言葉の選択とそれが反映する意味について押さえておく。

「Ethno-design-method」とは、人々の協働的実践として現場のデザイン (designing in situ) の状況のあり方と性質によるところであり、その場のそれぞれの「Ethno-design-method」は、各々の本質を明らかにするために相互に関連しており、独立したものとしては考えられない。それゆえに「Ethno-design-method」は、そのデザインの文脈の中での決定的な条件であるばかりではなく、その内容の構成要素でもある。そして、その構成要素の組み合わせでデザインについて一つのヴィジョンを生み出す不可分の側面に貢献している。

したがって、そもそも「正しい、あるいは誤った、「Ethno-design-method」というものは存在しない。なぜなら、どのような「Ethno-design-method」が実践されようとも、それはデザイン活動のリソースとして、その都度状況的に組み込まれていくかぎり、それは人々の協働的実践であるからである。つまり、あるデザイン活動の場面において、共同参加者の実践する相互行為としての「Ethno-design-method」が潤滑にかみ合っているのか、滑らかなイニシアティブの受け渡しがなされているかどうか、という意味においてのみ分析可能なものであり、記述可能なものである(本章3-3を参照)。このような視座から、本研究では、「Ethno-design-method」の分析的記述として、「"mismatch" Ethno-design-method」、「くずれた役割関係」という表現を用いる。

注

- 1) 社会的な制度(国家や学校といったものから経済体制や生活様式にいたるまで、そしてこれらの基盤となる観念や行為も含めた、社会関係を維持運営するためにつくられたすべての)で設定された仕事や役目に対する人々の志向性のことをいう。そのような制度的志向性が見いだされる会話として、病院の診察場面や学校での授業、あるいはテレビのニュース・インタビューといった会話が注目されている。例えば、John Heritage, "Analyzing News Interviews: Aspects of the Production of Talk for an 'Overhearing' Audience" in T. van Dijk(ed.), Handbook of Discourse Analysis, vol. III: Discourse and Dialogue, Academic Press, 1985.
- 2) 片桐隆嗣、「2章 質的調査の技法」、北沢毅・古賀正義編、『<社会>を読み解く技法 質的調査法への招待』、福村出版、1997、pp.33.
- 3) 清矢良崇、『人間形成のエスノメソドロロジー 社会化過程の理論と実証』、東洋館出版社、1994、pp.157-161.
- 4) J. L. Austin, "How to Do Things With Words", 1962. ジョン・ラングショー・オースティン、坂本百大訳、『言語と行為』、大修館書店、1980.
- 5) H. Sacks, E. Schegloff & G. Jefferson, "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation", Language 50(4), 1974, pp.696-735.
- 6) 西阪仰、「順番取りシステム再訪」、『言語』、24(7)、1995、pp.100-105、における西阪の解説を引用。
- 7) サックスたちの指摘した、発言権が同等に与えられている日常会話が基本的な会話であり、その他の制度的状況における会話はそこから派生したものであることは、多くの会話分析家によって強調されている。例えば、西阪仰、「やりとりのなかのアイデンティティ」、『言語』、24(13)、1995、pp.114-119、を参照。
- 8) 制度的状況における会話分析を扱った論集としては、例えば次のものがある。D. T. Helm, W. T. Anderson, A. J. Meehan & A. W. Rawls (eds.), "The Interactional Order: New Directions in the Study of Social Order", Irvington Pub., 1989; D. Boden & D. H. Zimmerman (eds.), "Talk & Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis", Polity Press, 1991; P. Drew & J. Heritage (eds.), "Talk at Work: Interaction in Institutional Settings", Cambridge University Press, 1992.
- 9) P. Drew & J. Heritage op. cit. pp.3-4.
- 10) P. Drew & J. Heritage op. cit. pp.3.
- 11) P. Drew & J. Heritage op. cit. pp.29-53.
- 12) Paul ten Have, "Talk and Institution: a Reconsideration of the 'asymmetry' of Doctor-Patient Interaction", in D. Boden & D. H. Zimmerman (eds.), Talk & Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis, Polity Press, 1991, pp.138-163.

13) Christian Heath, "The Delivery and Reception of Diagnosis in the General-Practice Consultation", in P. Drew & J. Heritage (eds.), *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings*, Cambridge University Press, 1992, pp.235-267.

14) 森傑・舟橋國男・鈴木毅・小浦久子・木多道宏、「戸建注文住宅における生産行為に関する研究」、『都市住宅学会』第6回学術講演会審査付部門、1998、pp.71-76、も参照のこと。

15) 人々が、その制度的志向性にしたがって、会話のシークエンス構造を維持する、あるいはしようとするをいう。例えば、ニュース・インタビューの会話がわかりやすい。そこでは、日常的な会話では頻繁に見られる、「えー」「すごい」などの情報に対して付与されトピック展開をさらに促進する役割を果たす、私的な評価を伴った反応（ニュースマーク）や、「ふーん、ええ」などの情報提供者にトピックの展開を継続させる反応（継続促進語）は見られない。ニュース・インタビューにおいては、ある人がニュース価値のある情報を持っているものとして前もって選び出されており、情報提供者と受け手という役割が前もって制度的に確立されている。つまり、受け手であるキャスターは、「ニュースマーク」や「継続促進語」の使用を体系的に避けることで、一方的なトピック・コントロール権を保持しているのである。詳しくは、山田富秋、「会話分析の方法」、井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編、『他者・関係・コミュニケーション』、岩波書店、1995、pp.121-136を参照。また、「制度的志向性」については、第5章の注1)を参照のこと。

16) 12) 参照。

17) H. Mehan, "Learning Lessons: Social Organization in the Classroom", Harvard University Press, 1979.

第5章 「Ethno-design-method」からみた住環境デザインの事例的考察

1. 目的

第4章で得られた建築主と専門家の「Ethno-design-method」と役割関係の知見をもとに、ケース・スタディを通して、個別具体的な住環境デザイン活動の内容や成果までもを含めた考察を行う。

固有の住環境デザインの状況に即して、その特徴的であると思われる課題の中での人々の「Ethno-design-method」の実践を記述しすること、つまり、この住環境デザインの場面では、どのような課題や問題が焦点化されており、具体的な人々の「Ethno-design-method」が、どのようなかたちで行われたのか、あるいは、その問題解決にとって影響を与えたのか、を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

第4章の「Ethno-design-method」に関する観察調査において、最も内容的に密な調査を行うことができたNI邸（表4.1参照）を取り上げ、建築主と専門家の会話におけるトピック・コントロール1)に注目した会話分析によって、人々のやり取りの中で具体的に「デザインの産出」がどのようにおこなわれていくのか、を例証することを試みる。

3. 考察

3-1. 考察対象事例の概要

NI建築主は53歳の男性（会社員）で、NI建築主の知人がK建築家と知り合いであったことから始まった。家族構成は、妻52歳（無職）、長女20歳（大学生）、次女18歳（高校生）。1999年5月の時点で建築家が敷地の選択をアドバイスし、同7月の建築家の提案をもとに、10月から本格的な打ち合わせが開始された。そして、その計画は現在（本稿執筆時）も進行中である。NI邸の設計打ち合わせの経緯を表5.1に示す。

3-2. 事例的考察

(1) アトリエと風呂・便所の床レベル

この計画におけるアトリエとは、新居では自らの趣味として陶芸を行いたいというNI建築主の要望により設けられたものである。それを受け、K建築家は、1階アトリエの床タイルがトイレ、バスルームまで連続するという構成を提案したのだが、アトリエと風呂・便所の床レベルが同じという点は、NI建築主にとって非常に大きな問題（以下、〈風呂・便所の床レベルについて〉と表記）として受け取られることとなった。

1999年10月7日の打ち合わせは、最初にスタッフによってNI建築主に対し平面計画の概要

表51 NI 邸の設計打ち合わせの経緯

調査年月日	主な内容
第1回 [1999.8.18] □△	K 建築家へのヒアリングを行った。K 建築家は、当該敷地において3階建てが可能かどうか、景観条例の規制によって意匠がどこまで自由に行けるか、NI 建築主の新居で趣味として陶芸を行いたいという希望により設けられたアトリエと寝室の使い方の曖昧さをどのように解決すべきか、そしてそれに伴う玄関（下駄箱）の位置をどうすべきか、というエスキース段階での課題を筆者へ説明を行った。
第2回 [1999.10.7] ○□■△	1階アトリエの床タイルがトイレ、バスルームまで連続していることによる、寝室等からの利用方法について大きな議論となった（本章3-2の①で詳述）。またそれと平行して、アトリエと寝室の使い方の想定も検討された。その他に、寝室のクローゼットへの既存タンスの収納と間仕切り方法について、美観地区第2種をふまえた屋根形状についての検討も行った。
第3回 [1999.11.26] ○□■△	1階寝室の西側の窓をNI 建築主が強く要望。それに対し、K 建築家は南側の開口が大きいことを理由に必要な窓の助言を行った。NI 建築主はその説明に納得しつつも、やや不安感を抱いている様子であった（本章3-2の②で詳述）。また、2階階段まわりとキッチン間のスペース確保を望んだときの、螺旋階段のまわり方と直階段位置について、3階子供部屋の間仕切り方法と収納スペースの確保についての検討も行った。
第4回 [1999.12.8] ○●□■△	NI 建築主から「新築要望」が提出された（付3）。この日は、1階のアトリエと寝室の境界の壁および1階から2階への階段のデザインを中心に長時間の議論が重ねられた（本章3-2の③で詳述）。その他には、2階から3階への階段を螺旋階段から直階段へ変更したほうが良いのではというK 建築家の提案や、1階浴室・便所の使い勝手と洗濯機の収まりについての検討が行われた。また、下駄箱の位置が、アトリエから寝室への上り根の下のすき間を利用することで決定された（第5章3-1の④ [会話例5.13] を参照）。
第5回 [1999.12.17] ○●□■△	洗濯機の収まりと通風用窓の位置について、キッチンカウンターと連続可能な2階リビングのテーブルの意匠について、2階便所とゲストスペース（登）の使い勝手と、取り合い部の収まりについて等の検討が行われた。
第6回 [1999.12.24] ○●□■△	システムキッチンの各社見積額がNI 建築主に提示され、K 建築家がその詳細について説明を行い、メーカー選びについての助言を行った。また、2階リビングの若干の床面積増加について、螺旋階段3階踊り場の天井高確保のための柱位置、梁サイズの調整についての説明がなされた。
第7回 [2000.1.21] ○■△	NI 建築主が、スタッフに対し1階寝室の西側の窓が必要であることを改めて強く主張した（本章3-2の②で詳述）。この日は、K 建築家が不在であったため、スタッフにより図面の説明や、システムキッチンの詳細寸法・必要備品の確認が行われた。
第8回 [2000.1.26] ○●□■△	1階寝室の西側の窓の必要性について、K 建築家が否定的な意見を示しつつも、NI 建築主は強引に押し切るようなかたちで決定を下した（本章3-2の②で詳述）。その他には、システムキッチンの各社見積額とメーカー選びについて、屋根仕上げおよび各階の床仕上げについての検討がなされた。また、NI 建築主からガレージスペースの若干の面積増加の要望が出された。
第9回 [2000.2.2] ○□■△	K 建築家とスタッフにより、確認申請書類および図面の詳細についての説明がなされた。打ち合わせとしては、システムキッチンの各社見積額とメーカー選びの検討が中心となった。

調査年月日	主な内容
第10回 [2000.2.9] ○□■△	K 建築家とスタッフにより、K 市街地景観整備条例の説明状況報告書についての説明がなされた。その後、設計打ち合わせ以来はじめて、壁の仕上げ材料がペンキであるという説明があったのだが、NI 建築主は、病院のイメージと重なるということで強く反対し、一方、K 建築家はコスト面等からペンキ仕上げの設備にかかるということで大きな議論となった。また、1階便所について、デザイン優先よりも収納スペースの確保という要望が出された。
第11回 [2000.2.17] ○●□■△	前回議論となった壁仕上げは、寒冷紗パテシゴキの上VP塗りに決定された。また、システムキッチンの各社見積額の検討を経て、最終的なメーカーが決定された。
第12回 [2000.3.8] ○●□■△	主に2階リビングの床仕上げについて検討された。石仕上げ（ライムストーン）・コルク仕上げも選択肢としてあげられたが、アトリエ（玄昌石）・階段（MDF）との色彩的バランスから、無垢のフローリング（ヘムロック）に決定された。また、工事見積用の図面をもとに、仕上げや設備機器等の確認が行われた。
第13回 [2000.3.17] ○●□■△	ガレージ用の大型引き戸を中心とした外構計画について、予算との兼ね合いを中心に検討が行われた。最終見積もりの段階では、大型引き戸は省かれることとなった。
第14回 [2000.3.27] ○●□■△	工事見積用の図面をもとに、仕上げや設備機器等の最終的な確認が行われた。また、NI 建築主からは、4月25日に地鎮祭を行うことを目標に進めて欲しいという要望が出された。なお、見積もりの内容によって仕上げの変更が考えられたため、確認申請関連は4月・5月はほぼ凍結状態となった。建築確認は6月21日に下ろされた（付4）。
第15回 [2000.4.25] ○●□■△	4月に工務店各社に対し工事に関する現説が行われた。提出された見積額は、A工務店（3400万）、B工務店（4130万）、C工務店（4000万）、D工務店（3900万）となった。NI 建築主は、予算（2500万）を大幅に上回る金額に落胆した様子を示した。K 建築家も予想以上に高い値段で出てきていることを説明、最も見積金額の低いA工務店と、NI 建築家と仕事を行ったことのあるC工務店に絞って、見積もり調整を行うこととなった。
第16回 [2000.5.25] ○●□■△	A工務店との見積もり調整にて、最終提示金額2780万となり、NI 建築主とその説明がなされた。NI 建築主は、まだ納得のいかない様子でさらに査定を要望したが、K 建築家は、これ以上安くなる可能性が低いことの説明を行った。
第17回 [2000.6.8] ○●□■△	地鎮祭が行われた。
第18回 [2000.6.14] ○●□■△	工事請負契約が行われた。
第19回 [2000.7.14] ○●□■△	工務店から、衛生機器についてTOTOからINAXの同等品への変更要望があり、その確認がNI 建築主へ行われた。また、請負金額内での若干の仕上げ、設備機器の変更が検討された。
第20回 [2000.7.26] ○●□■△	システムキッチン・メーカーの担当者との同席のもと、カウンターについて、天板の材質および寸法、引き出し・扉等の色彩および寸法の検討が行われた。また、衛生機器の変更内容についての確認も行われた。
第21回 [2000.8.10] ○●□■△	上棟式が行われた。
第22回 [2000.8.31] ○●□■△	2階キッチンまわりの最終的な確認が行われた。また、請負金額内での仕上げ、設備機器等の変更が検討された。

参加者 ○: NI 建築主 ●: NI 建築主の妻 □: K 建築家 ■: スタッフ △: 筆者

の説明がされ、約1時間後にK 建築家が参加するといったかたちとなった。次の [会話例 5.1] は、建築主が、スタッフの説明によって「風呂・便所の床レベルについて」を初めて知る場面である。この日の打ち合わせのために用意された1階平面図を図5.1に示す。

【会話例 5.1】

CはNI 建築主、Sは設計事務所のスタッフの発話を示す。

- 1C : ここ（→図5.1①）までフラットになっんの？
 2S : はい。
 3C : そしたらそうか、ここ（→図5.1②）は全部土足の区域でしょ。
 4S : そうですね。
 5C : でもこっちはもう、当然お風呂だから／裸足の区域ですから。
 6S : はい。
 7S : はい。
 * (1.5)
 8C : どうしようって言うでしょね、やっぱし。
 9S : えへへ。
 10C : やっぱしどうしようってことやな／このスペースな：
 11S : はい。
 12S : 一応K【建築家】の中ではもう降りて使ってもら（・・・）
 13C : うん？
 14S : 降りて：／使ってもらうイメージみたいですけども。
 15C : う：ん。
 16C : うんうん、最終的にどうするかはちょっと考えないといけないね。
 17S : そうですね。
 18C : う：ん。
 【中略】
 19S : あまりこう変えないで、
 20C : うん？
 21S : 統一感を持たせていきたいんだと思います。
 22C : ていいうのがあるわね、それはそうやね、ふんふんふんふん。
 * (4.5)
 23S : で、やっぱりこうつながりとか広がりとか感じられる空間で。
 * (10.0)
 24C : なるほど、でも一段でも欲しいのはここやね。
 25S : ふ：ん。

26C : こっちかね、どっちかにほしいわな。

* (4.0)

27C : そうかね :

* (8.0)

28C : あとはだからやっぱし外まわりと、屋根が実はここ形が少しは変わってくる可能性があるというのかな、ね。

29S : そうですね。

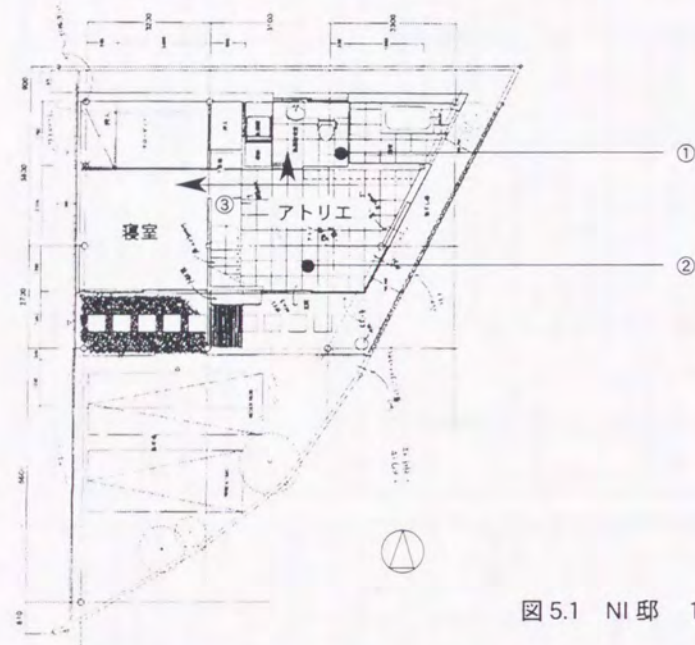


図 5.1 NI 邸 1 階平面図(1999.10.7) 1/200

この会話では、NI 建築主が、自身の常識や感覚を前提とした態度で、積極的に質問や意見を発していることがわかる。そして、8C と 10C のように、設計者側の提案に対しあからさまに否定的な反応を示さずとも、16C で「最終的にどうするかはちょっと考えないといけない」として、この提案には大きな問題があるとして意思表示を行っている。また、9S のスタッフの笑いからは、設計者側もこの提案はやや NI 建築主に受け入れられるのは難しいと認識していることが理解できる。

次の [会話例 5.2] は、NI 建築主が、その内容について初めて K 建築家に質問する場面である。

[会話例 5.2]

C は NI 建築主、A は K 建築家の発話を示す。

1C : ほんで、あの何、このお風呂と//あの：洗面のとは//アトリエの床と同じ、ね、階が、ね=

2A : はい。 はい。

3A : =同じに、同じにしていますわ。

4C : いや僕はこのね、一応、あの：お風呂と鏡も裸足の世界やし、

5A : はいはい。

6C : たたきのほうは土足の世界やから、

7A : ええ。

8C : その方が上がってんのかなと思っと思って、さっき。

9A : あいつなんやて、あいつなんやったつけ、いまは、え：【担当者の方へ話題を振る】

10C : 要するにだから、裸足からちゃうわ、土足から裸足//裸足から土足、これをどう転換せなあかんのかな=

11A : ししししし。

12A : =だからこう、こうですわ//あははは。

13C : だからですね :

14C : 僕はさっきから//裸足で出ていますか：//そうあっさり言っはって。

15A : あははは。 あははは。

16A : そう、だいたいちょっと土間みたいだね、雰囲気ですわね、こうこれは。

17C : それはそれでね、うん=

18A : =確かにね、ここはね。

19C : だから、ここはどう// (・・・)

20A : そうそう、便利さでいうたらこれなんですけどね。

21C : そう。

22A : まあやっぱり、ちょっとこら辺は不便なようにしてあると。

23C : うん。

24A : そこが：どうするかですわ、ここを我慢するかどうするかですわね。便利さ// (・・・)

25C : でもまあ、でもまあここをだから//ここで取っしもうて//ここ行ったり来たりしたらいいと。

26A : そうここで、 もしあれやったら、

27A : こういったら (→図 5.1 ③) もう、もう問題はなしですよ。

28C : 問題はなしですよ、こうやってすっといけばね。

29A : ええ、できますけどね。

30C : うん。

31A : 問題がつけば、そういう不便さも、すてがたい=

32C : =えへへへ、昔のね。

33A : あははは。

34C : そんなこと、僕はぜいたくな、ぜいたくな余裕はないです、これはぜいたくです、

そういう不便さを楽しむというのは。

35A : ですかね。

[会話例5.1]、[会話例5.2]ともNI建築主の質問から話題が始まっているが、[会話例5.1]はNI建築主が物語の話し手として、[会話例5.2]はK建築家が物語の話し手として会話が展開している。それは、『結局この問題をどうするのか、という発言が誰から発せられているかを比較してみるとわかりやすい。

物語を語る場合には、通常の会話の順番取りシステムは一時中断される。そして物語の語り手が、話す権利を優先的に持ち、語り手が話し終わるまで聞き手は黙って聞かなければならない。また、聞いていることを示すための「あいづち」などバックチャンネルを送らなければならない。一方、物語の話し手の立場からすれば、物語の終結を示すために今話された物語を要約しなければならない²⁾。この要約のことをサックスは物語の落ち（パンチライン）と読んでいるのが、ここでは、[会話例5.1]/16Cと[会話例5.2]/24Aがそれにあたる。

[会話例5.2]は、冒頭から非常に問題提示的な場面である。

NI建築主は、[会話例5.2]の1Cにおいて、「～階が、ね」と発話のイニシアティブを積極的に受け渡すことで、説明をK建築家に求めているにも関わらず、そのNI建築主の質問に対するK建築家の発話は、「同じに、同じにしていますわ。」と断言されているのである。これは、10Cでも同様である。「～あかんのかな」と受け渡しているにも関わらず、K建築家のその応答は「だからこう、こうですわ」なのである。

しかも、K建築家の3Aおよび12Aにおける発話は、直前のNI建築主の発話と結ばれており、両発話間にほとんど間合いがないことがわかる。さらに、9Aでは、意図的かどうかはわからないが、スタッフの方に別の話題を振るといった、結果的にNI建築主の発言を無視した発話を行っている。つまり、ここで推測されることは、K建築家はNI建築主の物語が完全に終結することを待たずに、割り込んでいるのではないかということである。言い換えれば、K建築家は会話中の物語の構造を利用して物語を終結に持っていくために、強制的にパンチラインを作り出しているのである。

5章の注文者-設計者の役割関係でも述べたように、K建築家は、NI建築主の発話のイニシアティブの受け渡しで「専門的説明」が求められているのである。にもかかわらず、K建築家は、購買者-販売者の役割関係で論じた「専門性に守られた断言」を実践しているのである。そして、先程も述べたように、この会話はK建築家が物語の話し手として展開されていくのである。つまりここには、「"mismatch" Ethno-design-method」の実践による「くずれた役割関係」が見られるのである。その"mismatch"さをさらに例証するように見えるのが、9Aの発話に対するNI建築主の割り込み（10C）、12Aの発話に対するNI建築主の割り込み（13C）である。NI建築主はK建築家のパンチラインに敏感に反応し、声のトーンを上げて10C「だから～」と言い直すかたちで主張している。なぜここに割り込みが生じたのかは、NI建築主が、自分の意見をまだ主張しき

れていない段階で、K建築家が割り込んできたからだと考えるのが妥当である。

つまり、[会話例5.1]では、NI建築主は自身の常識や感覚を前提とした態度で、積極的に質問や意見を発しているのに対し、[会話例5.2]では、そのような態度は全く見られないのは、K建築家の「"mismatch" Ethno-design-method」によるトピック・コントロールによって、NI建築主の主体性が押さえ込まれたということが十分考えられ、K建築家によって、いかに強制的なトピック・コントロールがなされているかがわかる。このようなK建築家のトピック・コントロールは、[会話例5.2]からもう少し後の[会話例5.3]にも見ることができる。

[会話例5.3]

CはNI建築主、AはK建築家の発話を示す。

1C : やっぱり貰の子生活にするかな。

2A : ふふふふふ。

3C : 貰の子生活にするかな、ははははは。

4A : ふふふ、あのね、案外気になら、あのね多分そのスリッパのまま行きますよ。

5C : いや、言ったように上は僕はスリッパ使わない。

6A : あ：そうかさっか。

7C : うん、スリッパ生活をしないつもりですから。

8A : なるほど、なるほど、そうかここは：、スリッパなしというのはちょっと寒いやろ
うね、やっぱりこれは。

9C : あははははは。

10A : もう、こう、このまま、このままで立って上がりませんと、あははははは。

11C : だから一体感を持たして、このね／／ひいちゃうというのがいいのかどうかと＝

12A : そう。

13A : =あのね／／これはなかなかね／／

14C : いや、いいんですよ。

15A : 気持ちいいと思いますよ。

16C : うん、そう、でも、冬場は寒いですよ／／あはははは。

17A : 寒い、寒い。

18C : いや、年中裸足だから／／基本的にね。

19A : 寒い、寒い、寒い、寒いです。

20A : やっぱり絶対スリッパ履きますわ。

21C : そうなるでしょ。

22A : うん。

23C : やっぱり／／だから、あれ、あれですよ。

24A : ここからは、あの：うん。

- 25C : スリッパ生活は／／やめたいと思ってて。
 26A : そう、そう。
 27A : ま：、あの：、ちょっとやっぱり、寒いでしょうね。
 28C : う：ん、そこんところだから／／寒いなんかというのはいらないんだけど、
 29A : そんな：
 30C : ここ／／洗面脱衣所の／／入ったところの
 31A : う：ん ま：、あのね=
 32C : =あのね一体感出したいというのはわかるんだけど。
 33A : 確かに、この：、これ上がれば／／上にありますから、トイレは。
 34C : う：ん。
 35C : はいはいはいはい。
 36A : トイレはあるんですね。
 37C : そうそうトイレはある、お風呂だけは／／
 38A : 洗面、あ：お風呂
 39C : ま、洗面がね。
 * (1.5)
 40C : ま、そりゃま、ま、ま、ま、確かに思っ（・・・）
 * (0.5)
 41A : あの：一番最初に誰がお風呂に入るかですわ。
 42C : へっへっへっへっへっ。

[会話例 5.3] の前は、収納スペースの確保について議論がなされていたのだが、NI 建築主は「簀の子」を持ち出して〈風呂・便所の床レベルについて〉の課題を再び持ちかける。1C と 3C の発言は、K 建築家の設計を結果的には簀の子を用いることで回避しなければならないという妥協あるいは間接的反論と理解できる。

[会話例 5.2] で考察した K 建築家のトピック・コントロールについては、[会話例 5.3] でも同様に見られる。例えば、13A の K 建築家による強制的なパンチラインと 14C の NI 建築主の割り込みが、それである。さらに [会話例 5.3] では、K 建築家の主張を尊重しつつ、NI 建築主が自らの意見の妥当性を慎重に探っていることがよくわかる (11C~16C・20A21C・28C~32C)。

しかし、ここで [会話例 5.3] を取り上げるのには、もう一つ理由がある。それは、NI 建築主と K 建築家の計画課題に対する問題設定のずれである。それは、NI 建築主は、スリッパ生活をしたくないから〈風呂・便所の床レベルについて〉は解決しなくてはならないと主張しているのに対し、K 建築家は、〈風呂・便所の床レベルについて〉は寒さが問題であり、それを解決するべき課題として考えていることである。

しかし、結果的には、K 建築家のパンチライン (41A) によって話題が終了している。

つまり、K 建築家の「[mismatch] Ethno-design-method」の実践によるトピック・コントロールのもと、NI 建築主が抱える課題が未解決のまま、それは解決されたものとしてコミュニケーションが終わってしまう可能性があることである。そして、そのこと自体を、K 建築家そして NI 建築主さえも自覚・自認していない可能性があるということである。

その後、このテーマは、K 建築家の話題の持ち出しによって、アトリエの使い方の議論として展開していくこととなる。

[会話例 5.4]

C は NI 建築主、A は K 建築家の発話を示す。

- 1A : 要するにこの部屋というのはね、また中途半端な部屋で、アトリエってなってますけど、
 2C : そうそうそうそう。
 3A : どういう使い方をするかが想定がまだできてないんですね。
 4C : まだ、最終的にはね。
 5A : ええ、ほいで、いうのは、別にこの：、ここ開けるでしょ。
 6C : うん。
 7A : 開けたらなんか地面ついた居間ですよ。
 8C : ふんふんふんふん。
 9A : ある意味では居間ですよ。
 10C : ふんふん。
 11A : 家族ルームみたいな。
 12C : そうそう、あ：ダイ (ニング) / /
 13A : そんな感じになります / /この辺はね。
 14C : あ：、そうそうそうそう。
 15A : 案外涼めるかもしれないですよ=
 16C : =そうなんですよ、実際ありますとね。
 17A : 案外ね、ここがね。
 18C : う：ん、うん。

そして、このアトリエの使い方の話題は、アトリエの床仕上げの外部への延長というテーマへと展開していく。

[会話例 5.5]

C は NI 建築主、A は K 建築家の発話を示す。

- 1A : これね、だから例えばね、
 2C : うん。

- 3A : 今ここでこうしてますわね。
 4C : うん。
 5A : これをね、このままちょっと、ま：この：、延長するんですね。
 6C : うんうんうんうん。
 7A : ほんならもっと広くなりますよね、ここ。
 8C : それはそうですね、うんうん。
 9A : こいつね、前を／前をちょっとこの辺までずっと延長してやってやると。
 10C : はいはいはいはい。
 11C : うんうん、なるほどね、そうですね。
 12A : そうすると、ここの前の広さがね、こんどまあ、雨に当たらないところはここだけでも、
 13C : うん。
 14A : 雨に当たっていいところは／このスペースとしてはね／広がってきます。
 15C : うん。 うん。
 16C : そうですね、ほんであえてね、こう押し出すんだったらここもね／土を残しておくことないんで。
 17A : そう。
 18A : そうです。
 19C : 確かにね。
 20A : うん。
 21C : 引いちゃうのがいいかわからないな：
 22A : いいでしょ。
 23C : どうせ空間だったら／ねえ、雨でも別にあれやし。
 24A : そうです。
 25A : ええ。
 26C : ああ、そうやな：
 27A : そうです、だからここまでね／こうずっと引いて。
 28C : うん。
 29C : 何かもう全部引いてしまって、くくくく。【笑い】
 30A : なかなか、こう、広がるでしょ。
 31C : それも悪くないですね。
 32A : いいでしょ。
 33C : こども引いちゃいそう、お風呂もこれも全部一体化して。

このように〔会話例 5.4〕と〔会話例 5.5〕の内容を会話の流れとして追っていくと、K 建築家は「アトリエの使い方」をキー・トピックとして、NI 建築主に床仕上げを連続させることの良さ

の感覚をうまく伝達できたと見れるだろう。

結局、K 建築主は〔会話例 6.5〕の 33C で「こども引いちゃいそう、お風呂もこれも全部一体化して」と発話している。この発話だけを見れば、これまで問題となっていた「風呂・便所の床レベルについて」は、一応、K 建築家の説明によって価値観が共有され、解決されたものと取れるかもしれない。しかし、観察調査によると、NI 建築主のこの発話は、ある意味会話的な勢いで発言しているような場面状況であった。

また、厳密に言えば、床仕上げを連続させることと、アトリエと風呂・便所の床レベルを同じにすることは別問題である。それをも含め、NI 建築主が設計者側の提案主旨を理解し、新たな認識や自己目標を見出したのかもしれないが、この日の打ち合わせの後に、「風呂・便所の床レベルをどうしたらいいのか」と、筆者が、NI 建築主から意見を求められるということもあったということから言えば、それには幾分疑問が残るところである。なお、このテーマに関しては、以後の打ち合わせで議論として取り上げられることなく、現在に至っている。

本章の目的でも述べたが、ここでの論点は、アトリエと風呂・便所の床レベルを同じにすることが、住環境デザインとして「良いのか。悪いのか。」ではない。具体的な人々の「Ethno-design-method」が、どのように住環境デザインに関わっているかである。

以上の考察から言えることは、設計打ち合わせにおける専門家の「"mismatch" Ethno-design-method」は、建築主がそれに対して自らの限られた経験や常識を頼りに懸命に対処し、しいては、それに終始するといったコミュニケーション状況を生み出すということである。そして、そういった状況の中では、建築主そして専門家の双方とも、新たな認識や理解・自己目標を引きだすまでには至ることができず、逆にそれを制限させてしまう可能性があるのである。したがって、住環境デザインにおける種々の問題は、関係者の相互理解によって解決され、共通目的、共通認識のもとで設計・計画が実行されているとする自明性こそがまず疑われられなければならないのである。

(2) 1 階寝室の西側の窓

次の会話例は、99 年 11 月 26 日の打ち合わせにて、NI 建築主が、1 階の寝室の西側に窓を設けることを希望する場面である。この日の打ち合わせのために用意された 1 階平面図を図 5.2 に、2 階平面図を図 5.3 に示す。

〔会話例 5.6〕

C は NI 建築主、A は K 建築家の発話を示す。

- 1C : それとね、あと、こっちの寝室用のこの辺（→図 5.2 ①）に、一つつくって欲しくて。
 2A : うん、それはね：
 3C : うん。
 4A : 僕こっちはいらんと思いますわ、おそらく、ここで、こっち側が（→図 5.2 ②）結構大きい

いですからね。

5C : うん、といってもここは、上があれ【デッキテラス (→図5.2③)】でしょ／／あれがきているから。

6A : うん、それでも :

7C : で、前が車で／／もう、これ後ろで／／これ結構 :、届かないんちゃうかなって思ってね。

8A : う : ん うんと、それでもね、

9A : あ :、なるほど、そ、それでもね。

10C : うん。

11A : あの :、ま、光は差し込まないですよ。

12C : うん、光は差し込まない。

13A : 差し込まないですけども、これ結構開口部大きいですからね。

14C : うんうん。

15A : だからあの、1枚だけでも相当大きいですよ。

16C : うんうんうん。

17A : これ1枚開けるだけでもね。

18C : うんうん。

19A : で、一応2枚開けますからね、ほとんど外部と変わらないですからね。

20C : うんうん。

21A : ドーンとそのまま、掃き出しになって、天井から／／

22C : だからね、これがね、まだイメージが良くわからないですね／／これがドーンと開いたときに／／どの程度の明るさなのか

23A : そうなんです、 あの :、確かにね

24A : あの :、光が入らないことは確かですけど、

25C : うん。

26A : 陰になった感じですよ。

27C : うん、そうそう、日陰は日陰なんだけど、どの程度の暗さなのかなってというのがわかんなくて。

28A : ま、上から比べたらずっと暗いですわ。

29C : うん。

30A : それは。

2Aにおいて、K建築家の否定的反応における順接が見られる(「うん」)。K建築家は、西側の窓は必要ないという意見の根拠として、南側の開口部の大きさを主張している(4A)。それに対し、NI建築主は、K建築家の意見に「うん」と順接しながらも、5Cと7Cにおいて、南側の窓先の上にはデッキ・テラスがあるから光が届かないという、西側に窓が欲しいという理由を説明

する。

この5Cから7CのNI建築主の発言の間に、K建築家の割り込みが見られる。潜在的完結点以外での割り込みは、建築主にはよく見られる特徴であるが、ここでのK建築家の行為は、それとは相反するものである。本来ならば建築主の意見を適切に情報として収集し整理することが求められる場面において、その情報の収集と整理をすることなく、自らの意見を割り込ませようとしている。それを示すかのように、NI建築主は割り込みに一切応答せずに発話を続け、「届かないんちゃうかな」と強調して発話を締めくくっている。

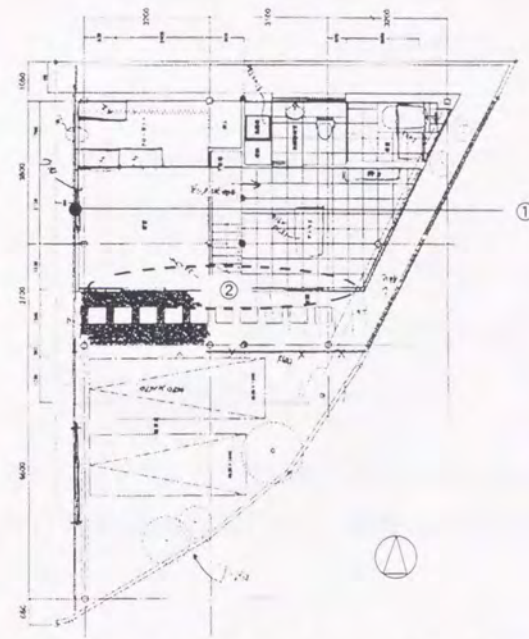


図5.2 NI邸 1階平面図(1999.11.26) 1/200

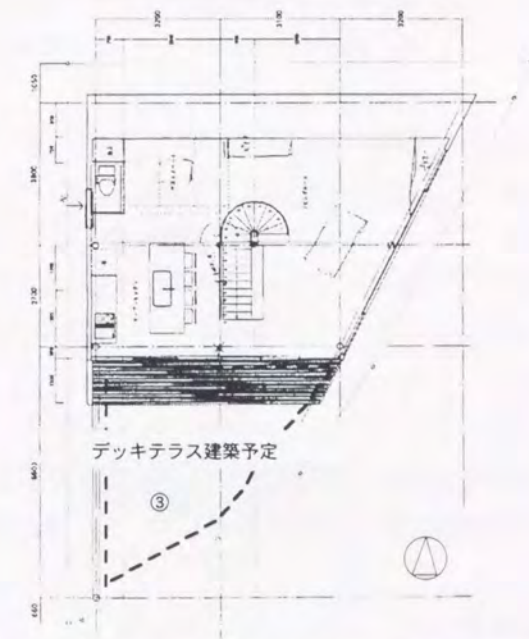


図5.3 NI邸 2階平面図(1999.11.26) 1/200

K建築家は、それに対し9Aで「あ :、なるほど」と理解の反応を示すことで、会話の流れあるいは役割関係を修復し、それ以降、自らの意見を説明し始める。ところが、K建築家は、「西側の窓は必要ない」と主張するにも関わらず、その説明の導入の発話「ま、光は差し込まないですよ」(11A)が示すように、K建築家はNI建築主が窓が必要だと希望する根拠を認めているのである。

ここでK建築家が「西側の窓は必要ない」とする理由は、19Aの「ほとんど外部と変わらないですからね」の発話が示している。おそらく、K建築家は、開口部は光を取り入れる機能だけではなく、外部と内部をつなぐ境界という視点でもって、この1階寝室のさらなる開口部の必要性を考えているのだと推測される。建築を専門とする人間から見れば、この場面において、K建築家が言わんとするニュアンスは理解できるかもしれない。

しかし、その視点やニュアンスというK建築家の判断基準は、それ以降のNI建築主の発話を見ればわかるように、NI建築主には全く伝わっていない。このNI建築主とK建築家の判断基準

の相違は調整されないまま、K 建築家の判断基準は理解されないまま、このテーマは持ち越される。

次の [会話例 5.7] から [会話例 5.10] までは、2000 年 1 月 21 日に、建築主とスタッフとで行われた打ち合わせの中での場面である。この日の打ち合わせのために用意された 1 階平面図を図 5.4 に、2 階平面図を図 5.5 に示す。

[会話例 5.7]

C は NI 建築主、S は設計事務所のスタッフの発話を示す。

1C : あ、それで窓の話にいくと、ここ窓は、どうしてくれました？

* (1.0)

2C : 西側の窓は？

3S : まだ結論出てな／／いんですけど。

4C : 出てませんか？

5S : あの：、／／K【建築家】は、いるか／／な：って言う（・・・）

6C : これはね、僕は絶対いると思うんやわ。

7S : えへへ。

6C において、NI 建築主が、スタッフによる K 建築家の判断の代弁を割り込んで中断させてまで、西側の窓の必要性を断言しているのは、NI 建築主自らの体験にその根拠があるからである。

[会話例 5.8]

C は NI 建築主、S は設計事務所のスタッフの発話を示す。

1C : これね：、本当暗いよ、結構これ、こんだけ、6 メーターあるわけでしょ。

2S : はいはい。

3C : ま、ここ（→図 5.4 ①）は半分ですよ。

4S : はいはい。

5C : でも、ここ（→図 5.4 ②）はいうても 6 メーター丸々下がってるわけですね、部屋が。

6S : はい。

7C : で：、ここ、6 メーターで、ここはもう完全ですね。

8S : はい。

9C : で、この上は基本的には、／／少し：

10S : リビングですね。

11C : 少し：、デッキやから、すき間あっても、太陽はそんなに期待できないから。

12S : う：ん。

13C : とすると、本当絶対暗いわなって思って：

* (0.5)

14C : で、こないだなんかよく似た家見てあったから、

15S : あはは。

16C : いや、よく似た家じゃないわ、その、1 階ガレージにして、

17S : はいはいはい。

18C : で、この車の幅ぐらいだから、この 4 メートルぐらいかな。

19S : はいはい。

20C : こんなもので、で僕はやっぱり、ちょっと見とって、やっぱり暗かったですよ。

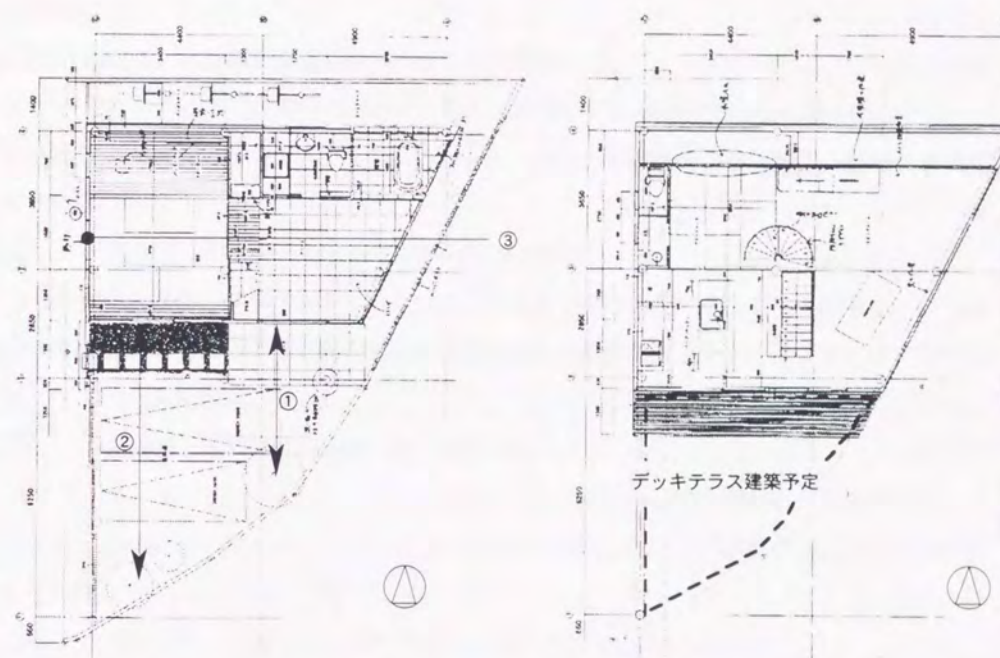


図 5.4 NI 邸 1 階平面図(1999.1.21) 1/200 図 5.5 NI 邸 2 階平面図(1999.1.21) 1/200

この会話を若干補足説明すると、NI 建築主は、寝室の南側に、駐車スペースの上に 2 階レベルで架かる予定のデッキテラスの寸法と、NI 建築主が見たピロティ式の駐車場との寸法を比較し、この奥行きではいくらデッキテラスにすき間があると言っても非常に暗いはずだと、説明しているのである。一方、スタッフは、NI 建築主の判断（11C と 13C）に対し、否定的な反応をあらかじめ示さないまでも、「う：ん」や沈黙（0.5 秒）によって、それへの評価から距離をとっているのが読み取れる。

[会話例 5.8] のあと、建築主の窓を開けたいという意向のもと、打ち合わせは進められ、会 [会話例 5.9] に続く。

[会話例 5.9]

CはNI建築主、Sは設計事務所のスタッフの発話を示す。

1C : だから、ここ(→図5.4③)で開けようとしたらどこがいいのかわからないんだけど。

2S : はい。

* (0.5)

3C : う：ん、やっぱそこに欲しいな。

【中略】

4S : はい、わかりました。

5C : だから、そんな大きく窓開ける必要はないんで。

6S : はい、えへへへ。

7C : それこそ：

* (2.0)

8C : だからそれは、下開けるのか上開けるのか、どっちが、ええのかよくわかんないんだけども。

* (1.0)

9C : ま、こっちも開いてるから、これと同じ高さにしたほうがいいんやろね、外から見たら。

10S : そうですね、床のレベルぐらいの方がいいかもしれないですね、下の、／／下地窓の方が。

11C : う：ん

12C : う：ん。

13S : ふ：ん、いち、一応和室ですし、ふふふ。

14C : そう、そうなんですよ。

15S : うんうん。

* (0.5)

16C : あん／／まり

17S : そう考え 【同時発話】

18C : うん？

19S : 座ったときに、腰窓みたいなんだと、かえって変な感じ／／しますし。

20C : なるし：

21C : そうなんだな：、ま、どうなるのかな：って、ここのスペースで。

ここで、NI建築主は、窓を開けるとすればどのようにすればよいかを、スタッフに話を持ちかける。

NI建築主は、1Cで「どこがいいのかわからない」ことを意思表示しており、NI建築主が助言を求める際の発話のイニシアティブの受け渡しによって、スタッフのアドバイスを待っているのが、7Cと8Cである。しかし、それぞれに対し沈黙が維持されたため、NI建築主は9Cにおいて

自らの見解を述べることで、スタッフのアドバイスを引きだすことを試みている。

スタッフは、10Sにおいて、否定的反応における順接(「そうですね」)でもってNI建築主の意見をくみ取りながらも、NI建築主とは異なる見解を述べている。ただし、ここでの「下地窓」の用語の使い方は不適切である。また、13Sのスタッフの笑いは、文脈に適切にフィットしているわけではないが、これは、建築主の11Cと12Cの「う：ん」という反応を受けての、何らかの推論によるものと考えられる。また、17Sで同時発話による割り込みが見られるが、NI建築主は18Cで「うん？」と発話することで、発話順番を譲り、スタッフによるアドバイスを優先させている。

[会話例 5.10]

CはNI建築主、Sは設計事務所のスタッフの発話を示す。

1C : だから、どの位置になるかなんていうのは、ほんと僕わからないもんね：

2S : はいはい。

* (0.5)

3C : だから、思い切って一番上に開けてしまう？

4S : う：ん。

5C : 2階と1階の、あの境目ぐらいに開けてしまう？

6S : う：ん、ふんふん。

7C : だから、こっちから日は入るよね？

8S : ふ：ん。

9C : 西日でもいいから、入るような、感じにしてしまう、思い切って。

* (2.0)

10C : 要するに、中途半端に真ん中に開けるといやすいんでね。

* (0.5)

11S : だと、思いますね。

12C : も、それはもう思うんです、だから、下か上かどっちかやなと思って。

13S : うんうん。

* (1.0)

14S : ま、あと立面的なこととかも考えて、K【建築家】と話しますんで。

15C : はい。

16S : はい、すみませんが。

17C : わかりました。

3Cと5Cと7Cは、第5章3-1の(4)で論じた「質問的提案」の実践である。スタッフは、デザインの決定権を持っていないこともあり、先程の[会話例 5.9]のNI建築主によるイニシアティブ

ブの受け渡しも含め、このNI建築主の「質問的提案」に対しても保留的な態度を維持している。

この日は、12Cという結論をもって、NI建築主の意向は設計者側に伝えられたこととして、このテーマの打ち合わせは終了する。次の[会話例 5.11]は、その後の2000年1月26日の打ち合わせにおいて、NI建築主がK建築家に西側の窓を改めて主張する場面である。

[会話例 5.11]

CはNI建築主、AはK建築家の発話を示す。

1C : それと、ここでお願いしてたんですが、このあの：、この西側の窓、やっぱり欲しいなということで。

2A : ええ。

3C : かなり、やっぱり暗いですよ、全体に、【デッキテラスが】かかってきたら。

* (0.5)

4A : どうで／／

5C : あの、K【建築家】さんは大丈夫って言ってたけどね、あのね、やっぱりその、こういう出るところ、車入ってる家あるやんか？

6A : はいはいはい。

7C : あの、中に入って見たらね、やっぱり暗いんですよ、ここののがね、／／う：ん。

8A : ま、

9A : やっぱりこう【デッキテラスが】ありますからね、ちょっと暗いですかね。

10C : うんうん、これだけやったら、大丈夫だと思うんです。

11A : はいはいはい。

12C : ここまでやったらね、上が、

13A : う：ん。

14C : ここまでできますよね、そりゃ／／下にあるわけですから。

15A : う：ん。

* (0.5)

16C : そうすると日が入って／／こないんで。

17A : も、ありますよ。

18C : うん、でもこっちはこっちからのやつで、うまく（・・・）から。

19A : うん。

20C : だから／／

21A : 窓をとるのは簡単ですわ。

22C : 窓はね、あのね、上の方、下、どっちがええのか。

23A : え：、上か下か／／と

24C : 上かなって言うてるんですけどね。

25A : もう上でいいですよ。

注目すべきなのは、5CでのNI建築主の割り込みである。4AでのK建築家の発話は、観察と文脈からみると、NI建築主の意見に対し否定的な反応を示そうとした発話なのであるが、NI建築主はそれが発せられた直後に、間髪入れずに自らの意見を押し進めている。これは、[会話例 5.6]の6A・8AでのK建築家の割り込み、K建築家の判断基準の不十分な伝達という、これまでの経緯から考えると、明らかにK建築家の発話を中断させることを狙ったNI建築主による割り込みである。ここでのNI建築主の発話は、冒頭から非常に早い口調のものであったのだが、NI建築主が強引に話題を進めたかっただろうことは、そのことから考えられる。

そして、このNI建築主による強引な割り込みが理由だと思われるが、それ以降のK建築家の発言は、やや消極的・受け身的である。そして、25Aの発話は、言葉が適切かどうかかわからないが、K建築家の窓の位置に対する専門家としてのアドバイスとしては、やや投げやりな発話でもある。

確かに、専門家が示す見解が、建築主自らがあまり理解できないような場合で、かつ建築主自らの見解とそれが異なるとき、素人である建築主がどちらの見解を優先させるかを判断するのは非常に困難なことである。そしてまた、専門家と建築主の知識や技能レベルの差には、大きな隔たりがあるのは事実であり、専門家のもつ感覚や価値観を、建築主が共有することは容易ではない。さらに、この事例における西側の窓の必要性に関しては、生活環境の質を考えたとき、NI建築主とK建築家の判断基準のどちらが妥当であるのかは、そう単純に決定できる問題ではない。

しかし、以上のような分析をふまえると、関係者の相互理解は「"mismatch" Ethno-design-method」によって不十分なものとなり、「くずれた役割関係」のもとデザインが決定されているというのも、また事実である。

つまり、ここでの「"mismatch" Ethno-design-method」とは、一方は[会話例 5.6]の専門家の強引な割り込みによる主張であり、一方は[会話例 5.11]の建築家の反論を警戒した建築主の強制的な割り込みによる発話の抑制である。これらは、第5章で述べた(3)と比較して考えるとき、例えば、同じ建築主による「潜在的完結点以外での割り込み」だとしても、その実践の意味は建築主側に偏っており、それがくずれた役割関係に繋がっていると考えられる。そしてそれが、デザインの産出の結果「もう上でいいですよ」（25A）を導いているのである。

[会話例 5.11]の25Aに繋がるのが、次の[会話例 5.12]である。

[会話例 5.12]

CはNI建築主、WはNI建築主の妻、AはK建築家、Sは設計事務所のスタッフの発話を示す。

1W : あんまり：

2A : ふっ、へへへへへ。

3C : え？

4A : 上に取りますか? 【NI 建築主の妻に向かって】

* (0.5)

5W : ここは結露もでないから:

6S : へへ。

7C : 窓開けたら結露出る?

8W : うん。

9A : うん、窓はね、ま:

10W : ここと、ここ、//ここ、//ここもあるわけでしょ。

11A : そう、　　そう、

12A : うん。

* (0.5)

13W : そうするとね:

14A : だから予算オーバーしたらとりましょ。

【中略】

15A : ま:、これは:、付けといたほうがええか? 【スタッフに向かって】

* (0.5)

16S : ふふ。

17A : 多分景観【条例】の方も、言うやろ? あのあって、

18S : ふん。

19A : あとで付けるよりは、先に付けといて、なくしましたって言うほうがええでしょうから。

20S : ふんふん。

* (1.0)

21A : だと思います。

22C : うんうんうん。

【会話例 5.11】の 25A の後、【会話例 5.12】の 1W で突然、NI 建築主の妻が発話する。1W の「あんまり:」は、NI 建築主の窓の要求に対して否定的反応を示しているのである。これを察して、K 建築家は少し笑いながら「上に取りますか?」と NI 建築主の妻に向かって質問を出している。この K 建築家の発話が意味するところは、質問という中立的な方法を取りながら、NI 建築主の妻の見解を引き出すことで、「寝室の西側には窓はいらない」方向へデザインの判断を向かわせようという意図である。それを示すかのように、11A と 12A で、積極的に NI 建築主の妻の発話に対しあいづちを打っている。そして、「予算オーバーしたら」窓を無くすという専門的アドバイスをもって、デザインの変更の可能性を確保しようとしているのである。なお、15A から 20S の会話の内容は、景観条例に対する申請と異なるデザインとなる際に、申請上になかったものを加えるよりも、あったものを削除するほうがしやすいという判断を、K 建築家が述べている

ものである。なお、最終的にもこの「1 階寝室の西側の窓」は設けられることとなった。

このように、先程【会話例 5.11】において強制的な発話の抑制にあった K 建築家は、結果的に NI 建築主の妻の反応を拾い上げることでデザインの変更の可能性を残すという手段をとっている。設計において予算との兼ね合いは非常に重要なポイントではあるが、十分な共通認識を見出せないままにデザイン課題に対する消極的な解決方法となっている。

このように「Ethno-design-method」の分析から NI 邸における「1 階寝室の西側の窓」を見てみると、関係者の相互理解による共通目的、共通認識の達成という点において、そして、共通目的、共通認識によるデザインの質の向上という点において、不完全なままで決定されたデザイン・テーマであったと考えられる。

(3) アトリエと寝室の境界

NI 邸において中心的なテーマとなっているのが、互いに隣接する 1 階のアトリエと寝室の使い方の想定である。(1) では、アトリエの床仕上げを風呂・便所および外部へと広げることで、1 階の空間的一体感を得ることが試みられた。1999 年 12 月 8 日の打ち合わせでは、アトリエと寝室の境界の壁および 1 階から 2 階への階段のデザインの検討を通して、1 階の空間的一体感が模索された。この日の打ち合わせのために用意された 1 階平面図を図 5.6 に、アトリエと寝室の境界周辺の拡大図を図 5.7 に、断面図を図 5.8 に、階段周辺の断面拡大図を図 5.9 に示す。

【会話例 5.13】

C は NI 建築主、W は NI 建築主の妻、A は K 建築家の発話を示す。

1A : 例えば、ここね、

2C : うん。

3A : うん、ここ (→図 5.6 ①) 片引きにしていますけど、ここも引き違いにしてもいいかもしれないですね。

4C : そうですね、こっち側//

5A : 引き違いにしておいたらこっち側でも、どっちでも。

6C : うんうんうん。

7A : このまま、なんやったら取ってしもうたら、こう:

8C : はいはいはい。

9A : こういふ【一体的な (→図 5.6 ②)】使い方もできますしね。

10C : うんうん。

11W : ここは広いから、これが連続したら結構違いますよね。

12A : ね、こういけたほうがいいでしょ。

13C : うん。

14A : ほな、これ、もしかしたら:

- 15C : うん。
- 16A : これも、こっちに【南方向に(→図5.7①)】どっか引っ込め//てしまっ
- 17C : あっ、奥へしてもいいんだ。
- 18W : これあいていて//どうせ壁だもんね。
- 19A : そうですね。
- 20W : こっち側も、こっちの方がいらなければ、こっちへ。
- 21A : うん、ポーンとね。
- 22W : まとめますもんね。
- 23A : その方がいいかもしれませんね。
- 24C : う：ん。
- 25A : こいつ、階段上の、場合、どうなるかわからへんけど、ここでね、ちょっとここすき間あけて、柱こっちにありますけどね。
- 26C : う：ん。
- 27A : この間にいれて、こっちへに放り込むかやな。
- * (1.5)
- 28A : 扉を。
- 29C : ふ：ん。

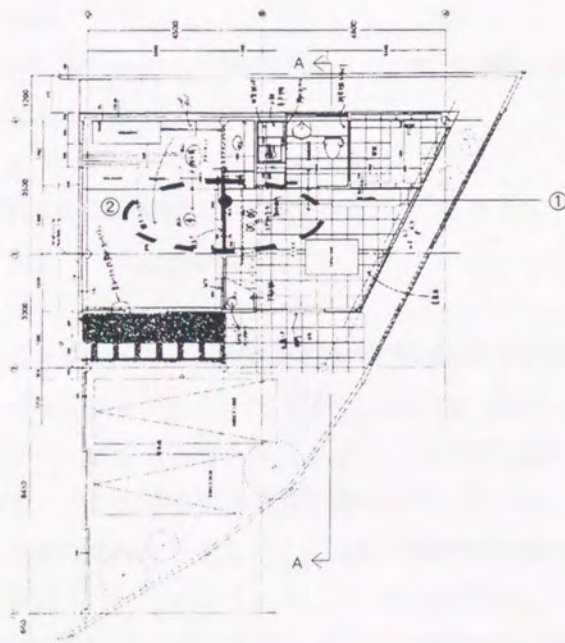


図5.6 NI邸 1階平面図(1999.12.8) 1/200

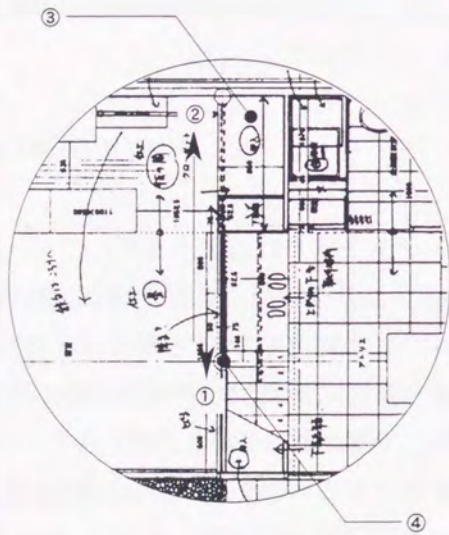


図5.7 アトリエと寝室の境界周辺部の拡大図

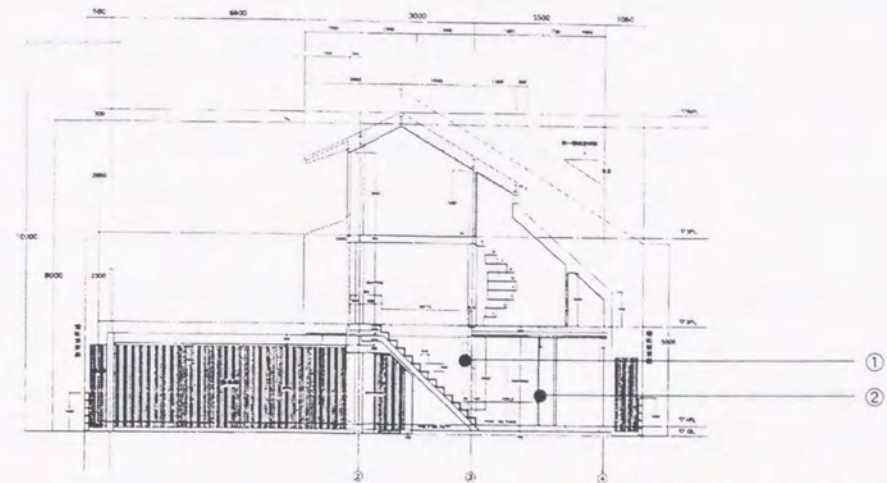


図5.8 NI邸 A-A断面図(1999.12.8) 1/200

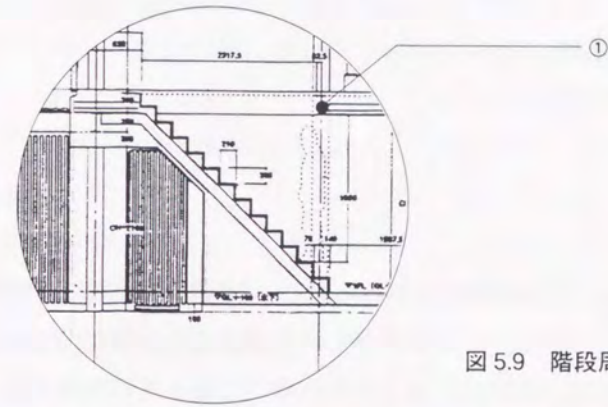


図5.9 階段周辺の断面拡大図

[会話例5.13]は、K建築家が、800mm幅の片引きの戸を、その倍の幅の引き違い戸に換えることを提案し始める場面である。そして、2枚の引き違い戸を取り払うことでアトリエと一体的に使えるという効果を説明しながら、その具体的方法を提示している。ここでは、専門家による提案とその根拠の説明(1A~13C)、建築主の質問とそれに対する応答(19A)、その提案の具体的な設計方法の提示(25A)という役割関係のもと打ち合わせが展開されている。そして、次の[会話例5.14]へと繋がる。

[会話例5.14]

CはNI建築主、WはNI建築主の妻、AはK建築家の発言を示す。

1A : ほんなら、これ抜いたら、一体的に使えるかもしれない。

* (1.0)

2A : 引き込む//んですね。

3W : こっち【北方向に(→図5.7②)】、は、いけないんですか？

* (0.5)

4A : あっ、こっちでもいけますね。

* (0.5)

5A : こっちをつけちゃうか。

6W : う：ん。

7A : それでも面白いですね。

8W : う：ん。

9A : 押し入れ(→図5.7③) / /の方をね。

10C : あ：、上の、上の押し入れをね。

11A : 押し入れをふさぐと。

12C : う：ん、別に、別にそれでもいいですよ。

13A : あ：、なるほど： / /そっか：

14W : 押し入れ見られたくないじゃない、こっち、開けたとき＝

15C : ＝開けといて、むこう閉めといてね。

16A : う：ん。

17W : うん、閉めといて。

3Wにおいて、NI建築主の妻による「質問的提案」がみられる。NI建築主の妻のこの提案の理由は14Wになって発言されているが、引き違いの収納を押し入れの目隠しと兼ねるというものである。つまり、この引き違い戸を開けて、寝室とアトリエを一体的に使っているときは、押し入れは隠されるという仕組みである。このNI建築主の妻の提案は、K建築家が、アトリエとの一体的利用を「引き違い戸の収め方」という具体的な方法のもとで焦点化することで、そのテーマを明示できたがゆえに可能となったと考えることができる。

[会話例 5.15]

CはNI建築主、WはNI建築主の妻、AはK建築家の発話を示す。

1W : でも、大きいですね、この扉＝

2A : ＝いや、一間ですわ、一間やからね：

【中略】

3A : ちょっと大変かもしれないですけど、一間ものというのは、ま、障子みたいなものにしといらたよろしいやん。

* (0.5)

4A : こいつ。

* (1.5)

5C : あっ、襖にせずに。

6A : う：ん、板戸の方がいいですか？

* (0.5)

7A : ここを、襖、いや襖じゃなくて、障子みたいにしておいてね、こいつ。

8W : はいはい。

* (1.5)

9A : そうしといたら / / どうですかね。

10W : 軽いですしね、軽いし。

11A : う：ん。

* (1.0)

12A : こいつね。

* (2.5)

13A : 障子の方がええかわからないね。

* (1.5)

14A : ね。

15C : ふん / / ふんふんふんふん。

16A : こいつ。

17C : なるほどね。

* (1.5)

18C : それでもいいよね＝

19A : ＝ねえ

20W : 障子の方がいいと思います＝

21A : ＝障子の方がいいでしょ。

22W : 一番合やすいと思います。

23A : やっぱりね、雰囲気的には。

24W : うん。

ここでは、その引き違い戸をどのようなものにするかについて検討が進められる。3Aにおいて、K建築家が「障子みたいなものにしといらたよろしいやん」と提案している。これは、「専門性に守られた断言」と言える。なぜ障子が良いのか。は常識に任されているのである。さらに、6Aの「板戸の方がいいですか？」のK建築家の質問は、暗に板戸という選択肢を否定しているのと同様であり、それが、NI建築主の判断にプレッシャーを与えていることが理解できる。

それに対し、NI建築主は5Cで「あっ、襖にせずに」と発話しているが、これはその提案の意味を理解しての発言ではないだろう。これは、沈黙を脱するため、あるいは会話を継続させるための発話であり、理解できていないゆえの「襖」を持ち出しての発話だと考えられる。

その後、NI建築主の妻の応答が見られる。観察調査での印象をふまえると、8Wの発話は沈黙を察してのものであり、^①相手の発話を聞いている、というマークであると考えられる。そしてその後の「軽いですしね、軽いし」（10W）という発話も、これまでの会話の内容を頼りに、何とかK建築家の常識的な発話の根拠を見出そうとした結果であると考えられる。

しかし、K建築家の発話は、NI建築主の妻のその発話にも応答することなく、^②障子が良い、という根拠を示さないまま続けられる。10Aから14Aの間の非常に長い沈黙をのあと、一応、NI建築主は「なるほどね」と反応を見せるが、18Cの発話「それでもいいよね」がNI建築主の妻に向けられていることから、^③障子が良い、理由がNI建築主の中で押さえきれていないことがわかる。

そして結局、K建築家が物語（提案）の話し手であるにも関わらず、20Wと22Wの発話によって、NI建築主の妻がこのテーマの要約を述べ、パンチラインを作り出すことで話題は終結する。(1)でも述べたが、通常は、物語の話し手がパンチラインを実践するものである。この点において「くずれた役割関係」が見られ、建築主が、専門家の「"mismatch" Ethno-design-method」に対して、自らの限られた経験や常識を頼りに懸命に対処するという状況が浮かび上がってくる。

一応、このNI建築主の妻による要約とK建築家の^④障子が良い、とした判断基準が一致したことにより、K建築家とNI建築主の妻は「雰囲気」という価値観を共有できたものとみられる。しかしおそらくは、NI建築主には共有されていないものと考えられる。

この後、K建築家は「寝室とアトリエとの一体化」をテーマに、さらなる方法を提案する。

[会話例 5.16]

CはNI建築主、WはNI建築主の妻、AはK建築家の発話を示す。

1A : これ、ま、ま、もう一枚考えたら、ここんとも :

2C : う : ん。

3A : この壁 (→図 5.8 ①) を取っただけ、これもこっちに放り込むようにしておいたらええかもしれないな。

* (1.0)

4A : 2枚とも。

* (0.5)

5A : そしたら階段だけ、ポツとあって//こう一番いい、こういう部屋の使い方が。

6C : あ : 、なるほど、はいはいはい。

7W : 夏はいいわね :

8A : 夏いいですね : 、えへへへへ。

9W : ふふふふふ。

10C : あはははは。

11A : これは : 、ポーンと、ここ//

12C : これは自分の部屋みたいやもんね、うん。

13W : う : ん。

14A : そうしましょか、全くね。

15C : こう階段を、こう露出してしまおう、真ん中に。

16A : 真ん中にね。

17C : うん。

18A : そしたら、これ、すわ、座るみたいなもんですよ、椅子みたいになります、はい。

19C : うん。

この会話をみるかぎり、「寝室とアトリエとの一体化」という計画の目標は全員に共有されていることがわかる。しかし、NI建築主は18Aの発話の後、この提案のような設計にすると、これまで北側寝室との境界の壁に付いていた手すりが無くなってしまおうということに気がつき、その指摘を行う。

[会話例 5.17]

CはNI建築主、WはNI建築主の妻、AはK建築家、Sは設計事務所のスタッフの発話を示す。

1C : あ、でも、介役は、手すりは残ってるわな、こっちは。

2A : あ : 、そ、そうか、手すりなし//

3C : 手すりなしやったらやばいから :

4A : 手すりなしですね、そのかわり。

5C : う : ん、それは大事なことから。

6A : あ : 、だからここに、階段に手すりをもう付けとかないとあかんね//壁付きじゃなくて。

7C : そうそうそうそう。

8C : 壁付きじゃなくて、階段から、はわして。

9A : 階段から付けとかないと。

10C : 階段からやると、狭くなってくるな。

11A : そうしたらちょっと、ここ、これなくてね、こう//ぐいっと入ってたら、これ。

12W : 階段に自立させるというのは、強度はどう
なんですか？

13A : そうそう、強度悪いですよ、だから//

14C : やっぱね、そりゃそうだよな。

15A : これは、こう、だからね、こう、襖が抜けるとするじゃないですか、

16C : う : ん。

17A : で、ここに部屋があって、真ん中にこう階段がこうあるような (ポーズ)

18C : そうそうそうそう。

19A : イメージとしたら、きれいですよね。
20W : きれいですよね。
21A : だから、そこにパイプがあるとやっぱりちょっとまずいかも、あははははは。
22S : へへへへへ。
23A : これは：
24C : でも、やっぱりちょっとやばいかな、やっぱし手すりだね。
25A : あ：、ま、例えばね、縦パイプだけびつとね、
* (1.0)
26A : こう：、手すり、パツともてるようなだけあると。
* (0.5)
27C : 一段一段に？
* (0.5)
28A : あっ、一段一段じゃなしに、この1本か、2本ぐらいですね、縦に。
29C : あ：、は：は：は：は：は：。

K 建築家は、NI 建築主の手すりの問題の指摘に対し、懸命に手すりがないことによる「イメージとしてのきれいさ」を主張しており（19A）、NI 建築主の妻もそれに共感を示している（20W）。しかし、再びNI 建築主による指摘が発せられる（24C）。そして、K 建築家は、この指摘に対し垂直パイプの設置という方法を提示する。なお、この24Cで、「でも」という対照化が行われていることから、[会話例5.17]が日常的な会話に近づいていることがわかる。これは、打ち合わせを重ねることで、NI 建築主とK 建築家の間に慣れと親近感が生まれてきたからだと考えられる。

[会話例5.18]

CはNI 建築主、WはNI 建築主の妻、AはK 建築家の発話を示す。

1A : ま、こんな感じかな、やるとしたら。
* (0.5)
2A : ちょっと変かもしれないですね。
3C : ま、変は変ですよ。
4A : ま、ここ持てますけど、な、なかったらきれいけど、ほんで、この面【階段の側面の壁】が全部無くなりますからね。
5C : そういうことなんですよ、うん。
6A : あはははは、そう。
7C : それは非常に魅力的なんですけれども。
8W : すごい遊び場になるね。
9C : そうそうそう。

10A : すごいですよ、すばつとこう、だから、ホーム、パーティするときええでしょうね、
11W : ははは。
12A : ここ【押し入れ】に全部入れてしもうて、ここんところは、ま、もの見えないから、こういう座敷と、土足、あ、土足いうたらここまで入ってこれますからね。
13C : うんうん。
14W : えへへへへ。
15A : で、上と下と両方使えますから。
16C : おもしろいねんけどな：
17A : はいで、ま／／
18C : 安全に対して、家庭内安全やわな。
19A : だーっと、こうね。
20C : う：ん。
21A : ま、これね：
* (3.0)
22A : なんとかなるんちゃうかな：
* (2.0)
23A : あの：、最初、と、もし手すり付けなくて、
24C : う：ん
25A : もしどうしてもいるんやったらこれね、今いうてるようなことで付けちゃうかですね。
* (1.0)
26A : こういう感じでやってしまって、ここでこう付ければいいですから、
* (0.5)
27C : うん？ なんて？ あ、ここ。
28A : もし、どうしてもいる場合はね。
29C : うん、うん／／そうですね。
30A : ま、要するに、ないほうが、
31C : うん、きれいやけれども。
32A : 開けたときにはきれいやけれども、
33C : うん。
34A : どうしてもいるということであれば、こういう感じのものをつくらないしょうがないね。
35C : うんうん、はいはい。
36A : ということですわ。
37C : うん。

ここでも、K 建築家は「イメージとしてのきれいさ」を主張している。NI 建築主も、[会話例

5.17] からの妻のそれに共感する意見があつてか、K 建築家の提案に理解を示しつつ、生活上の安全、の考慮から判断を迷っていることがわかる (7C から 20C)。この NI 建築主の躊躇を振り切らせるかのように、21A 以降、「イメージを優先させたい」という K 建築家の意向とともに、K 建築家の発話が説得的なものとなってくることは、25A と 34A において、「手すりはどうしてもいるならば」ということが強調されていることから読み取ることができる。さらに、「手すりは付けられない方が良く、どうしてもというならば縦パイプを付けるしかない」という判断およびデザインの選択肢の限定によって、NI 建築主を説得しようとするトピック・コントロールが見られる。34A の「つくらないとしょうがないね」および 36A の「ということですよ」がそれである。つまり、正規の手すりは付けられないということを前提とした「専門的」アドバイスとして、デザインの選択肢が提示されているわけである。そして、K 建築家は、NI 建築主を説得するために、次のような意見を述べる。

[会話例 5.19]

C は NI 建築主、W は NI 建築主の妻、A は K 建築家の発話を示す。

1C : 捨てがたい、ねえ、捨てがたいから、どうしようかな :

2W : きれいに、きれいにくらすのは、どう、どう ?

3A : えへへへへへ、捨てがたいですよ。

4C : 捨てがたいけど、やっぱし生活の、生活の安全のためには。

5A : うん。

6W : なあに、安全のためって ?

7C : いやいや、こけない、こけないように、あはははは。

8W : あ :、そうかそうか。

9C : 階段、階段があるからさ。

10W : うんうん。

11C : そう、そこの問題。

12A : あ、これね、すみません、ここ (→図 5.7 ④) に柱ついていますわ。

* (1.0)

13C : あ、そうかそうかそうか。

14A : だから、手すりはいらぬ、ここにボンと柱あるから。

15C : 手すりというか、その最初の、最初の / それはいらぬ。

16A : そうです、柱は :

17C : 最初の、最初の。

18A : そうです、そうですね、ここにはあるんです。

19C : あっ、そうかそうか。

【中略】

20W : 次にあるものはなんですか? こっちは?

21A : えっ?

22W : 次に、もとの構造体から考えて、

23A : え :、え :

24W : 手すり以外に何が次にありますか?

25A : 次はね、あと :、もうはこの辺ですね、何もありません。

26W : 何もありませんか?

27A : あ、ここ (→図 5.8 ②) に壁がありますね、ここに壁が。

28C : あ :、なるほどね。

29A : だからちょうどこの辺、この間ですね、そやから、ここがもう壁ですよ。

30C : うんうん。

31A : だからここが壁ですよ。

32W : うん。

33A : だからこの辺が壁ですね、柱があるだけ、ま、こんだけですよ。

34C : うん。

35W : 一間のことやね、一間。

36A : 一間もありませんね、ここ / ここは :、1500 です。

37C : 一間もない、一間もないよ、1500 ですね。

38A : 大体ね :、ここに柱ありますよね。

39W : うん。

K 建築家は、階段の脇に構造の柱があることに気がつき、それを理由に縦パイプさえも必要ないことを主張する (12A・14A)。そして、次の [会話例 5.20] で、この日の「寝室とアトリエの境界」に関する議論は終了する。

[会話例 5.20]

C は NI 建築主、W は NI 建築主の妻、A は K 建築家の発話を示す。

1A : ま、手すり付けたら、こう、ものすごいリアリティが出てきますよね。

* (0.5)

2A : ないほうがシュールな感じですよ。

3C : ま、確かにね。

4W : うん。

5A : ないほうがこう、部屋、あの、この :、扉のけたときにね。

* (1.5)

6C : あっ、オブジェみたいに、こうボンと。

- 7A : そうです。
- 8W : うん、それは、いい感じよね。
- 9C : ね。
- 10A : で、例えば、これをもうちょっと、木の、木の雰囲気かなんかで作ったらもっと壮観やね。
- 11W : ふ：ん。
- 12A : オブジェみたいになってくるでしょうね。
- * (5.5)
- 13W : そっか：、これは今結論出さないと／いけませんか？
- 14A : いえいえ、
- 15A : いいです。
- 16W : いいですか。
- 17A : これは別に問題はないです。ま、けっ／／
- 18W : 宿題で考えて。
- 19A : うん、これは宿題にしましょう、僕らの方も宿題の方がいいです、これは。

次の[会話例5.21]は、1999年12月17日の打ち合わせにて、NI建築主がK建築主に、階段の手すりに関する課題の最終的な判断を報告する場面である。

[会話例5.21]

- CはNI建築主、AはK建築家のスタッフの発話を示す。
- 1C : で、課題あったやつからいいますと、
- 2A : うん。
- 3C : 一つもう結論は、ここ、もう、抜いてやりましょうと。
- 4A : ここ、こう取ってしましましょうと。
- 5C : はい。
- 6A : ふふふふふ、ははははは。
- 7C : あはははは、負けました。
- 8A : あはははは、いやいやいや。
- 9C : いや、結局はね、結局はさ：、あの：
- 10A : いや：
- 11C : すぐ天井（→図5.9①）が、あの：、2階の天井があるじゃない。
- 12A : はいはいはいはい。
- 13C : だから、手は、手も、すぐに次に、あの：
- 14A : そうですよ。
- 15C : 床：、／／手が届くと。

- 16A : ええ、
- 17A : だから、あの：、そうですよ。

結局、[会話例5.20]のNI建築主の妻による積極的な「質問的提案」（20Cと22Cと24C）によって見出されることになる、手すりの代わりとして構造体を利用するという方法が、手すりなしのデザインで決定を下す根拠となった。

このように、K建築家は「イメージとしてのきれいさ」を一貫して主張し続けたわけだが、結果的には、NI建築主の妻の強い共感もあり、その価値観・判断基準は互いに共有されたものと判断できる。しかし、そこには、[会話例5.18]でのK建築家による断言的なトピック・コントロールによる選択肢の限定が、大きく影響したと考えられる。それを示すかのように、[会話例5.21]の7C「あはははは、負けました」からは、K建築家に「説得された」というNI建築主の感想を読み取ることができる。

現在、NI邸の計画は、(1)アトリエと風呂・便所の床レベル、(2)1階寝室の西側の窓、(3)アトリエと寝室の境界の課題を中心とした人々の「Ethno-design-method」の実践による様々なデザインの協働的産出、価値の形成を経て、工事が順調に進んでいる。なお、NI邸の最終的な成果を示すものとして、確認申請に出された図面を付4としてあげておく。

新築要望

☆ 全般に関する希望

- ・快適で住みやすい家
- ・シンプルで、デザイン性に富み、潤い豊かなエクステリア
- ・採光・換気・風通しに配慮した建物
- ・省エネ、環境問題にも配慮
- ・間取りできるだけ広く、また、実際より広く感じるように
- ・夏期対策（断熱対策）を重視した構造
- ・メンテナンスが容易な外壁、埃が立たない室内
- ・バリアフリーにも配慮
- ・十分な収納スペースの確保

- ・ローコスト建築（限りなき努力、工夫を期待）
- ・工期はできるだけ短く
- ・万全の工事チェック・監督を

☆ 建築費に含むもの

- ・本体工事費
- ・取付家具
- ・照明設備
- ・冷暖房設備
- ・システムキッチン
- ・カーテン、ブラインド etc
- ・造園
- ・外溝工事
- ・設計料
- ・交通費、模型製作等の実費
- ・消費税

☆ 快適・住み易さのために

- ・木造風（和風）をバランス良く導入したい（引き戸、格子、障子等）
- ・身体にやさしい素材、建材の使用 化学物質排除（ホルムアルデヒド他）
(ex. 合板-F1規格、集成材-E0タイプ)
- ・省エネ (ex. ペアガラス等の複層ガラス)、快適さ (ex. 床暖房)
- ・音対策-遮音・吸音 (2・3階の床、2階の水音、トイレ、エアコン等)
- ・換気、風通し対策=不在時の通風 (ex. 24時間換気システム?)
- ・雨水対策-北側地面、デッキ、ガレージ
- ・掃除が楽、できるだけ埃がたないように (ex. セトラノリナ)
- ・ホームセキュリティ (地震、ガス、火災、盗難 etc) に配慮
- ・原則バリアフリー対応 (段差なし/階段、浴室、トイレ等の手すり or 下地処理
階段等でのフットライト/洗面・脱衣・トイレ、浴室での暖房 etc)
- ・天井は少しでも高く

- ・製作・造り付け希望家具 (現設計図以外のもの)
1F...アトリエのデスク・作業台、収納棚
2F...リビングの座卓、コーナー机、AV等の収納棚、収納スペース付玄関ボックス
デッキテーブル&チェア
3F...デスク (2室とも)、ベッド (1室の予定)、収納棚

- ・納戸など十分な収納スペースを確保
床下収納の活用 (床下冷凍庫も検討)、ニッチの活用
ロフト増設の備え
タンスの上に天袋
外部収納スペースの確保

- ・階段-幅、蹴上げ、踏み面、勾配、滑り止め etc
- ・レバーハンドルの多用 (ドアノブ、水栓)

- ・十分な電気容量の確保-単相3線式配線
- ・コンセント、スイッチの数は豊富に
- ・照明-足元センサー灯、蛍スイッチ、停電時対応灯 (階段下やトイレの前など)
一室多灯照明 (リビング、寝室 etc)

- ・インターホンの種類 (TV式の採用?)、設置場所
- ・電話-子機の数、設置場所
- ・マルチメディア対応-配線、コンセント、モデム

- ・空調-できればビルトイン (メンテナンス配慮)
- ・供給能力十分な給湯設備

付3 NI邸・新築要望1

☆ 門・門扉・ガレージ扉・アプローチ

- ・門扉とガレージ扉...一体感持たせる
- ・ガレージ扉...木製、格子状、3枚引き戸
- ・門扉...引き戸かドアか
- ・門灯-オートライト?

- ・表札、インターホンの設置場所
- ・郵便、新聞、牛乳受けの場所
- ・ガスメーター、電気検針の場所
- ・傘立てスペース、一時物置きスペース?

- ・路地風の演出-飛び石の材質、植栽、
奥のルーバーは外したが、路地風の雰囲気どうするか
- ・ポーチ灯の位置、数
- ・傘立てスペース、玄関前の一時的物置きスペースの確保
- ・玄関前に格子 or 簾製壁風のもの

☆ 玄関・アトリエ (三和土)

- ・玄関はドアか引き戸か (玄関扉とアトリエのサッシとの関連?)
- ・玄関灯
- ・椅子 or ベンチ (靴が履きやすい)

- ・収納たっぶりの靴箱造り付け (ブーツや傘も)
- ・靴箱の風通し確保
- ・全身ミラー設置
- ・コートや帽子の収納スペース
- ・印鑑入れ等の保管スペース
- ・ゴルフバッグ、テニスバッグ等の収納スペース
- ・コンセント設置-靴乾燥機等に使用
- ・玄関付近の飾り棚等の装飾スペース

- ・階段の壁面-隠すのか露出か
- ・階段手すりの位置
- ・階段下のスペースは思ったより少ない→アトリエサイドで使用する方がベター?

- ・アトリエの使い方-日本画、陶芸等
- ・アトリエ床の材質-陶板、タイル、瓦敷き etc
- ・作業デスク、収納棚の設置 (既存大机収納)

- ・水道栓、流しの設置 (アトリエ前付近?)

☆ 寝室・納戸・クローゼット

- (寝室)
- ・和風、畳敷き
- ・両側の引き戸 (ガラスサッシ) の意匠、入り口引き戸の意匠も
- ・サッシの内側はカーテン
- ・採光-西側に窓

- ・押入? (布団収納スペース)
- ・床下収納スペース検討
- ・照明-多灯照明、リモコンスイッチ

(納戸)

- ・既存タンス類を収容
- ・換気・通風の確保
- ・寝室との仕切り-壁でなく引き戸や板張りの折れ戸?
- ・効率的な衣服用パイプ設置 (二重、可動式 etc)
- ・床下収納の検討

☆ サニタリー

◇ 浴室

- ・採光、換気 (換気扇) を十分に
- ・壁はタイル、上部は木材も検討
- ・床材? (滑り止め)、浴室専用タイプ
- ・窓は大きく、ブラインド設置
- ・ドアは引き戸か折り戸も検討
- ・洗面・トイレとの間にブラインド
- ・手すり設置 (or 下地措置)

- ・バスタブは長目、足をのばしてゆったり
- ・浴槽は半埋め込み式-床からバスタブ縁まで低く
- ・浴槽に握りバー
- ・一度座って入れるスペースの確保
- ・シャワー スライドバー式

・ 暖房?

◇ 洗面・脱衣・トイレ・洗濯

- ・採光、換気確保
- ・床材-アトリエと同材?
- ・冷暖房-扇風機、温風機
- ・深夜照明対策-ex. 照度ダウン方式に
- ・コンセント多めに
- ・収納スペースを多く

- ・洗面台は高め、シンクは大きく
- ・シャワー水栓?
- ・洗面台上、周辺はスッキリ (コンセント内蔵収納棚等)
- ・洗面・化粧用椅子

- ・着替え衣類収納スペース
- ・洗濯物入れ
- ・足ふきマットの乾燥バー

- ・ウォッシュレット-温水洗浄と暖房便座 (脱臭?), 色は白

付3 NI邸・新築要望2

- ・ペーパーロールの位置
- ・ペーパー、図書類収納スペース

- ・全自動洗濯乾燥機？ or 乾燥機設置
- ・汲み上げポンプ？
- ・干し場、アイロン掛けの場所

☆ リビング

- ・雰囲気…暖かく、和める装いに ウッディな雰囲気も検討
→2階のトータルイメージをどうするか
- ・吹き抜け天井にファン設置
- ・直座り式リビングに
- ・フローリング
- ・デッキサイドのサッシ戸は全面ガラス（ペアガラスか二重サッシか）、網戸
- ・窓の位置は低めで、大きく（同上）
- ・窓の上部に吊り戸棚（薄くて良いが）？
- ・窓の外側ガラスの清掃対応を考慮しておく
- ・カーテン、ブラインド？
- ・ロールカーテン…室内で活用（キッチン、ゲストスペース、デスクスペースの仕切り）

- ・フロア暖房-床暖房の導入
- ・印象的な座卓製作を
- ・ソファ？ 窓際にベンチ or ソファ取付？
or 低い飾り棚として、腰掛けることも可能なもの（幅は25-30cm程度の狭いもの）
or ボックスにして可動式に（同上）
- ・マッサージ椅子 or 安楽椅子？

- ・多灯照明、間接照明
- ・スイッチは照明毎に分ける。調光スイッチも
- ・A/V関連機器等の収納棚取付
TVは大きめを前提に組み込みも
スピーカーの位置

- ・ピアノ収納、床補強
- ・デスクスペース（PC）or 書斎コーナー（仕切りで半独立コーナーに）の設置

- ・ガスの確保
- ・階段口付近の安全対策
- ・螺旋階段のデザイン…スッキリしたものでもアート性の高いものに

☆ キッチン・ダイニング

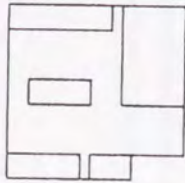
- ・調理台、コンロ前の壁はタイル
- ・食器等の収納スペース、ウォールキャビネット、アイレベル収納
- ・食器棚は折り戸か引き戸か

- ・調理台は高く、使いやすいもの（高さの目安：身長165-170cmで90cm）
- ・調理台-奥行き深く 60-75cm
- ・調理台等の下に「けこみ」

- ・サッシ戸はペアガラス、強化ガラス
- ・収納スペースできるだけ多く
- ・机は造り付け
- ・TVやインターネット端子

☆ room SAHO

- ・床の防音対策
- ・暑さ対策
- ・床はフローリング（コルクボード？）
- ・壁は木目とか味のあるもの（RCっぽいもの）、壁に装飾ができるスペース
- ・照明は埃がたまらないように埋め込みで
- ・北壁に通風・採光窓
- ・ベッド…造り付け or 可動式で高め、下部に収納スペース設置
- ・ソファ設置予定
- ・机（可動式）製作、収納棚（東西壁面上部に）造り付け
- ・クローゼット造り付け
- ・TVやインターネット端子



☆ テラス・ウッドデッキ

- ・日除けシート（帆布 etc）、簾等の活用
- ・キッチン、リビングとの段差なし
- ・テーブル、椅子の製作
- ・手すりは木製で高すぎず デザイン？
- ・西側は目隠し用に高めの柵、格子状 etc
- ・テラス灯
- ・移動コンセント
- ・若干の収納スペース
- ・ハーブ、花のスペース
- ・水道栓

☆ 駐車スペース

- ・車2台分 その他バイク2台、自転車4台のスペース
- ・デッキからの雨だれ対策？
- ・ガレージの地面？
- ・玄関アプローチとのバランス
- ・洗車用（庭と兼用）水道栓=アトリエ前の流しと兼用？
- ・外部収納スペース（車関連、園芸用品、掃除道具）の確保

☆ 屋根・外壁・塀・植栽・庭

- ・屋根、外壁の材質、カラー
- ・外壁、テラス、ガレージ扉、塀…一体感、バランス良く
- ・北側に雨水排水溝

- ・ワークトップ 耐久性で使いやすいのはステンレス、その他、人工大理石

- ・シンクの材質はステンレス
- ・ワンタッチ蛇口、シャワー流水
- ・向かい側に水が飛び散らない工夫（ex. 透明板の低い衝立）
- ・浄水器
- ・食器洗乾燥機
- ・シンクの上にワイピングガラス乾燥設備
- ・食卓スペース 白熱灯のペンダント照明

- ・コンロの高さは調理台より低く
- ・ハイカロリーバーナー
- ・コンロは3口 or 4口？
- ・オープン、電子レンジ内蔵
- ・レンジフードは大き目

- ・家電製品の設置・収納場所
レンジ、ポット、炊飯器、オーブントースター、ミキサー etc
（炊飯器はスライド式の棚板に置くのも一案）
- ・カウンター上にコンセント多く
- ・手元灯（シンク、調理台、レンジ）

- ・食品保存スペース
- ・冷蔵庫
- ・料理本等の収納スペース
- ・各種説明書、領収証等の収納スペース（リビングでスペース確保でも）

- ・キャスター付サイドテーブル or サイドワゴン（近くにコンセント）
- ・布巾の干し場、キッチンペーパー設置場所等の確保
- ・ゴミ箱設置場所-シンクの下等に分別ゴミ（燃える、燃えない、缶・ペット etc）

- ・足元暖房、作業用椅子？

☆ ゲストスペース

- ・畳敷き
- ・間仕切りをどうするか-ロールカーテン、屏風 etc
- ・押入
- ・仏壇設置スペース？
- ・床の間風のものを作れるか

- ◇トイレ、洗面、化粧コーナーの確保

☆ room A Z

- ・床の防音対策
- ・暑さ対策
- ・畳かフローリング（コルクボード）か？
- ・ベッドは置かない予定
- ・東側に窓、北壁に通風・採光窓

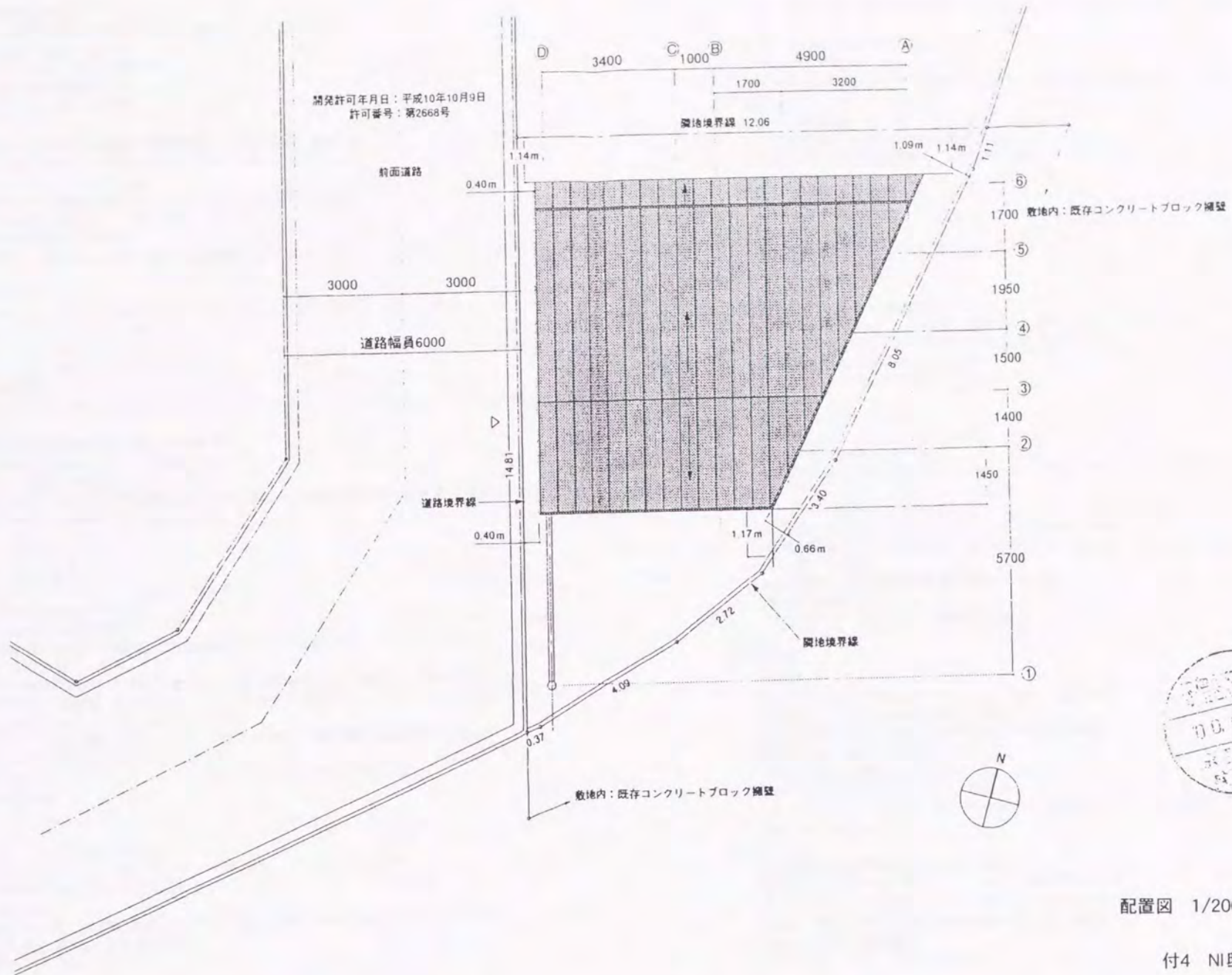
付3 NI邸・新築要望3

- ・東側の北側は当面残す
- ・ // 南側-レンガや石等を積み、その上に植栽
また荒い格子状のワイヤーフェンス
- ・外壁西側に荒い格子状フェンス-ツタ等を這わせる
- ・浴室の前庭に植栽&パーゴラ-同上

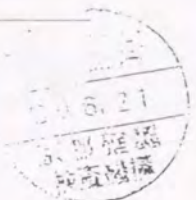
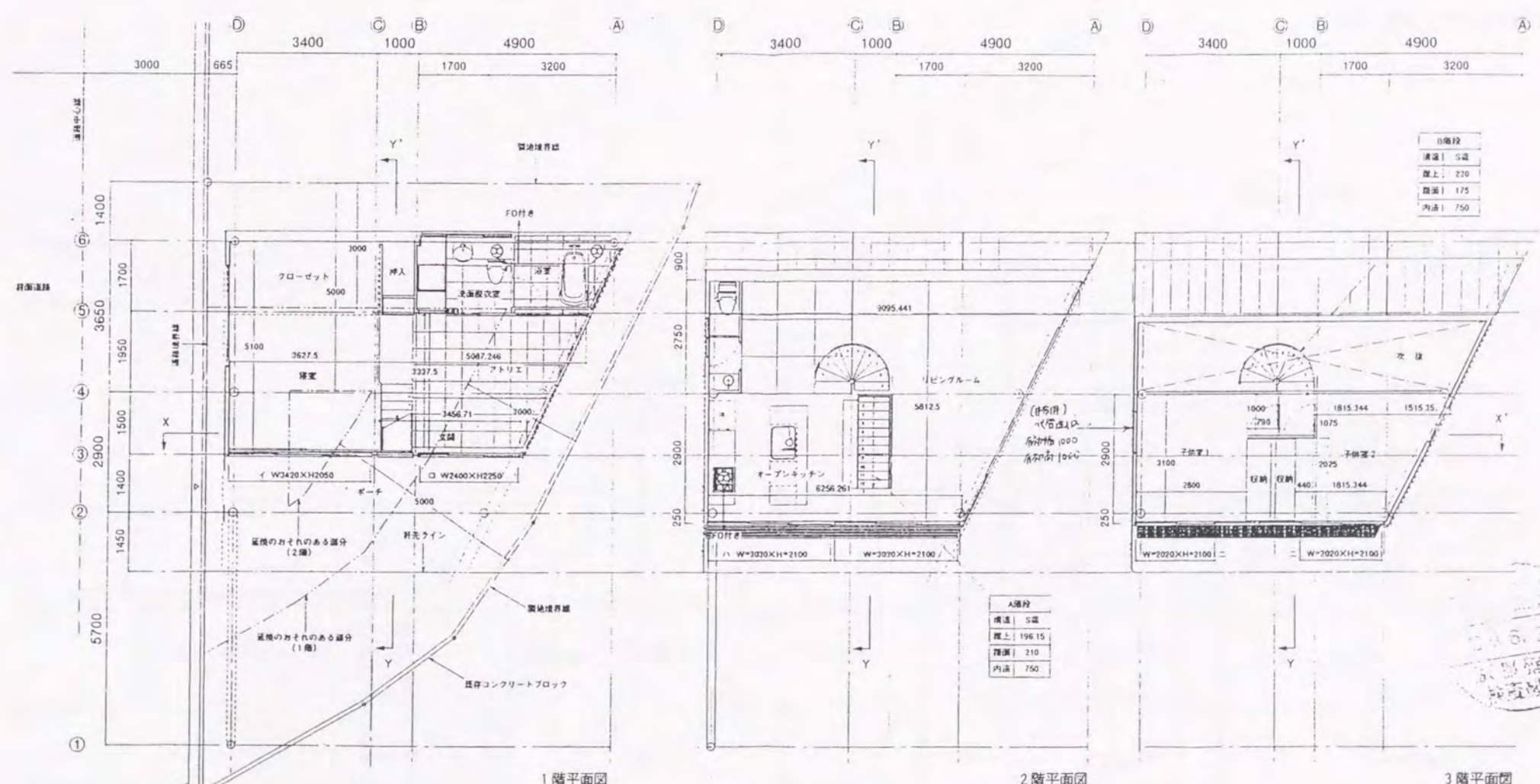
- ・庭にシンボルツリー
モクレン、コブシ、キンモクセイ、サルズベリ、ハナミズキ etc
- ・東南サイドの樹木
- ・北側空き地の植栽-ex. 竹
- ・庭園灯？-ガレージ灯との兼用
- ・アプローチ及びアトリエ前三和土との境目の植栽
- ・水道栓-アトリエ前流し等との兼用

☆ その他

- ・火災報知器、消火器 設置場所等
- ・床下点検時の進入口
- ・エアコン、給湯設備の室外機収納スペース
- ・上水道、下水道
- ・電気、ガス
- ・電話線、ISDN？、CATV



付4 NI邸・確認申請用図面1

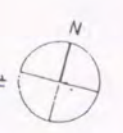


変名	床高	アトリエ	キッチン・L （キッチン）	子供室1	子供室2
A	18.40m	14.25m	44.61m ²	9.47m ²	8.86m ²
L	7.01m >2.64m	5.40m >2.03m	12.72m ² >6.37m ²	4.24m ² >1.35m ²	4.24m ² >1.26m ²
V	2.23m >0.92m	1.80m >0.71m	4.24m ² >2.23m ²	2.12m ² >0.47m ²	2.12m ² >0.44m ²
S	0.53m >0.36m	0.37m >0.28m	0.50m ² 第一車庫2号	0.50m ² 第一車庫3号	0.50m ² >0.17m ²

- 各室面積
- イ：5.100×3.627=18.4977
 - アトリエ：(5.087+3.456)×3.337×1/2=14.2529955
 - キッチン・L：(6.256+9.095)×5.812×1/2=44.810006
 - 子供室1：2.100×2.800=5.88、1.8×0.790=0.790、8.58+0.790=9.47
 - 子供室2：(1.815+1.230)×3.190×1/2=7.97475、0.440×2.025=0.891、7.97475+0.891=8.86575
- 車庫面積
- イ：第一車庫/W2.42×H2.05=7.011
 - 第二車庫/W1.14×H2.05=2.337
 - 第三車庫/W1.14×H0.47=0.5358
 - ハ：第二車庫/W3.03×H2.10×2=12.726
 - 第三車庫/W1.01×H2.10×2=4.242
 - 第四車庫/W1.01×H0.50=0.505
 - ニ：第一車庫/W2.82×H2.10=4.242
 - 第二車庫/W1.01×H2.10=2.121
 - 第三車庫/W1.01×H0.50=0.505

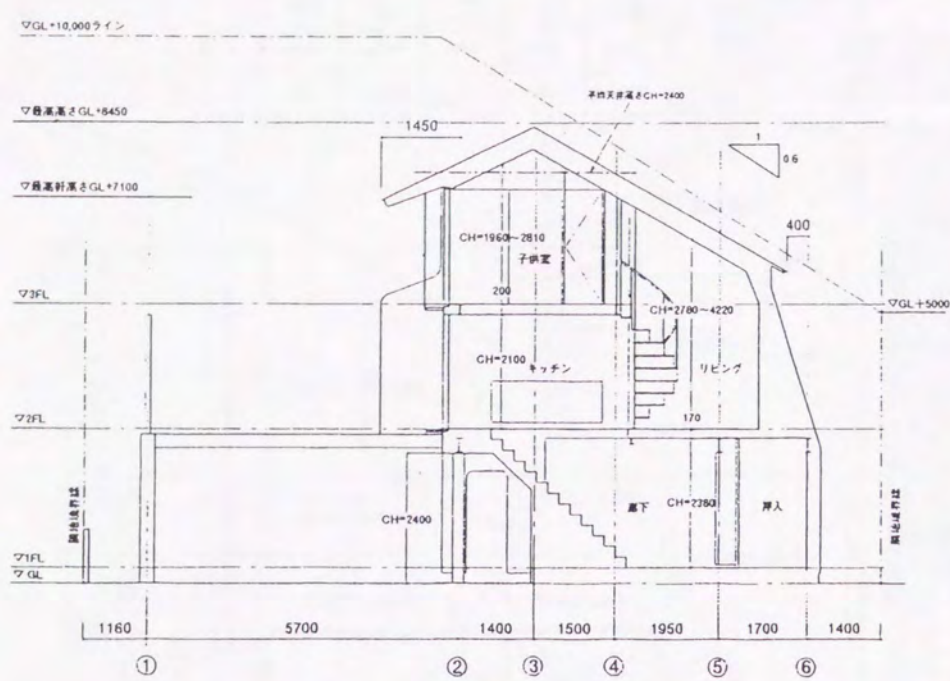
2F
内法仕上（リビングルーム/オープンキッチンの天井及び壁）
床材：フローリング（床材）
天井：プラスターボード（712.5mmの上AEF塗り/指定番号：不燃1003号）
壁：プラスターボード（712.5mmの上AEF塗り/指定番号：不燃1003号）
※延焼のおそれのある開口部については、乙種防火戸とする

※1Fの柱に付いたラスタイルは40mm厚とする
※1Fの柱に付いたラスタイルは40mm厚とする
※1Fの柱に付いたラスタイルは40mm厚とする
※1Fの柱に付いたラスタイルは40mm厚とする
※1Fの柱に付いたラスタイルは40mm厚とする

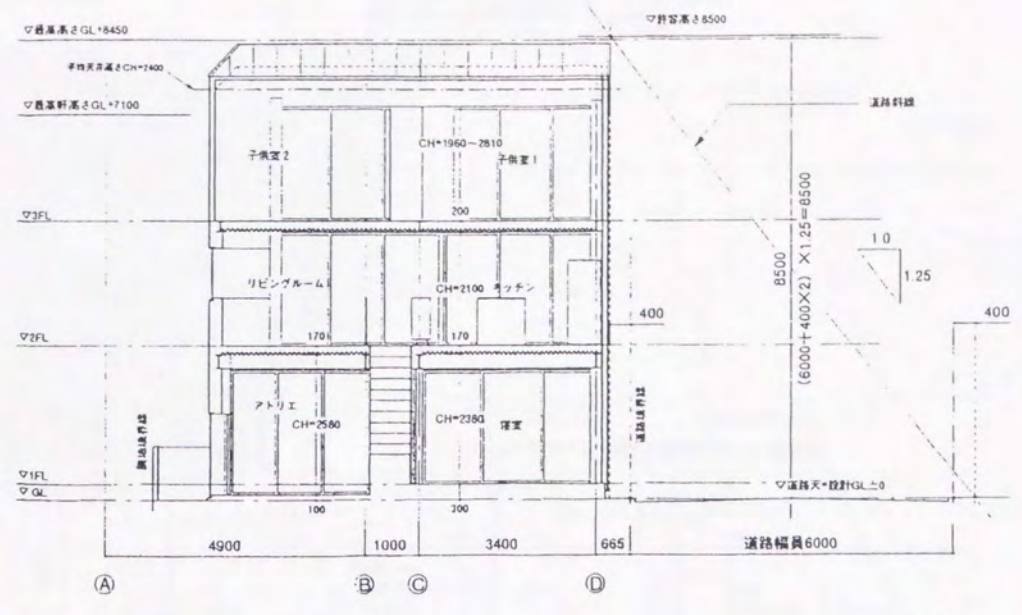


A：図例、L：有効床面積（>AX1/7）、V：有効床面積（>AX1/20）、S：有効床面積（>S×1/50）

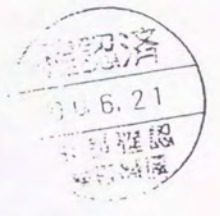
各階平面図 1/200
付4 NI邸・確認申請用図面2



Y-Y断面図

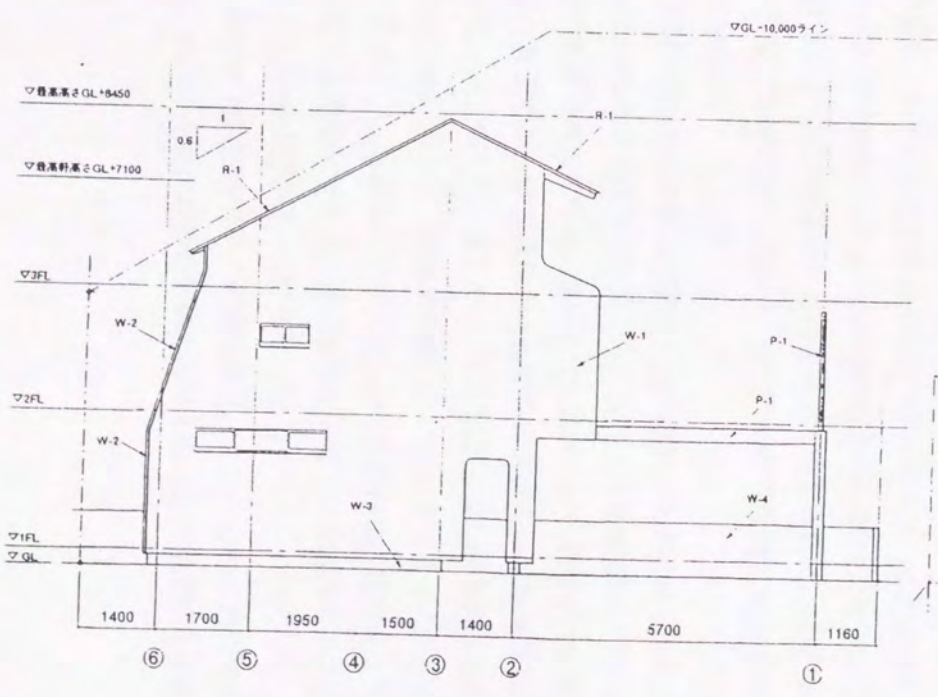


X-X断面図

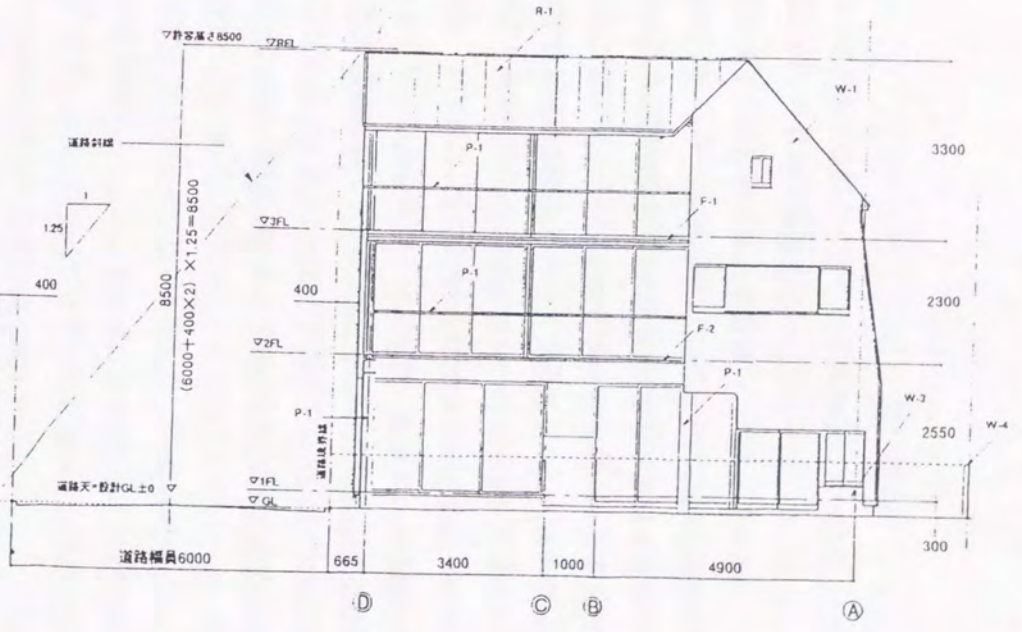


断面図 1/200

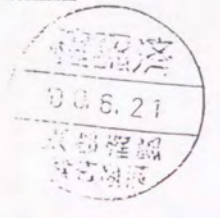
付4 NI邸・確認申請用図面3



西側立面図



南側立面図



立面図 1/200

- 外部仕上表
- W-1: 鉄板(7)2mm塗装仕上げ (白)
 - W-2: カラー鉄板(7)0.4mm<フラットルーフ工法>
 - W-3: コンクリート打放し撥水剤吹付け
 - W-4: 既存コンクリートブロック(7)100mm+塗装仕上げ (白)
 - R-1: カラー鉄板(7)0.4mm<フラットルーフ工法>
 - P-1: 鉄部塗装仕上げ (白)
 - F-1: スチールブレーチング塗装仕上げ (白)
 - F-2: 木製デッキ+撥水剤吹付け

付4 NI邸・確認申請用図面4

注

1) 人々が、その制度的志向性にしたがって、会話のシーケンス構造を維持する、あるいはしようとするをいう。例えば、ニュース・インタビューの会話がわかりやすい。そこでは、日常的な会話では頻繁に見られる、「えー」「すごい」などの情報に対して付与されトピック展開をさらに促進する役割を果たす、私的な評価を伴った反応（ニュースマーク）や、「ふーん、ええ」などの情報提供者にトピックの展開を継続させる反応（継続促進語）は見られない。ニュース・インタビューにおいては、ある人がニュース価値のある情報を持っているものとして前もって選り出されており、情報提供者と受け手という役割が前もって制度的に確立されている。つまり、受け手であるキャスターは、「ニュースマーク」や「継続促進語」の使用を体系的に避けることで、一方的なトピック・コントロール権を保持しているのである。詳しくは、山田富秋、「会話分析の方法」、井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編、『他者・関係・コミュニケーション』、岩波書店、1995、pp.121-136、を参照。また、「制度的志向性」については、第4章の注1)を参照のこと。

2) 江原由美子、『微視的権力状況における会話分析』、科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書、1993、pp.66。

第6章 結論

1. 各章の要約

1-1. 第1章は、研究の目的・方法・意義について述べている。

(1) 本研究の目的は、建築・都市環境および生活の質の改善を目指すデザインの実態、ならびにそれと密接に結びついた環境形成活動への社会的認識について、住環境デザインにおける人々のコミュニケーションに注目し、エスノメソドロジ的視点から基礎的研究を試みることである。

(2) まず、研究の主題である相互行為としてのコミュニケーションへの注目について述べ、デザインにおける共有された理解 (shared understanding) あるいは「相互理解可能性 (mutual intelligibility)」からみた「Ethno-design-method (人々のデザインの仕方)」という研究視座を示した。

(3) 研究方法については、固有の状況における様々な文脈の中で実践されている住環境デザインの網羅的・統括的な把握ではなく、固有の状況の中に見出される本質的な実態を捉えることを基本的な方針としてあげた。つまり、特定のデザインを批判することではなく、むしろ目的的な行為に関するある種の前提(仮定)を具体化することとしてデザインを見ることである。具体的な方法は、社会的事実と人々の理解の構造を抽出し「了解可能性1)」を追及するという観点から、現場を重視した質的調査法による。本研究の課題は、今後の住環境デザインの実践に向けて有益な研究によるデザイン経験の蓄積に向けて、その前提となるべき人々の環境形成活動の実態そのものを捉えるべき基礎的段階にあるものと考えられる。

(4) 本研究は、エスノメソドロジ的のもつ哲学的基盤・知的態度のもと、住環境デザインにおける「Ethno-design-method」という事象に注目し、観察調査そして会話分析という取り組みを通じて、説明理論としての意義と可能性を模索すると同時に、住環境デザインにおけるコミュニケーション研究の重要性を示すことで、今後の学術的展開に対して有効な視点を提供するものとして位置づけられる。

住環境の獲得、とくに注文住宅を発注するという状況は、注文-受注生産ゆえに、他のあらゆる購買品あるいは商品の獲得とは異なり、設計・工事請負契約時には実際の建築物が存在しないという独特の性質を持っている。このような性質によるデザイン活動においては、コミュニケーションの内容と質こそが、将来獲得する住宅を保証あるいは評価する根拠となる2)。一方、近年にはホームページ上でのプレゼンテーションによるコンペ方式の注文受注システムやE-mail交換による打ち合わせのように、住環境デザインにおけるコミュニケーションのあり方自体の多様化によって、デザイン・コミュニケーションへの注目はますます高まりつつある3)。しかしながら、人々が実際に住環境デザインに取り組むまさにその実態と方法に注目したコミュニケーションの研究は必ずしも十分には行われてきていない。

一方、研究の理論的枠組み、哲学的基盤、そしてそれに基づく研究の方法に関する論議も積極的に展開され、さらなる理論的發展を目指そうという動きが見られる4)。人間-環境系デザイン

研究においては、人間と環境の関係に関する理論的アプローチの検討としてのトランザクショナルリズム5)への関心があげられよう。しかし、そのような立場からの研究方法への具体的展開が十分になされているとは言い難い。

1-2. 第2章は、エスノメソドロジーの概要を把握し建築計画学との関連を考察している。

(1) エスノメソドロジーとは、人々が様々な物事や出来事を日常生活の中で達成するやり方を主題に据える学問的営みである。日常世界を生きる人々は、知らず知らずのうちに常識的知識の期待に沿うように行動し推論しあっているのであり、このことから常識的知識が現実の社会を描き出すことになるのである。そのような人々の何気ない日常活動のやり方を明るみに出そうとするのが、エスノメソドロジーの基本的な研究方針なのである。

1960年代にアメリカ社会学の中から生まれたエスノメソドロジーの批判対象は、「伝統的な社会学」の実証主義的・機能主義的傾向であった。エスノメソドロジーの創始者であるガーフィンケルも、社会的事実の客観的現実を社会学の研究対象に据えるという社会学の立場に異を唱え、社会的現実とは絶え間なく行為者によって「協働達成される何か (concerted accomplishment)」であるという立場を徹底的に強調している。そして、社会的現実が相互行為という実践を通して協働達成される何かだとすれば、相互行為の行われる現場に研究関心が向けられなければならない。

ガーフィンケルは、エスノメソドロジーに「インデックス性 (indexicality)」・「相互反映性 (reflexivity)」・「説明可能性 (accountability)」などの特別な語彙を与えた。これら語彙は全く新しく生み出されたものというわけではなく、エスノメソドロジーは専門用語のいくつかを他の領域から借用している。

会話分析 (Conversation Analysis) はエスノメソドロジーから生まれたものにもかかわらず、最近では研究範囲が広がっていくにつれて、社会心理学、語用論、ディスコース分析、社会言語学、認知科学などの分野とも密接に関係してくるようになってきている。

会話分析を積極的に推し進めたサックスたちがその一連の研究6)の中でも繰り返し強調しているように、会話分析は言語そのものの研究ではない。会話分析が拠って立つ方法論的な視点の特徴は、社会的行為、つまり多種多様なありのままに生じる相互行為的な現象の諸特性を記述し分析することを目的とした分析的アプローチである。会話分析の研究対象は社会的行為の秩序・組織・規則性であり、基本的な研究方針はこのような現象の発見と分析に向けられている。

本研究の記述的立場は、ある人物がどのような言い方をし、それがどの程度の一般性を示すかという点にあるのではなく、どのような人々の微細なやり取りであれ、それは、私たちの社会生活を構成し運用する「方法 (ethnomethod)」として記述可能であり、そのような方法によって、その状況が社会現象として説明可能となっている実態を提示することにある。

近年、エスノメソドロジー的視点が影響を与えつつある関連分野における展開として、「状況的認知」に注目する認知科学分野、医師による患者への専門的な支配や権力問題に注目する医学

分野、教室という独特の秩序形成に注目する教育学分野における取り組みなどがあげられる。

(2) 小林7)によると、西山卯三による「住まい方調査」や吉武泰水らによる「使われ方研究」に端を発した初期の建築計画学には、実際の計画に対しての何らかの目標や水準を提示することを目指す性質と、建築と人間や社会との関わりの解釈に科学認知的に取り組もうとする性質が内在し、その両性質のバランスと建築計画学全体としての指向性は、時代・歴史の流れの中での社会的要請とともに微妙に変化してきたと見れる。

このような発展を総じてみると、前者への取り組みはやや活発さを失いつつあり、その根底には、社会規範的な「計画」提示の必然性の喪失と可能性の低下ともいべき状況に伴う「計画」志向的研究の行き詰まりに対する逃避が存在する。

また、従来の建築決定論・建築環境決定論的な取り組みへの批判から、近年、「人間-環境デザイン研究」の取り組みとして、例えば、アクション・リサーチ8)の視点に注目した研究9)が活発となりつつある。しかしながら、このような意欲的な取り組みに比して、「決定論的」建築計画学からの脱却が十分であるとは言い難い。むしろ逆に、今日においてもなお「決定論」から逃れられていないものとみられる。なぜならば、「計画」という概念そのものが、依然として決定や評価と不可分な関係の中で捉えられているからである。

「特定の状況に固有の課題把握とその解決」という個別多様な現象の解釈のための普遍的規範としての「計画」たるものの存在の前提が依然としてあるかぎり、それは科学的方法によって保証せざるを得ず、また、何らかの規範的価値にのっとった「計画」の目標を必然的に探し求めなければならない。そしてそれは、「いま・どのように計画することが適切であるかを、誰が・どのようにして判断するか」という計画の決定とその評価という、さらなる解釈図式的前提を導くことになる。したがって、ここにおいてもやはり従来の建築計画学研究と同様、「計画」的アプローチに対する限界と矛盾を感じざるを得ない。

よって、計画の目標・評価とその主体の問題、つまり規範的価値という問題は哲学的基盤および研究態度においてまず解消されなければならない。建築計画学研究にまず必要なのは、どのような実在論的方法によって研究の客観性を保証するかから、どのような哲学および知的態度によって研究を生活世界の現実接近させるかへの研究通念の転換ともいえる。言い換えれば、「計画」を含む総体的なデザイン活動にできる限り肉薄した「観察科学」としての建築計画学を構築する方向だとも言えるだろう。

1-3. 第3章は、社会的構造感10)と生産行為11)に関する調査研究である。

(1) 人々が当然の客体的現象として捉えている社会的認識や感覚の現状を抽出し、その社会的構造感が生成される生産行為の構造を事例を通じて詳細に把握する。

(2) 戸建住宅の建築に関わった建築主を中心とする関係者への詳細面接調査が行われた。

(3) 社会的構造感の抽出から、人々の注文することの意味や住宅の質に関する認識の欠落が見出され、生産行為の浸透構造についての考察から、一般顧客を対象とした現在の住宅供給サイドの

Build to Order 的スタンスの問題を指摘される。

①建築主にとっての住環境実現の目的が明確でなければ、B.T.O.による自己欲求実現は明らかに不可能である。

②供給時点での計画の完全性を目標とする現状の認識と取り組みは、注文に対する建築主および供給側両方にその能力の完全性を求め、そのような状況での解決方法としては、必然的にある種の想定的なテーマの提示・共有でしかなくなる。

③供給サイドの提示するテーマが、建築主にとっての住環境実現の目的ではなく、造作的なイメージやスタイルあるいは作品性である限り、個々人の生活に見合う住宅の実現を注文の意義と捉えている現在の一般の人々にとって、それはあくまで仮定でしかなく、結果として実際の生活とは大きくかけ離れたものとなる。

④建築主と関係者との媒介が以上のようなテーマの類であれば、注文住宅に関してほとんど素人も同然である建築主は、供給サイドが提示する専門的な作用に従属せざるを得ない。その結果、いかにその状況に対処したかという内容でしか、建築主は生産行為を評価できないのである。

1-4. 第4章は、建築主と専門家の「Ethno-design-method」と役割関係に関する調査研究である。

(1)注文住宅の設計打ち合わせにおいては、その場面に関係する人々(当事者・参与者・メンバー)のある際立った振る舞い(行為)が観察できる。そのような人々の振る舞い、つまり「Ethno-design-method」を建築主と専門家の役割関係という見方から考察する。

(2)都市圏における注文住宅の設計打ち合わせ現場に同席し、関係者の会話および行為を記録する観察調査を行った。それによって得られた全事例について会話分析を行い、その中から設計打ち合わせといった一つの制度的状況にみられる会話のシーケンス構造を抽出し、そこに見いだされる建築主および専門家の制度的志向性¹²⁾と、それと密接に結びついた人々の秩序現象(役割関係)を、その個別的な場において一つの協働的なプロセスの中で達成されたものとして示す。

(3)会話記録の文字化作業(トランスクリプト)は、エスノメソドロジーにおいてある程度調査の客観性や分析の妥当性を示すものとして採用されている記述方法を参照した¹³⁾。

(4)私たちは、様々なかたちの言語活動を通して社会生活を営んでいる。その中でも会話は、最も中心的な活動である。会話は、私たちにとって身近で自明であるために、会話するということ自体に注意を向けることはまずない。そして、普段の生活で会話自体に違和感を感じることもない。私たちは何らかの「方法(ethnomethod)」を共同で用いることで解決し、別に支障なく会話をしているのである。

社会学において初めて、日常活動それ自体から社会を検討し直す立場をとったのが、エスノメソドロジーであった。そして特に、このような社会的行為としての会話自体に注目したのが、サクスの「会話分析派」と呼ばれる社会学者であり、その中心的な業績として、「会話の順番取りシステム(Turn-Taking System)」¹⁴⁾があげられる。しかし、会話分析は、単に「日常

会話」のみを対象とするのではない。むしろ、何らかの組織や制度という「外形的な」影響のもとで営まれる会話の社会現象にも多大な関心がはらわれている。例えば、病院の診察場面や学校での授業、あるいはテレビのニュース・インタビューといった、様々な社会制度においてなされる会話への注目である。

住環境デザインの場面に目を向けると、そこには私たちが普段行っている日常的なコミュニケーションとは異なるコミュニケーションが存在し、それはまさに制度的状況による人々の実践であること、そして、建築主と建築専門家(例えば設計者)の間に大きな落差-非対称性-があることに気がつく。住環境デザインをめぐる人々が行う様々なプラクティスが、状況普遍的で一般的に取りだせる装置などではなく、徹底して個別の文脈に依存したものであり、状況(制度、組織)と常に相互反動的(reflexive)であることを鮮明に示すこと、それが本調査での基本的な分析視点である。

(5)注文住宅の設計打ち合わせは、一方では、建築主-専門家間の振る舞いの比較においてであるけれども、他方で、「設計打ち合わせ」という特定の場面設定の外にある会話(日常的な雑談)と比べて、それは際立っている。つまり、建築主のその振る舞いは、専門家のそれに対応する振る舞いや、雑談における同等の振る舞いにみられる特徴を欠いており、しかもここにみられない特徴をもっている。かつ、この二つの特徴は、互いに相反する方向をもつ特徴として捉えうる。

具体的には、設計打ち合わせに特有の会話のシーケンス構造として、注文者-設計者という役割関係における「否定的反応における順接」、「情報の収集と整理」、「潜在的完結点以外での割り込みと応答」、「質問的提案とデザインの協働的産出」の実践、購買者-販売者という役割関係における「情報の抑制」、「断言によるトピック・コントロール」、「沈黙と推論」の実践が見られる。そして、この人々の役割関係の実践は、その人がまさしく建築主なら建築主というアイデンティティをもってその場に登場していることと、有意味なしかたで関連している。

「状況づけられた活動」とみなされるデザインは、本研究で「Ethno-design-method」と呼ぶ実践を、その本質を明らかにする特徴として持っている。「Ethno-design-method」は、例えば住環境デザインにおいては、建築主と専門家の関係、活動、志向性、主体性、さらに知識と実践の共同体についての一つの切り口を提供するものである。これは、参与者が実践共同体(community of practice)の一部に加わって行くプロセスに関係したテーマでもある。個々人のデザイン意図が受け入れられ、社会文化的な実践の十全的参加者になるプロセスを通してデザインの意味がかたちづけられる。

本研究の見解では、デザインは、人々の頭のどこか特定のところで生じた、独立の、物象化可能な過程であるかのように、実践に埋め込まれているだけのことではない。デザインは、私たちの生活の生成的な社会的実践の欠くことのできない一部なのである。問題は、この視座を、デザインへの特定の分析的アプローチに翻訳することである。「Ethno-design-method」は、デザインを必須の構成要素とする社会的実践への関わりを記述する手段として提案されたものである。

1-5. 第5章は、「Ethno-design-method」からみた住環境デザインの事例的考察を行っている。

(1) 第4章で得られた建築主と専門家の「Ethno-design-method」と役割関係の知見をもとに、ケース・スタディを通して、個別具体的な住環境デザイン活動の内容や成果までも含めた考察を行う。

(2) 第4章の観察調査におけるNI邸(表4.1参照)を取り上げ、建築主と専門家の会話におけるトピック・コントロール(15)に注目した会話分析によって、人々のやり取りの中で具体的に「デザインの産出」がどのようにおこなわれていくのか、を例証する。

(3) NI邸固有の住環境デザインの状況に即して、その特徴的であると思われる課題「アトリエと風呂・便所の床レベル」、「1階寝室の西側の窓」、「アトリエと寝室の境界」を取り上げ、その中での人々の「Ethno-design-method」の実践の記述から、ある住環境デザインの場面では、どのような課題や問題が焦点化されており、より良い住環境の創造にとって、具体的な人々の「Ethno-design-method」が、どのようなかたちで適切に行われたのか、あるいは、その問題解決にとって支障となっていたのか、が明らかとなった。

「mismatch」Ethno-design-method」と「くずれた役割関係」の実践は、人々がそれに対して自らの限られた経験や常識を頼りに懸命に対処し、しいては、それに終始するといったコミュニケーション状況を生み出す。そういった状況の中では、建築主そして専門家の双方とも、新たな認識や理解・自己目標を引きだすまでには至ることができず、逆にそれを制限させてしまう可能性がある。そしてまた、そのこと自体を、建築主そして専門家自身が自覚・自認していない可能性がある。したがって、住環境デザインにおける種々の問題は、関係者の相互理解によって解決され、共通目的、共通認識のもとで設計・計画が実行されているという自明性こそがまず疑われなければならない。

2. 総括

本研究では、建築・都市環境および生活の質の改善を目指すデザインの実態、ならびにそれと密接に結びついた環境形成活動への社会的認識について、住環境デザインにおける人々のコミュニケーションに注目し、エスノメソドロジー的視点から基礎的研究を試みた。

そこから得られた知見とは、住環境デザインにおける建築主や専門家の制度的志向性や役割関係が、さらには、人々が当然の客体的現象として捉えている社会的認識や感覚が、その場その時の人々の協働的实践によって、まさに会話のシークエンス構造を通してこそ構成されているということである。そして、住環境デザインの内容もまた、そのような会話という相互作用形式に内在している慣習的規則や制約を通して展開されているということである。

つまり、このような住環境デザインの実態、「状況づけられた」デザイン活動の実態は、エスノメソドロジー・会話分析によって目に見えるものとなるのであり、またここに、住環境デザイン研究として、設計打ち合わせにエスノメソドロジーそして会話分析という方法論的観点を導入する最大の意義がある。そして、「デザイン」が例外なくある特定の社会的・物理的な環境に

状況づけられているものであるかぎり、その状況は「デザイン」を解釈する際に決定的に重要になる。このような当たり前の命題は、既往の研究・研究方法において必ずしも十分に組みこまれていないのである。

私たちは、目的的な行為の状況を決して完全には予想できないし、それらは絶えず私たちのまわりで変化し続けている。それゆえ、状況づけられた活動は本質的にその都度的(ad hoc)なものにならざるを得ない。「デザイン」を目的的な行為に関するある種の前提(仮定)を具体化することとして見るならば、まさに私たちのそのようなアドホックな行為を研究し、それを記述する方法を見出すことに取り組まなければならないのである。

つまりそれが、エスノメソドロジーという視野が、既往の研究・研究方法では扱えなかった住環境デザインにおける新しい事象-「Ethno-design-method(人々のデザインの仕方)」-を論じうる可能性なのである。

3. 住環境デザインへの展開と今後の課題

デザインとコミュニケーションの状況づけられた性質へ注目するエスノメソドロジー的研究の重要性については、第1章の本研究の目的で述べたが、「Ethno-design-method」はそれへの貢献の一つである。「Ethno-design-method」は、デザインとそれが生起する社会状況との関係に焦点を当てている。デザインを物理的環境の獲得と定義するのではなく、「Ethno-design-method」は、デザインを目的的な行為に関するある種の前提(仮定)を具体化することとして社会的共同参加という状況の中に置く。デザインにどのような思考過程と概念的構造が含まれるかを問うかわりに、どのような社会的関わり合いがデザインが生起する適切な文脈を提供するかを問う。この発想の転換は興味深い結果をもたらしており、それが本研究をデザインに関わる広範囲の学際的問題に関連づけているところでもある。

このことは、デザインの在処についても変化をもたらす。従来の見方では、計画(プラン)を内化し操作することによってデザインを獲得するのは個人の頭の中であった。こういう解釈のもとでは、思考と同様、デザインも個人に生起するものとなる。デザインの諸相は既存の底流にあるシステムで説明され、また、デザインの諸相自体がシステムの経験的証拠となってもいる。これらのシステムが、分析の対象を提供し、それを分析することでモデルが得られるとされる。実際のプロセスが分析される程度に応じて、それは「プラン化」される。すなわち、デザインはプランに従うものとされ、また、プランを例証するものとされる。この見方によると、デザインという活動は、プランを認識し、プランの例を補充し、状況的な条件を下敷きにはめ込んで、それを何らかの文脈に関係づける、ということになる。

しかし、本研究が目指したものはそれを一歩進めたところにある。つまり、デザインはいわば参加(共同参加・協働的实践)という枠組みで生じる過程であり、個人の頭の中ではないのであり、デザインはプランの獲得ではないのである。このことは、とりもなおさず、共同参加者の間で異なった見え方の違いによってデザインが媒介されるということである。この定義では「デザ

インする」のは共同体である、あるいは少なくとも、デザインの流れ (context) に参加している人々 (メンバー) といえよう。デザインはいわば、共同参加者に分かち持たれているのであり、一人の人間の行為ではない。例えば、住環境デザイン過程では、建築主が積み重なる参加によって極めてドラマティックに変容していくものではあるが、この変容の発生の場合と発生条件は、さらに広範囲の過程でもある。つまり、専門家たち自身が協働実践者として振る舞うことを通してどれ程変化するか、したがって、習熟されている技能でもその過程でどれ程変化するか。

「Ethno-design-method」ではこういう変化の説明はできない。しかし、こういうことが避けがたく生じることを浮き彫りにしてくれるのである。

こうした「Ethno-design-method」研究の成果は、住環境デザインの実践の中で有益なリソースとして状況的に組み込まれ活用されていくことが考えられる。例えば、近年具体的な政策課題になっている「まちづくり」や「コーポラティブ・ハウジング」における創造的な合意形成や、より多くの人々が進んで受諾できるような価値明示的な住環境デザインを創出できることとなる。

このことから同時に、住環境デザインにおける様々な共同参加者の様々な「デザインの仕方 (Ethno-design-method)」を評価し、調整し、助言するというコーディネーター的職能 (仮に「E.D.M アドバイザー」と呼ぶ) の確立の可能性が考えられるだろう。また、そのような職能の存在は、デザイン現場における実践的活動だけでなく、例えば、住宅の欠陥等に関わる訴訟といった事後的な問題への解決に大きく貢献できることとなる。建設業界をとりまく訴訟の判例自体が限られている現状の中では、特に「Ethno-design-method」による具体的な記述の資料のもと、証言・仲裁的立場としての「E.D.M アドバイザー」の価値と意義が高く評価されることとなるだろう。

また、そのような職能が様々な社会的実践の中で活動し深く関わることを通して、「Ethno-design-method」研究が臨床的に発展していくことが考えられ、さらには、コラボレーション、ワン・コミュニティ理論、アクション・リサーチの本質的・実質的展開をも促進させるだろう。

そしてまた、このような発想の転換によって、本研究の枠組みは、デザインにおける目的的行為、実際の相互作用の諸事例、さらに、一般的構造には還元できない創発的過程に本質的な役割を果たすことになる。このような実践中心的なアプローチの基本的動向の一つとして、デザインの記述にあたって、事前にアプライオリなコードや構造の組み合わせに基づいて記述する方法の有効性に疑問を投げ掛けることがあげられる。その代わりに、社会秩序に対する行為者の生産的な貢献に焦点を当てることによって、行為の意味の交渉 (negotiation)、予知不可能な側面がより大きな役割を持ったものになってくる。このような観点の変化による影響は大きい。これによってコミュニケーション、さらにデザインについての記述が大きく変わることが予見されるが、どう変わるかについてはほとんどわかっていない。しかし、このような取り組みによって、デザインというものを、プランと過程、人々の心的表象や経験などの相互浸透 (transaction) として再

考することを促すことになるだろう。

最後に、今後に残された課題として、特に以下の4点を上げる。

- ①環境評価 (POE) における「Ethno-design-method」の意味。
- ②住環境デザインにおける「主体性 (agency)」に関する理解と記述。
- ③建築教育における「専門家」化過程に関する理解と記述。
- ④観察調査におけるビデオ分析の導入の有効性とそのトランスクリプト。

①は、第4章5-3の図4.7で示した「住環境デザインのダイナミズム」に関わる課題であり、「デザイン」というものへの「評価」の問題である。どのようにデザインすることが適切なのか、あるいは、どのようなデザインが適切であったのかという「評価」は、「状況づけられた活動」の本質を明らかにする特徴として「Ethno-design-method」という実践をもっているデザインの中において、どのようなかたちで可能なか、あるいは不可能なのかを再考することである。

②は、「状況づけられた活動」としてのデザインにおいて、共同参加者が、デザインという実践共同体 (community of practice) の一部に加わって行くプロセスの中で、社会文化的な実践の十全的参加者になるために、「行為の主体であること (agency)」とはどのように位置づけられ、それはどのようなかたちで「Ethno-design-method」として実践されているのかへの理解と記述である。

③は、本研究において、デザインを共同参加・協働実践の中で捉えたのと同様、建築の教育および学習も、ある特定のタイプの (例えば大学教育という) 社会的共同参加という状況として、その実態と構造の理解と記述を試みる。特に建築設計教育の場においては、学習者は、熟練者 (教員) の実践活動に参加はするものの、それは限定されたレベルであり、しかも最終的な産物に対しては、ごく限られた責任しか負わないという関与のあり方が存在する。もし、建築専門教育が「専門家」の育成に相当の役割を果たしているならば、このあり方は、当初は限定された極めて非対称的な共同参加ではじまるが、潜在的には、学習者を「専門家」へと転身させる力を持っていることを意味する。このテーマは、②と相互関連的に繋がった、共同参加によるクライアントのデザインの習熟過程に注目する研究へと展開する可能性がある。

④は、研究方法、主に観察・記録方法に関する再考である。観察調査におけるビデオ分析に関しては、社会学、教育学、認知科学の分野においてすでに試みられている¹⁶⁾。それらを参考に、今後、住環境デザインの現場でのビデオ観察の導入を実験的に試みる。

注

- 1) 見田宗介、『現代社会の社会意識』、弘文堂、1979、pp.139-140。
- 2) 森傑・舟橋國男・鈴木毅・小浦久子・木多道宏、「戸建注文住宅における生産行為に関する研究」、『都市住宅学会』第6回学術講演会審査付部門、1998、pp.71-76。
- 3) 『建築Web』、<http://www.kentiku-web.com/index.htm> 等を参照。
- 4) 小島孜、「創造的合意形成に向けての方法論的考察 芦屋西部地区復興まちづくりの中間総括」、『日本建築学会計画系論文集』第524号、1998、pp.327-332。
- 5) トランザクショナリズムとは、環境と人間とを一つの行動の中の働きとみる立場で、全体をなす各々の側面間の変化しつつある関係性に焦点を当て、人とそのコンテキストは互いに定義しあい、全体的事象の意味と性質を決めると仮定する視点である。詳しくは、舟橋國男、「環境行動研究におけるトランザクショナリズムに関する考察」、日本建築学会近畿支部研究報告集、1989、pp.237-240、を参照。
- 6) Harvey Sacks, "Lectures on conversation", in Gail Jefferson (ed.), with an introduction by Emanuel A. Schegloff, Oxford UK & Cambridge USA, Blackwell, First published in one paperback volume 1995, First published as two volumes 1992.
- 7) 小林秀樹、「計画研究の方法と理念」、『論としての建築計画研究 集合住宅計画研究を中心として』、日本建築学会大会研究協議会資料、1985、pp.83-105。
- 8) 舟橋國男、「環境行動デザイン研究と計画理論」、日本建築学会編、『人間-環境系のデザイン』、彰国社、1997、pp.34-55。
- 9) 例えば、乾亨・延藤安弘・森永良丙、「価値づくりの計画プロセスにおける住み手の計画側への役割の浸透 ユーコートの計画プロセスにおける住み手とコーディネーターの相互浸透性1」、『日本建築学会計画系論文集』第446号、1993、pp.53-63、倉原宗孝・後藤由紀、日景敏也、「子どもたちの体験活動による住民参加のまちづくり促進に関する考察」、『日本建築学会計画系論文集』第483号、1998、pp.179-188、があげられる。
- 10) 社会的構造感とは、「場の成員が認知し確信し当然視しているものとしての日常的リアリティ感 (commonsense reality) の構造」あるいは「社会的世界が自然な秩序 (natural order) であるという感覚や思い込み」を意味する。K・ライター、高田眞知子訳、『エスノメソロジーとは何か』、新曜社、1987。
- 11) ここでいう「生産行為」とは、建築が生産される全ての過程において、人々が経験や情報、価値観の折り重なりによって形成する行為とその繋がりであり、本研究では、都市圏に住む建築主を中心にそれを捉えている。
- 12) 社会的な制度（国家や学校といったものから経済体制や生活様式にいたるまで、そしてこれらの基盤となる観念や行為も含めた、社会関係を維持運営するためにつくられたすべてのもの）で設定された仕事や役目に対する人々の志向性のことをいう。そのような制度的志向性が見いだされる会話として、病院の診察場面や学校での授業、あるいはテレビのニュース・インタビューと

いった会話が注目されている。例えば、John Heritage, "Analyzing News Interviews : Aspects of the Production of Talk for an 'Overhearing' Audience" in T. van Dijk(ed.), Handbook of Discourse Analysis, vol. III : Discourse and Dialogue, Academic Press, 1985.

- 13) 清矢良崇、『人間形成のエスノメソロジー 社会化過程の理論と実証』、東洋館出版社、1994、pp.157-161。
- 14) H. Sacks, E. Schegloff & G. Jefferson, A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation, Language 50(4), 1974, pp.696-735.
- 15) 人々が、その制度的志向性にしがたって、会話のシークエンス構造を維持する、あるいはしようとするをいう。例えば、ニュース・インタビューの会話がわかりやすい。ここでは、日常的な会話では頻繁に見られる、「えー」「すごい」などの情報に対して付与されたトピック展開をさらに促進する役割を果たす、私的な評価を伴った反応（ニュースマーク）や、「ふーん、ええ」などの情報提供者にトピックの展開を継続させる反応（継続促進語）は見られない。ニュース・インタビューにおいては、ある人がニュース価値のある情報を持っているものとして前もって選ばれており、情報提供者と受け手という役割が前もって制度的に確立されている。つまり、受け手であるキャスターは、「ニュースマーク」や「継続促進語」の使用を体系的に避けることで、一方的なトピック・コントロール権を保持しているのである。詳しくは、山田富秋、「会話分析の方法」、井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編、『他者・関係・コミュニケーション』、岩波書店、1995、pp.121-136を参照。
- 16) 山崎敬一・西阪仰編、『語る身体・見る身体 <附論>ビデオデータの分析法』、ハーベスト社、1997。

参考・引用文献一覧

- 1) 秋葉昌樹、「エスノメソドロジー類型学と『教育の臨床エスノメソドロジー』の可能性」、『現代社会理論研究』6、現代社会理論研究会、1996、pp.99-108。
- 2) 秋葉昌樹、「保健室における<相談>のエスノメソドロジー的研究」、『教育社会学研究』第57集、東洋館出版社、1995、pp.163-181。
- 3) 阿部耕也、「子供の電話相談における類型化の問題」、『教育社会学研究』第41集、東洋館出版社、1986、pp.151-165。
- 4) アラン・クロン、山田富秋・水川喜文訳、『入門エスノメソドロジー 私たちはみな社会学者である』、せりか書房、1996。
- 5) 池上博史、『よくわかる住宅産業』、日本実業出版社、1995。
- 6) 伊東康子・高田光雄、「住宅復興過程における親族関係と居住ニーズに関する事例研究」、『都市住宅学会』15号、1996、pp.90-95。
- 7) 伊東康子・高田光雄、「戦後日本における<家族と住居の近代化>に関する研究 千里ニュータウンにおけるケーススタディ」、『日本建築学会計画系論文集』第514号、1998、pp.71-78。
- 8) 乾亨・延藤安弘・森永良丙、「価値づくりの計画プロセスにおける住み手の計画側への役割の浸透 ユーコートの計画プロセスにおける住み手とコーディネーターの相互浸透性1」、『日本建築学会計画系論文集』第446号、1993、pp.53-63。
- 9) 井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編、『他者・関係・コミュニケーション』、岩波書店、1995。
- 10) 今村仁司編、『現代思想を読む辞典』、講談社現代新書、1988。
- 11) エイムス・ラボポート、大野隆造抄録担当、「人間-環境理論の構築へのアプローチ」、『環境行動研究の動向と展望』、日本建築学会環境行動研究に関する国際シンポジウム資料、1997、pp.3-5。
- 12) 江原由美子、『微視的権力状況における会話分析』、科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書、1993。
- 13) エリオット・フリードン、進藤雄三・宝月誠訳、『医療と専門家支配』、恒星社厚生閣、1992。
- 14) 北澤毅、「規則適用過程における行使者の意志<規則に従う>とはどういうことか」、『ソシオロジ』99号、社会学研究会、1987、pp.55-71。
- 15) 北沢毅・古賀正義編著、『<社会>を読み解く技法 質的調査法への招待』、福村出版、1997。
- 16) 倉原宗孝・後藤由紀、日景敏也、「子どもたちの体験活動による住民参加のまちづくり促進に関する考察」、『日本建築学会計画系論文集』第483号、1998、pp.179-188。
- 17) クリフォード・ギアーツ、吉田禎吾他訳、『文化の解釈学』、岩波書店、1987。
- 18) ケネス・ライター、高山真知子訳、『エスノメソドロジーとは何か』、新曜社、1987。
- 19) 小島孜、「創造的合意形成に向けての方法論的考察 芦屋西部地区復興まちづくりの中間総括」、『日本建築学会計画系論文集』第524号、1998、pp.327-332。
- 20) 小林秀樹、「計画研究の方法と理念」、『論としての建築計画研究 集合住宅計画研究を中心として』、日本建築学会大会研究協議会資料、1985、pp.83-105。
- 17) サーサス・ガーフィンケル・サックス・シェグロフ、北澤裕・西阪仰編訳、「日常活動の基盤」、『日常性の解剖学』、マルジュ社、1989。
- 21) 沢田知子・丸茂みゆき、「二段階供給方式による集合住宅の居住過程に関する考察 ライフステージによる住要求変化からみた住宅供給方式について」、『都市住宅学会』11号、1995、pp.68-73。
- 22) ジェイムズ・ジェローム・ギブソン、古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻訳、『生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探る』、サイエンス社、1985。
- 23) 住宅政策研究会編、建設省住宅局住宅政策課監修、『新時代の住宅政策 第七期住宅建設五箇年計画のポイント』、ぎょうせい、1996。
- 24) ジョージ・サーサス、北澤裕・小松栄一訳、『会話分析の手法』、マルジュ社、1998。
- 25) ジョン・ラングショー・オースティン、坂本百大訳、『言語と行為』、大修館書店、1980。
- 26) 清矢良崇、『人間形成のエスノメソドロジー 社会化過程の理論と実証』、東洋館出版社、1994。
- 27) 西阪仰、「順番取りシステム再訪」、『言語』、24(7)、1995、pp.100-105。
- 28) 西阪仰、「やりとりのなかのアイデンティティ」、『言語』、24(13)、1995、pp.114-119。
- 29) 日本建築学会編、『人間-環境系のデザイン』、彰国社、1997。
- 30) ハロルド・ガーフィンケル他、山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳、『エスノメソドロジー 社会学的思考の解体』、せりか書房、1987。
- 31) 船津衛・宝月誠編、『シンボリック相互作用論の世界』、恒星社厚生閣、1995。
- 32) 舟橋國男、「環境行動研究におけるトランザクショナリズムに関する考察」、日本建築学会近畿支部研究報告集、1989、pp.237-240。
- 33) 舟橋國男、「環境行動論の視点から」、『建築雑誌 特集/新しい建築計画学』、日本建築学会、1997、pp.8-11。
- 34) フランツ・カフカ、池内紀編訳、「掟の門」、『カフカ短編集』、岩波文庫、1987、pp.9-12。
- 35) 松村秀一、「戸建住宅生産主体の分類可能性に関する考察」、『財団法人 住宅研究総合財団 研究年報』No.26、2000、pp.31-42。
- 36) 松村秀一・黒野弘靖・日高顕一・江袋聡司・小野宗良・斉藤朝秀、「注文住宅設計における意思決定に関する研究」、『日本建築学会学術講演梗概集』、1989、pp.497-504。
- 37) 見田宗介、『現在社会の社会意識』、弘文堂、1979。

- 38) 三島俊介、『住宅産業のすべてが一目でわかる本』、産能大学出版部刊、1994。
- 39) 三島俊介・檜山純一、『住宅産業のマーケティング戦略』、産能大学出版部、1996。
- 40) 森傑・舟橋國男・鈴木毅・小浦久子・木多道宏、「戸建注文住宅における生産行為に関する研究」、『都市住宅学会』第6回学術講演会審査付部門、1998、pp.71-76。
- 41) 山崎敬一・西阪仰編、『語る身体・見る身体 <附論>ビデオデータの分析法』、ハーベスト社、1997。
- 42) 山田富秋・好井裕明編、『エスノメソロジーの想像力』、せりか書房、1998。
- 43) 好井裕明編、『エスノメソロジーの現実 せめぎあう<生>と<常>』、世界思想社、1992。
- 44) ルーシー・A・サッチマン、佐伯胖監訳、上野直樹・水川善文・鈴木栄幸訳、『プランと状況的行為 人間-機械コミュニケーションの可能性』、産業図書、1999。
- 45) Amos Rapoport, "AN APPROACH TO THE CONSTRUCTION OF MAN-ENVIRONMENT THEORY", in W.F.E. Preiser (ed), Environmental Design and Research (EDRA4), Stroudsburg, PA, Dowden, Hutchinson and Ross, 1973, vol 2, pp.124-135.
- 46) A. V. Cicourel, "Cognitive Sociology", penguin, 1973.
- 47) Clifford Geertz, "The Interpretation of Cultures", Basic Books, 1973.
- 48) Christian Heath, "The Delivery and Reception of Diagnosis in the General-Practice Consultation", in P. Drew & J. Heritage (eds.), Talk at Work: Interaction in Institutional Settings, Cambridge University Press, 1992, pp.235-267.
- 49) C. Goodwin, "The Professional Vision", American Anthropologist, 1994.
- 50) C. Goodwin, "Seeing in Depth", Social Studies of Science, 25, 1995.
- 51) D. T. Helm, W. T. Anderson, A. J. Meehan & A. W. Rawls (eds.), "The Interactional Order: New Directions in the Study of Social Order", Irvington Pub., 1989.
- 52) D. Boden & D. H. Zimmerman (eds.), "Talk & Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis", Polity Press, 1991.
- 53) Gary T. Moore, D. Paul Tuttle and Sandra C. Howell, "ENVIRONMENTAL DESIGN RESEARCH DIRECTIONS: Process and Prospects", Praeger Publishers, 1985.
- 54) Harvey Sacks, "Lectures on conversation", in Gail Jefferson (ed.), with an introduction by Emanuel A. Schegloff, Oxford UK & Cambridge USA, Blackwell, First published in one paperback volume 1995, First published as two volumes 1992.
- 55) H. Garfinkel, "Studies in Ethnomethodology", 1967.
- 56) H. Mehan, "Learning Lessons: Social Organization in the Classroom", Harvard University Press, 1979.
- 57) H. Mehan, "The School's Work of Sorting Students", in D. Boden & D. H. Zimmerman (eds.), Talk & Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis,

- Polity Press, 1991, pp.71-90.
- 58) H. Mehan & H. Wood, "The Reality of Ethnomethodology", John Wiley & Sons, 1975.
- 59) John Heritage, "Analyzing News Interviews: Aspects of the Production of Talk for an 'Overhearing' Audience" in T. van Dijk(ed.), Handbook of Discourse Analysis, vol. III: Discourse and Dialogue, Academic Press, 1985.
- 60) J. J. Gibson, "The Ecological Approach to Visual Perception", Boston Houghton Mifflin Company, 1979.
- 61) J. L. Austin, "How to Do Things With Words", 1962.
- 62) J. Schenkein (ed.), "Studies in the Organization of Conversational Interaction", Academic Press, 1978.
- 63) L. Suchman, "Plans and Situated Actions: The problem of human-machine communication", Cambridge University Press, 1987.
- 64) L. Suchman, "Do Categories Have Politics?", CSCW.2, 1994, pp.177-190.
- 65) M. F. Rogers, "Sociology, ethnomethodology and experience", Cambridge University Press, 1983.
- 66) Paul ten Have, "Talk and Institution: a Reconsideration of the 'asymmetry' of Doctor-Patient Interaction", in D. Boden & D. H. Zimmerman (eds.), Talk & Social Structure: Studies in Ethnomethodology and Conversation Analysis, Polity Press, 1991, pp.138-163.
- 67) P. Drew & J. Heritage (eds.), "Talk at Work: Interaction in Institutional Settings", Cambridge University Press, 1992.
- 68) Roy Turner (ed.), "Ethnomethodology", penguin, 1974, originally published as Purdue Symposium on Ethnomethodology, 1968.
- 69) W. Handel, "Ethnomethodology", Oxford University Press, 1980.
- 70) Y. Engestrom & D. Middleton (eds.), "Cognition and Communication at Work", Cambridge University Press, 1996.

研究業績

- 1) 高岡伸一・三宗知之・森傑・紙野桂人・舟橋國男・奥俊信・小浦久子・木多道宏、「駅空間の地域特性に関する基礎的研究(その1)」、『日本建築学会近畿支部研究報告集』第36号・計画系、1996、pp.953-956。
- 2) 森傑・三宗知之・高岡伸一・紙野桂人・舟橋國男・奥俊信・小浦久子・木多道宏、「駅空間の地域特性に関する基礎的研究(その2)-住宅地域に立地する駅の場合について-」、『日本建築学会近畿支部研究報告集』第36号・計画系、1996、pp.957-960。
- 3) 三宗知之・森傑・高岡伸一・紙野桂人・舟橋國男・奥俊信・小浦久子・木多道宏、「駅空間の地域特性に関する基礎的研究(その3)-観光地域に立地する駅の場合について-」、『日本建築学会近畿支部研究報告集』第36号・計画系、1996、pp.961-964。
- 4) 小浦久子・高岡伸一・三宗知之・森傑・紙野桂人・舟橋國男・奥俊信・木多道宏、「駅空間の地域特性に関する基礎的研究(その1)」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-1(都市計画)、1996、pp.259-260。
- 5) 森傑・三宗知之・高岡伸一・紙野桂人・舟橋國男・奥俊信・小浦久子・木多道宏、「駅空間の地域特性に関する基礎的研究(その2)-住宅地域に立地する駅の場合について-」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-1(都市計画)、1996、pp.261-262。
- 6) 三宗知之・森傑・高岡伸一・紙野桂人・舟橋國男・奥俊信・小浦久子・木多道宏、「駅空間の地域特性に関する基礎的研究(その3)-観光地域に立地する駅の場合について-」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-1(都市計画)、1996、pp.263-264。
- 7) 森傑・舟橋國男・鈴木毅・小浦久子・木多道宏、「戸建注文住宅における生産行為に関する研究」、『日本建築学会近畿支部研究報告集』第38号・計画系、1998、pp.9-12。
- 8) 森傑・舟橋國男・鈴木毅・小浦久子・木多道宏、「戸建注文住宅における生産行為に関する研究」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』E-1(建築計画I)、1998、pp.1025-1026。
- 9) 森傑・舟橋國男・鈴木毅・小浦久子・木多道宏、「戸建注文住宅における生産行為に関する研究」、『都市住宅学会』第6回学術講演会審査付部門、1998、pp.71-76。
- 10) 森傑・舟橋國男・鈴木毅・木多道宏、「エスノメソドロジーの方法に関する基礎的考察 住環境デザインにおけるエスノメソドロジーに関する研究1」、『日本建築学会計画系論文集』第540号、(2001年2月掲載予定)。
- 11) 森傑・西岡絵美子・上月真弓、「住宅設計における建築主と専門家との非対称性に関する研究」、『財団法人 住宅研究総合財団 研究年報』No.27、(2001年掲載予定)。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、大阪大学大学院舟橋國男教授に終始ご指導とご鞭撻を賜りました。ここに謹んで感謝の意を表します。

また、本論文の校閲の労をおとり下さり、有益なご助言とご指導を賜りました、大阪大学大学院柏原士郎教授、吉田勝行教授、木多道宏助教授に謹んで謝意を表します。

さらに、有益なご助言とご支援をいただいた北海道大学大学院奥俊信教授、大阪大学大学院鈴木毅助教授、小浦久子助教授、李斌助手、川端修技官に対し心より感謝致します。

この他、常に励ましていただいた卒業生諸氏、ならびに様々なかたちでご協力いただいた方々に深く感謝致します。

